
IS / A & R時々D

鉄 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS / A & R 時々D

【Nコード】

N5967S

【作者名】

鉄 桜

【あらすじ】

何となくISを題材に書いてみたただけだったりする。葵を他世界へ送り込みたかったんだ。ただそれだけなんだ。タイトルのIS / A & R 時々Dは”IいやあS失敗した/A葵さんとRラミエルさん時々Dデモンベイン”の略称です。気分を決めたから意味は無い。

* 注意、この作品の主人公である”九重・葵”は作者の別作品”葵と精霊と九十九神と悪魔と…”の主人公と同一です。

第1話「来ちゃった」 (前書き)

やっちゃった…。続くかは微妙かな？

このまま短編としても使えそうだしね。

じゃ逝ってみよう…。じゃない！行ってみよう！！

第1話「来ちゃった」

どうも！九重・葵だ！突然だが俺は今“IS”が存在する世界に居る。それも“篠ノ之・束”がISを発表する十数年前の世界に來ていた。今は年月も経っているからIS学園もキチンとあるよ。

それと主人公の“織斑・一夏”がIS学園に入学していないのはテレビや新聞、ネットで報道されていないことからまだまだ小学校か中学校のどちらかに通っている歳だろう…多分。特に調べてないからわからないのよ…。

ここでまあ、いや、お前マジで何言っているの？なんでここに居るの？バカなの？死ぬの？と言いたい気持ちわかる。俺も言いたいからな。というか死なないし！誰だ！言った奴は！？……ふうふう、まあいい。続きだ。

それでまあ、この世界は現実世界に居た時に好んで読んでいたライトノベルの世界だった。このISというのは俺の好きなメカ娘（機械を纏う女の子）が出てくるので愛読していた。そのため多少は物事がわかる。

こほんっ、それでだな。この世界に來る前の俺は木星周囲にある衛星の1つカリストで資源採掘をしていたんだ。見渡すばかり氷だったり極寒の吹雪が気持ち的に寒そうだなあ、と思ったりしていた。

そんな時だ。とある作業日、驚くことにメタトロンが採掘されたんだ。なんで“ネギま！”の世界にあるんだよ、と考えさせられたけど、まあそんなものだよねと無理矢理納得することにした。

それでまあメタトロン技術の実験を繰り返したわけだ。技術として利用するに当たって実験は必要不可欠だからな。知識として知ってはいても実際に触ったことが無いとどんな失敗をするかわからないのよ。

で、ある程度、安全に対する確信を持つて更に技術確認をした後で試作で“アンチプロトンリアクター”を開発した。試作品だけでも莫大なエネルギーを供給できることから相転移機関に並んでエネルギー問題を解決してくれる技術の1つになっただろうね。

それでまあ時間的に暇だったから当初から世界移動の実験でもしてみるか、と考えたわけだ。麻帆良でゴタゴタを起こしちゃったから暫くは帰れないのもあつて時間には余裕があつたしね。

それで世界間を渡るための次元エンジンを起動して空間に穴を開けて実験を開始した。最初は特殊な位置信号を発信する機械を決じ開けた空間に放り込んでどこに辿り着くのかという観察を主とした実験だ。

それで単調な実験も終わりを見せはじめた時なんだが…うん、まあ、その…飲んでいたコーヒーを床に零しちゃってさ。それを拭こうとしゃがんだら足を滑らせて…決じ開けた空間に誤って落ちました！

があああ！…うっさいよ！ドジ言っなし！…バナナじゃないだけまだマシだろうが！…わかつてるよ！そんなに変わらないよ！

！ちくせう…。

まあ落ちる瞬間にラミエルさんが緊急回線で非常事態を知らせてくれたし、この世界に来てからも特殊な救難信号を発信し続けているからいつか見つけてくれるかもしれない。いや、俺のほうから帰るけどね！？帰るよ！

でもまあ色々と勿体無いでしょ？この世界の技術を出来る限り吸収してから帰っても罰は当たるまい。それから帰ることにしてもいいかな、と考えたんだ。

……。

さて、この世界の特徴であるISだが正式名称を“インフィニット・ストラトス”と言い、宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツとのことだ。

うん、女性にしか使うことができないというのはアレだけ一つの技術体系として見れば技術的発生が突然過ぎるほどに突発的で歪だが面白いと思う。なんで男には使えないのかね？これは。

まあそれは今いいとして宇宙とはどの世界でも人類の夢であり希望だね。ただねえ、ここで面白いことにこの世界では宇宙開発が進まず頓挫しているんだ。物語としては知っていたはずなんだけども思わず苦笑してしまったよ。

個人装備であるIS自体は優れた性能をしているのに宇宙船などの開発が遅れていて外宇宙以前に比較的近い火星や木星にも進出できない。これでは宝の持ち腐れもいいところだとISが発表されてから数年ほど内心で笑わせてもらったものだ。

殆どが苦笑だったけどな。馬鹿を嘲ることはしても夢を鼻で笑うような馬鹿なマネはしないよ。

それでな？結局、ISの高い性能を持て余したこの世界の人類は案の定、兵器への転用を考えた。この時は悲しかったね。夢を叶えるための希望の機械が戦争で血に塗れることになるわけだからさ。

それでもまあ強力過ぎる兵器はどこの国も危険だとわかっているんだ。余程の戦闘狂でもない限りは即戦争に踏み切りはしない。そこで各国が話し合って揉めに揉めてやっとのことで決まったことがある。

それは言ってしまうえば単純なことでISを一競技^{スポーツ}にしてしまおうと考えたんだな。事ここに至って漸く世界は落ち着きを取り戻し始めたことになる。まあ裏では各国のドロドロとした思惑なんかが見え隠れしていたけどね…。

これだから権力者はイヤなんだ。黒い考えは自分の頭の中だけにしてくれと俺は言いたい。

言っただけ無視されたけどね。当時、ISが初めて世に出た時に世界が混乱してガソリンとかその他の税金が一時期急上昇したんだ。その時に日本政府に軽く抗議の電話とメールをしたんだけど、その時の電話担当が何を言ったと思う？

こう言っただ。 「貴重なご意見ありがとうございます。今後の参考にさせていただきます。それでは失礼致します」だってよ！当たり障りないこと言いやがってさ！

まあ国民一人一人を相手になんかしてられないという状況もわかるから本気で怒っていたわけじゃないんだけどね。……こんなのはどうでもいいことだな。すまん、話を続けよう。

それでな。あー、どこまでだったか？…あー、そうそうスポーツな。これによつて各国はIS開発に莫大な予算を投入して技術を磨き出したわけだよ。

その中で日本の立場が非常に微妙だったのは誰（何）のせいだったのか。弱腰政治のせいなのか、それともISの生みの親であるのが日本人である篠ノ之・東博士だからなのか、または別の何かが原因なのか。

とにかく世界各国は日本に難癖を付けてきたわけだ。東博士が作ったISのせいで世界が一時期混乱したんだから日本が責任持つてISの教育機関を作れ、つてな。しかも運営費を全部、日本が出せつて言うんだよ？流石、お米屋さんは強いです…。

そんなわけでISのためだけに広大な教育施設を日本は言われるがまま建造したのよ。本当に日本は政治的立場が驚くほど弱えと思つた。これでいいのか日本…と俺も心配したほどだ。

それと前後してアラスカ条約なるものが世界で締結されてしまった。正式名称は、“IS運用協定”。俗称ではIS条約とも呼ばれている。内容を目にするとマジで泣けてきた。日本マジ弱え、と本気で感じた。

この条約では軍事転用が可能になったISの取引などを規制すると同時にISの技術を独占的に保有していた日本への積極的な情報開示とその共有を定めた協定だ。当然IS学園もこの協定に基づい

て設置されている。

簡単に言つと「独り占めするなよ!」「え?え?え?」「絶対に隠すなよ!」「え?え?え?」「よし!情報全部寄越しやがれ!」「え?え?え?」「でも金はお前が出しな!」「え?え?はあ!?!」ということだ。

ヒドイ、これはヒドすぎるって…。

そして無事?に建設され開校したのが“公立IS学園”だ。世界中のIS操縦者がやってくることになっていたよ。国際色がスゴイ豊かだった。それでも開校されてから数年ほどは研究機関という面が強かったけどね。

さて、どうしてちょこちょこ細かいことを言うかを言つとだな。うーん?あー、その説明をするとなると俺“達”がこの世界に來た時の話から始めないとならない。…あ?俺“達”だよ?

ええ、俺と“ラミエルさん”ですよ…。

…だから、うつさい!いつも通りラミエルさんを首にかけていたんだよ!待機状態はペンダントだしな!…巻き込んで悪いとは思つてるよ!でも1人じゃないんだ、と安心もしているんだよ!悪いか!?

………すまない、少し取り乱した。

………。

それでだな。当時、この世界に來た時にまずしたのは資金の調達は勿論だが大事なのは戸籍と拠点の確保だった。殆どはラミエルさ

んが準備を整えてくれたから問題なかった。持つべきは頼れる家族だよ！マジで助かったよー…。

それでまあ調達した資金で比較的首都圏寄りの横浜に拠点を築いたんだ。また喫茶店でも良かったんだけど色々と研究する場所が欲しかったから“技術開発研究所クレイドル”にした。もう名前だけでバリバリの科学者ですな！

当研究所の開設は今から10年以上前だ。小さな研究所だがこの時代では画期的な、または独創的な技術を発表しては世界から評価を得ている。小規模だが総合的に優れた技術力を示していることからその筋の業界では結構有名だったりする。

その筋で当時からIS学園内にある開発部へのスカウトが今も後を絶たない。それに断り続けている理由として研究することは嫌いじゃないけど自分の研究内容をIS一本に絞るのはイヤだったというもある。

俺しか研究員は居ないから研究所はマジで小さいけどね。これでも愛着あるのよ。

あ、ごめん、ウチにはもう1人？居るんだった。そう、ラミエルさんです！この子が居てくれるからある意味人手は足りている、と言うか半端な実力じゃ邪魔にしかない。データ整理や蒐集って大変なんだよ…。

育てる楽しみというのもあると言えばあるけど俺はその辺り積極的にはないからゴメンナサイかな。あつ、でもでも家族は別だよ。ウーリやマリーのそれぞれには色々と教えたしね。まあ今それは置いておくでしょう。

……。

それである日、俺がのんびりとお茶を飲みながらネット内を散策していたわけよ。…来たね。来たのだよ、アレが。そうISだ。ネット上に篠ノ之・束がISの情報をアップしていやがったんだ。全世界に向けて、な。

その時は眉唾物だ、と世界の殆どが…いや全ての人がISを否定した。曰く「そんな馬鹿げた物できるはずがない」、曰く「机上の空論も甚だしい」、曰く「現実的ではないな。君は一から科学を勉強し直すべきだ」…。

篠ノ之・束は他人からの評価を大して気にしていなかったようだ
が散々な酷評だった…。

流石に酷くない？と思った俺はメールで賛同する意思を送りましたよ。民族的には同族だしね。何だかんだと考えているけどそこそこ応援しているのよ。素直にスゴイとも思ったしね。

それに俺もまだ心は日本人でしょ？この世界のじゃないけどさ。
でもこの世界の日本に在住しているわけだから少しくらい支持しても罰は当たらないよね。

世界に変化が訪れたのはそれから1ヵ月後のことだった。休憩時に俺がコタツ（季節的にどうよ？）に入ってテレビを見ていたんだ。胸元に居るラミエルさんはネットに接続して世界各国の重要情報を攫っていた。趣味だったんだよ…。

それでネットに接続して情報を攫っていたラミエルさんを見つけ

たんだよ。それが何かと言うとだな。誰かが世界各国の軍事施設に対して無差別と言っていいほど手当たり次第にハッキングしていることだ。

日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキングされて、総数2341発以上のミサイルが発射されたんだ。でも、ここで世界を驚愕させることが起きた。

発射されたミサイルの約半数をIS“白騎士”が迎撃した上に、それを見て白騎士を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破したんだ。この事件に世界は恐怖しただろうねえ。

だけど、奇跡的にその時の死者は皆無だった。負傷者は多数出たかもしれないけど命あつてのモノダネともいうし、気にしなくてもいいはずだ。

そして、あの事件以降、ISへの関心は高まること高まること。すごい関心のしようだっただな。全世界の軍事施設から大陸弾道ミサイルやテポドン、トマホークなどの大量のミサイル群が押し寄せたのに半数を排除しきつたのだからそれも仕方ない。

しかし、ラミエルさん情報から判断するにこのハッキングを行ったのは篠ノ之・東本人であり、あの事件は世界にISの価値を示すために行ったマッチポンプだったのかもしれないということだった。

自作自演とか、パネエ…。

因みに篠ノ之・東がISを発表してから1カ月後に起きた事件、これを“白騎士事件”と言う。そのままじゃない？と思った俺は悪

くないと思う。もう少し捻れば……いや、単純なほうがわかり易いか。

……。

それから数カ月はIS開発や法整備、世界の秩序などと色々と目まぐるしく変化した怒涛の世界情勢だった。テレビなどのメディアや新聞でISのことが載らなかったことがないくらいだったしね。正に世界はIS一色と言ってもいい年だった。

そんな数ヶ月間の時に一通のメールが届いたんよ。誰からかとうイルスチェックしてからメールを開いてみたら驚いたことに“あの嫌いで有名な篠ノ之・束”だった。

どこで繋がった？知り合いでもないのにどこで繋がった？……わかった！これはドッキリか！！カメラはどこだ！？この角度で格好良く映っているのか！？

などと当時は信じられないあまり取り乱していた気がする。それとはともかくメールの内容を確認してみると何のことは無い。ただのお礼の返信だった。IS発表時にただ1人だけ賛同したのが俺だったらしい。それが交流の始まり。

何気に束博士はある程度の興味があれば義理を果たすようだ。最低限だけど、限定的な人しかやらないけど……あれ？当時のことを振り返っているけど、この時の俺って悲しいほどに束博士と接点なくね？実際始まりは冷たい印象だったけど……。

そう思っていたのも時間の問題だった。なぜかと言うと束博士のほうで随分前から俺が学会に発表している論文を全て読んでいたら

しい。そこから興味を覚えていつの日か話してみたいと思われていたとか。

そこへ俺からのメールですよ。知らないこととはいえ俺は「やべえ…」と思ったね、うん。そんなに前から目を付けられていたのかと怖くなった。学会に発表なんてするんじゃないかな…。

まあそれも直ぐに勘違いだとわかったから心配や不安は杞憂に終わったんだけどさ。科学者として興味があるだけだったみたいなんだ。内心ドキドキしていたのは皆とお兄さんの極秘事項だよ？

それから暫くは簡単なメールや電話でお互いに連絡を取り合うようになっていった。それでまあ何度か直接、会うこともあったんだけど数回目の会合の時にいきなり“あつくん”と呼ぶのは、やめてほしいと思った。

だってさ？“あつくん”とかさー。俺みたいに歳を重ねた男には似合わないでしょ。なあ？そう思うよね？いや、確かに肉体年齢は20代だよ？日本人だから年齢よりも外見が若く見えるよ？童顔じゃないけどね。期待を裏切るようで悪いけどさ。

それでもまあ16、7歳くらいにはね…。見えるかな、うん。若いつていいね！……はあ、それでも精神年齢は“曾”が幾つも付くくらいお祖父ちゃんなんだ。今更、子供みたいな呼び方は勘弁してほしいのよ。

……。

とまあ昔のことを懐かしくも思い出していたわけだけどさ…。

「なぜ居るし…。っていうかいつ入ってきたし…」

「いやん あっくんのイジワルさん 束さんはあっくんの居るところにドビュウンとどこからでも出てくるんだよ うりうり」

「え？なにそれこわい…。それとあまりくつつかないように」

腕に色々と当たっているんだよ…。やーらかいものが当たっているんだよ…！俺も理性もとい本能と戦争するのが大変なんだよ！俺の精神力がガリガリ削られてくよー…。

それでも表面上はポーカーフフェイスです。伊達に万の女性に囲まれて生活していたわけじゃないのだよ。これくらいならまだまだ簡単なものだ。……精神力は削られてくけどな！

「もう もうもう ツレナイ態度もステキだよ！あっくん よし！結婚しよ」

「……………」

な、何も言えない…。これにどう答えろと言うのか。一言でも発したら押し切られそうだ！あと何がよし！なの？何が結婚という考えに繋がったの？だから腕から胸を放せ、じゃない腕を放せというに…！

くうう！？束君は相も変わらずテンションが高い！その若さに付いて行くのは少々辛いものがあるね！俺の許容量以上のような気がするって。元気っ娘的な意味でな！もう天元突破まで秒読み段階じゃないか？

というかなんで俺の研究マイホーム所に居るの？この人…。今、素敵にいい感じに世界中で手配されていたよね？何、人の家のコタツに入ってバナラアイス食べて寛いでいるの？って、あ…？そのアイス俺のじやん！？犯すぞ！コラ！？」

「あつくんなら束さんはバーツ来いだよっ！でもでももっ！束さんハジメテだから最初は優しくしてほしいな 出来ればあつくんの顔が見える体位…」

「おーけー！俺が悪かった！ごめん！謝る！だから少し黙ろうか！ホントごめん！！」

束君エ…！確かに束君は美人さんだ。誘われて俺も悪い気はしないよ。でも状況に流されるまま行為に及ぶのはダメでしょ。相手にも失礼だし自分の気持ちを裏切るようでイヤだ。抱くからには愛が欲しい…。

しかし、コイツなかなかにやりおる！！まさか…まさかの読心術を行使してくるとは…！？でもおかしいな？そういうのは最大限に対策を取っているはずなのになぜバレたし…？俺って顔に出易いのか？」

「ううん、違うよ だってだって、あつくん、途中から声に出していたもん えへっ でも、そっかそっかあ あつくんはそんな風に束さんのことを思っていたんだねえ もう美人だなんて！恥ずかしいな！もう」

「……なん…だ、と…？」

しまった。そうだったのか…orzとりあえず今は口を手で押え

て封印中（呼吸は出来るよ）だから大丈夫。しかしやつとわかった。ホントにおかしいと思ったよ！まさか口に出していたなんて自分に驚きだったね！

少し体内のナノマシンに働きかけて思考が口から洩れないように調整してくとしよう。それくらい朝飯前だからな、って！！いやいやいやいや！そうじゃない！そうじゃないだろ！？

疑問は戻って悪いけど何で束君が俺の研究所^{マイホーム}に居るの！いい感じに世界中で手配されていたよね！だから！何、人の家のコタツに入って…今度はミカンかよ！？しかも俺の好きな温州ミカンじゃないか！何、食べて寛いでいるのさ！？

「こほんっ、それで束君は何をしに來たのさ？色々（各国に追われて）忙しいだろうに」

「やんやん 束さんはあつくんの居るところにドビュウウンとどこか…」

「いや、それはもういいから。それで本当のところは何？」

「半分は本気なんだけどなあ。……うん、今日はあつくんをお願いがあつて來たんだよ」

聞こえない…聞こえない…。束君の台詞前半は聞こえなかった…。よし！これで俺の記憶はマッサラサ！俺は何も聞いていないね！うん！…さてと、それでお願いとは何ね？

「ふむ？あれか技術協力とか？いや、もしかして開発依頼か？」

「うつん、違うよ。……ねえ？あつくん。学校に行ってみない？」

「……は？」

学、校……って言ったのか？いやいや！何かの間違いだろうよ！そうだよ！大体なんで俺が学校に行く必要があるんだよ！？今更、俺が普通の学校に言っても意味なんてないだろうよ！？そんなことよりも俺は発明で趣味に走るね！

「だから！学校だよ！が・っ・こ・う　それも美少女だらけのIS学園　憎いね！このこのっ　でも手を出しちゃダメだからね！あつくんは私のお嫁さんになることで決定済みなんだから」

残念！普通の学校じゃなかったぜいorz今をトキメクIS学園だった！何で俺が行かなければならないんだ……？いや、束君の言うとおりあの学園には異常なほど可愛い女の子や美しい女の子が確かに居る。居るけどさ。何で俺よ？

まあ俺も男ですからね、可愛い女の子は好きだよ？好きだけどさ！。だからってそれに惹かれて学校に行くか、と聞かれれば答えは「No!」と答えるしかない。だってISのことならもう解析済みだしね。そもそも学ぶことがないって。

面倒だし……というのは冗談で本音じゃないよ？本気じゃないよ？本当だよ？

あ、でも、操縦者の経験的なアドバイスがあれば効率的な操縦方は学べるかもしれない。経験だけは反復練習と実践あるのみだからこればかりは仕方ない。ただ、機械的・技術的・魔術的・その他

科学的なものはチートなのよ、俺はね。

それに仮に行くとしても問題があるだろうよ？

「嫁かよ！せめて婿だろ！？つて、あー、違う！そうじゃない、そうじゃない。あのな？…IS学園つて…束君さあ？わかってる？俺は“男”であつて“女”じゃないの。IS使えないでしょ…」

そう。俺は男だ。通常、というか世間で知られている常識ではISは女性にしか動かせないことになっている。だからこそIS学園は共学という看板を立てているが内実は女子校のそれだ。

俺がISを使っている所を見られない限りは俺がIS学園に入学するのは夢のまた夢ということだ。ISが広まってから世界の常識は女尊男卑の時代だからな！世知辛いぜい…。

そして俺は深夜に隠れて実機運用を繰り返して俺の専用機を完成させた。見られる危険は可能な限り排除していたんだ。見られたことは無いと断言できる。

そうそう俺の専用機だけど多分に趣味に走ったけど性能は折紙付だ。なんて言ったって機体のモチーフにしたのはあの…。

「え？使ってたよね？私知ってるよ」

「よし！少し待とうか！何を根拠に知っていると抜かすかな君は！？」

マジでコイツは何と言いやがった！？「使ってたよね？」だと！？何を使っている所を見られたんだ！？ISか？ISなんだな！？

どこから見ていた!?

それに「知ってるよ」だと!?いつから見ていた!?いつ頃知ったんだ!?俺がISを使えることを!それにしても……マズイ。非常に今の状況はマズイと思われる。

「ISがあつくんのところに行くように細工しておいたんだけど……届いてるよね?あれ?届いてない?あ、それならいる?今、3つくらいならあげるよ?……(ボソツ)未登録だけど」

「……………届いてたけどさあ。お前も小細工していたのか……」

実際にはラミエルさんが気を利かせて俺の研究所にISの実物が1機、流れてくるように調整してくれていたんだ。あとで考えると予想外過ぎるほどスナリ行っていたからオカシイな、と思っていたらお前の仕業だったのか!!

というか3つもいらなから!俺は1人しかないから!分身とか……あれ?できるな。いや、できるけど、この世界ではやらないよ!あと各国が躍起になって欲しがっているISをホイホイと俺に渡さないでくれるかな!?

某お米屋さんとかに逆恨みされるでしょ!面倒事は勘弁してくれ!終いには押し倒すぞ!この女郎!?ヒーハーッ!言わすぞ!コラッ!?

それとよく聞こえなかったけど最後に何か気になることをボソツと呟かなかったか!?聞こえなかったけど背筋が寒かったよ!悪寒がしたよ!絶対に不吉なこと呟いたよこの人!もう……ヤ……。お家、帰る……あ、ここ俺の家だった。

「あつ お前“も”ってことはあつくんもIS欲しかったんだね？
いいよ いいよ いくらでもあげちゃうよ それにお・ま・え^{これ}な
んてもう夫婦のような呼び方だね あ、そつだ、未登録だけどIS
もいる？」

「いらん！今あるヤツだけで十分だ！そもそも俺が手ずから改良を
加えた魔改造品だから俺以外に使えない仕様だしな。そして俺達は
まだ夫婦ではないっ！！」

今ので理解したよ！さつきボソツと言ったこと理解しちゃったよ
！！未登録って言ったんだろ！？そつだよな！？チクショー！こん
なの貰えるか！こんなの持っていたら各国から追求の嵐に曝されて
しまつじやないか！！

そもそも話したが使いようがないから持っけていても宝も持ち腐
れにしかないね。今ある俺の専用機があれば十分満足だよ。あ、
因みに俺のISの待機状態は本型。大きさは文庫本サイズくらいだ
つたりする。電子書籍としても使える優れものだ。

そして最後に断言しておくが、俺は！まだ！誰とも！結婚！する
気は！ないいい！！！！

「おー 既に専用機だね！出来てるんだね 動かせるんだよね！だ
つたら問題ないよね！そして“まだ”なんだね！あ、もう話は通
してあるからね 再来年に入学試験があるから、あ、これは書類一
式だよ？ちーちゃんに郵送してもらったんだあ ハイっ」

「いや、“ハイっ”じゃないし…。まだ行くとは言つてないし…。
まだというのはこの先も変わらない気がするし…。そもそも教師じ

やないの！？生徒として行くのかよ！俺はもうそんな歳でもないんだけどな！？」

絶望したッ！束君の頭の中がお花畑であることに絶望したッ！！
あ…それは今更か。って、違う！常識はどうしたのさ！？俺の歳で高校へ行けと！この子はそう申すのか！？実年齢はともかく肉体年齢は20代なだけどな！！

せめて教師として行かせろよ！！あ、今は違う！教師だろうと生徒だろうと学校には行かないからな！？行く意味がないだろうが！！俺の憩いの場は研究所なんだよ！！理想郷の一步手前なんだよ！！

ラミエルさんとイチヤイチャしたいの！！………しまった、つい本音が洩れた。今のはカットの方向でよろしく。それではテイクツ―ッ！行かないよ…。

「気にしない 気にしない そんな細かいことはいいんだよ！ドブにでも捨てちゃえいいと思うよ だからお願いするね あ、もう再来年の入学届けを予約しておいたからね！絶対に行かないとダメだよ？じゃないとちーちゃんが怒っちゃうんだよ？」

「いや、そのちーちゃんが誰か知らないし…。今更、学生とかもイヤだし…。そもそも入学届けに予約ってあるの！？何よれ！初めて知ったよ！驚愕ものだったよ！てか何で再来年なんだよ！今年じゃないの！？いい加減にしないと襲うよ！？このっ！」

「えへへっ その時は優・し・く・し・て・ね きゃっ」

「もう…ヤダ…この人…」

最後の台詞だけ拾いやがったコイツ…！ホントに侮れない子だな！いつそのここに軟禁するか？そうしたら平穩が……数秒間シミュレート中……ダメだな！逆に遠ざかる想像しか出来なかったよ！コンチクショー！！

はあ…家族が周りに居ないと俺はツツコミ属性が付くのか？今日だけで随分とツツコンだ気がする。こんなところでダダ捏ねていても疲れるだけかもしれない、な…。

はあああああ…。よし！諦めた！人生諦めが肝心だとも言っしな！それを今回は実践しよう！すごい久しぶりだけど勉強しないとね。ISの実技試験はいいとしても筆記で落ちたなんてことになったら目も当てられないしね！

あ、そうだ。1つだけ疑問が残っていた…。そうとなったら早速聞いてみる。目の前のウサミミきよぬーメイドこと篠ノ之・束君にな！巨乳ではない！きよぬーだ！いや、これは戯言だな…。

こほんっ…。

「それで？何で再来年よ？入学するだけなら今年でもいいじゃん」

「えへへっ それはまだ秘密だよっ でも楽しみにしててね！きつと楽しくするから イベントが盛り沢山の学生生活になるよ！あははははっ
」

今のは聞き間違いだろうか？いや秘密はまあいい。だって束君だしね！今更というヤツだよ。この数年の文通と電話、こうした直接の会合という名の駄弁り会で慣れたよ！最近束君のことをちよっ

と可愛いかな、と思う時もあるよ！その先は無いがな！

あー、んんっ！俺が言いたいのもう少し後ろの台詞、丁度中間辺りの台詞だ。先程、束君は「きつと楽しく“する”から」と言っていたように聞こえた。もの凄く「待て！」と言いたい！いや、言っても止まらないけどさー。

とにかくコイツ……何をする気だ？仮に何かするとしても一つだけ断言できることがある。それは束君がする楽しいことというのは絶対に碌なことじゃないということだ。

普通ならここは「きつと楽しく“なる”よ」だろう！？なんで束君が面白くすることを前提に話が進んでいるの！？いいって！愉快的イベントとかいらないから！俺が欲しいのは平穏だからね！木陰で静かにお昼寝したいのよー。

まあここまで来たら了承したようなものだから潔く諦めるとしよう。はあ……。あ、また一つ幸せが逃げたかもしれない。

「……まあ束君の言いたいことはわかった。本当はわからないけどとにかくわかった。それじゃ入学準備が出来たら連絡してくれな」

「はいはい 束さんにおつまかせだよっ！……あ、そういえばなんだけど聞いてもいいかな？」

「……何だ？答えられることなら答えるよ」

「うん あつくんの専用機の名前はなんなのかな？」

そうだった。まだ言っていなかったな……。

「それは」

憎悪の空より来たりて、正しき怒りを胸に、我らは魔を断つ剣を執る。汝、無垢なる刃。

「
デモンベイン
魔を断つ剣さ」

そう悪戯を考え付いた表情をして俺は言った。なぜか束君が赤面したのがナゾな件について……。そんなに俺の表情がおかしかったのか？あー、やらなきゃよかった。恥かいただけじゃん……。

第1話「来ちゃった」(後書き)

あははははははっ!!!

ついに葵が別世界に来ちゃった
束さんが葵の住処に来ちゃった
デモンベインさんも来ちゃった

とにかくいろんな”来ちゃった”があるのです!

いやー、妄想が止まらなくて、ついやってしまった。

反省もしていないし後悔はもつとしていない。

楽しければいいじゃないの精神で行くことにしたんだ。
でも本当にこのまま短編として終われそうなのがする。

4 / 20 ちよいと編集。

ではでは! B i s b a l d !

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第2話「IS学園、来ちゃった」(前書き)

こっちの展開は本編に比べて速いです。

だって原作読んでないのに書いているから!!

アニメ版とウイキ先生にお世話になって書いてますよ。

だから全体的に少しおかしくなっても仕方ない……はず!

第2話「IS学園、来ちゃった」

どうもどうも、九重・葵だ。何だかんだで束君に頼まれて(?)俺はIS学園に行くことにした。気は進まないし嵌められた感が強いけど行くと決めた以上は仕方がない。覚悟を決めた。

最初にIS学園入学へ向けて用意したさ。具体的に言うと……筆記による勉強だ。面倒だが仕方ない。仕方ないばかりだが気にしない。気にしたら負けた気がするから。

技術面は俺のチート能力によって勝手に知識が脳内に入力され更新されていく。そのためIS関連の基礎知識は当然として応用もできるために整備課や開発課にも転化できるほど知識を習得済み状態になっている。

そして科学(IS)と魔術(葵謹製)の“愛の子(誤字に非ず)”である専用機「デモンベイン」を所持していることから実機による実践は問題ない。機体開発も実機テストも俺がしたんだ。搭乗時間は優に700時間を越えている。問題ないはず。

だが始めて世界移動して気が付いたんだ。俺のチートも万能ではないことがここに来て発覚した。この世界の社会や世界史などの歴史が鬼門だったんだ。記憶力もチートだけど勉強しないと内容が身に付かないのよ…。

というかさー、歴史関連は技術体系と深く繋がっているのになぜにその知識だけは更新されないのだと俺は言いたい。主にあの女神（幼女）に愛で倒すと言いたい。

そんなわけで余裕を残したかったから最初の一年でラミエルさんの助けも借りて必死に勉強しましたよ。日本史と世界史の二種類の歴史関連が面倒だった。国と世界で歴史的解釈が異なっている部分があるから二種類とも覚えたよ。

イラッ と来てつい上空に向けてラミエルさんの荷電粒子砲をブツ放したのはいい思い出。あとで騒ぎになって本気で身の危険を感じたのはどうでもいい話しか…。

一応の学習を終えて、残す期間は一年未満だったんだが、それでも時間もあることから、そろそろ皆の下へ帰る手段を創ろうとしたんだ。まあ要するにこの世界に来る切欠になった次元エンジンをもう一度造るということだ。

結論から言おう。造ることは現時点では不可能だった。なぜか？それは、あー…うん、すう……………材料と資金が足りんっ！！なにあれ！どれだけ金と資材をつぎ込めばいいんだよ！？

この世界には家族（組織「ファミリー」）というバックアップはラミエルさんだけだから無茶もできないしお手上げだよ！時間を掛ければ何とかできなくもないけどね！！それでも一人でチマチマと錬金してでもできる資材の量にも限界があるんだよ！！

フフ、フフフツッ！！それに今更気が付いたけど何気にこの世界に来て十数年経ってたよ！！少しノンビリしようとしたらコレだよ！！自分の暢気さに絶望したよ！！後悔してないけどね！！

すまん、少し興奮した…。

まあそんなわけでこの一年未満は材料の錬金と資金や資源の調達に奔走することになった。ISの世界に来た時からコツコツと用意しておけばよかったと後悔している。反省はしていないけどね！時間には余裕があるし！寿命的な意味で！

……。

……。

そんなこんなで時は流れて2年近くが経ったよ。結局、帰る手段はあるのに造るまでが長いということで一時の休息のために大人しくIS学園に行くことにした。

束君の言いなりになるようで面白くないがこの世界を楽しむと考
えればこれも一つの休暇になる、のか？^{バカンス}学校生活なんて数百年ぶりだから歳甲斐もなく緊張するね！あはははっ！

……でもまあ束君の指定してきた日程でIS学園に来たわけだ。
俺のほうは「いざ！尋常なる試験だ！」と考えていたのにね？例
の如くここで問題が起きた。いや当然と言えば当然のことなんだけ
どね！！

生徒としての受け入れに問題…ないと言いたいがある。あつたん
だね。大きな理由は三つある。

その理由の一つとして俺の年齢のことが挙げられる。この世界で
は俺の年齢を3歳になっている。来た直後は17歳でスタートし

たからね。今は三十路を超えたことになっているのよ。

……流石に俺の年齢で生徒は厳しかったか。

二つ目の理由として“俺”という存在が問題だったらしい。再三に渡ってスカウトしていた人物がイキナリ生徒として入学する。関係者は口を揃えて「そんなバカな真似はできない。是非、研究員でお願いします」と頭を下げられるという事態に発展した。

……勘弁してくれorz

三つ目の理由として、というか寧ろコレが一番大きな理由になると思う。これは俺も予想していなかった。束君が慕う“ちーちゃん”を通さずに直接IS学園のほうに俺のことを言いやがったんだ……！！

……自分の影響力を少しは考えて欲しいね。

束君の言う“ちーちゃん”はどうした！？もうね？「内密で入学するんじゃないかったの？バカなの？大バカなの？」と束君に言いたい。というか実際に電話して言った。言い終わったら直ぐに切っちゃったけど。

そんなわけで大変だったけど、色々大変だったけど……！なんとか世界も巻き込みかけた俺の入学騒ぎはラミエルさんの情報操作と学園の奮闘で辛うじて学園内で混乱を止めることができた。

最終的に止めとして俺、そして別口で“ちーちゃん”が束君に連絡して今回のことは誤報であり事実ではないと各国へ明言させた。電話口で「あつくんひどいよお！！」とか騒いでいたけど知ったこ

とではない。懲りてないだろうし…。

……。

そして今俺はそれらの問題が一応の解決をみたから、ここに…。

「本日よりIS開発部門兼IS整備部門兼一年二組副担任兼非常勤講師となった、九重・葵だ。諸君、俺の言葉には返事をしろ。聞いていなくとも返事をしろ。逆らってもいいが俺の言葉には従え。最後に…決して“思考を止めるな”。…俺からは以上だ」

はい！結局教師に落ち着いたぜい！一応教師という立場だからなスーツを着てますよ。麻帆良の時に着ていた黒のスーツに黒のベストと黒のネクタイ、紅いワイシャツにルビーのネクタイピンだ。ヤの付く自営業じゃないよ？教師です。

オマケに銜えタバコしているけど火は点けてないからセーフだ。……いや、セーフなんだよ。

あー、それと俺の専門、というか担当だがIS開発部門兼IS整備部門兼一年二組副担任兼非常勤講師という訳のわからない職種の数だ！副担任と非常勤講師って被ってないか、と思うのは俺だけか？

そして何よりも、そう！何よりも……歴史とか…全ての勉強が無駄に終わったぜい……！！！！マジやってられない……！！！！

「……お……」

「…返事はどうした。小娘共？」

「『『『男おおおおつ！？！？！？』』』」

何はともあれ今日は入学式だった！入学式も終わり一年二組の教壇に立っています！俺が教師とか似合わない気がするなあとと思うけどまあそれはいい。因みに教師のモデルは束君が恋い慕う“ちゃん”だ。

それにしても俺の隣ではクラス担任の女性教師（25歳、美人目可愛い系おろおろ属）が耳を押えて黄色い音波攻撃から来る衝撃に對して防御姿勢（両耳を押えている）を取っていました！なんと要領がいいんだ！見た目とは大違いだ！

俺は……モロに直撃したけど表情には辛うじて出していない。というか出せない。ここで出したら弱みを見せることになるのだから！それだけは出来ない！！女子に囲まれるのは慣れたものだしね…。

「一組の織斑君だけじゃなかったの！？」

「それもウチの副担任だつて！！信じらんない！！」

「何歳なのかな？恋人はいるのかな？結婚してるのかな？」

「かつこい……。はあ……」

「見た目が若いのに雰囲気は渋い……これはっ！」

「九重×織斑？……イケル！！来た！来た！来たーっ！！」

いや……慣れてるよ？慣れてるけど、それでもこの若い子達のテンションはスゴイ……。それと最後の人！何が“イケル”のか！？……書いてもいいが何割か分け前を寄越しなさい。タダで使おうなど虫がよすぎるというものだ。

「黙れ、小娘共が。発言する時は挙手してからにしろ」

「ハイツ」

うん！綺麗に一齐にビシッと拳手する女子高生達だ！！お前らノリいいなあ…。こういうノリは麻帆良特有だと思っていたよ。この世界の…と言うよりIS学園？が独特なのかもしれないけどね…。

「……はあ、このクラスはこんなばかりなのか？どう思います、先生？」

「え…？えっ？あの、そんなことはないかと…」

とりあえず変なことを聞かれないように担任の女性教師に話しを振って予防線にしようとした。ここで真面目に切り替えてくれれば尚良しだ！それなのに彼女は苦笑ばかりしているときた！

役に立たね…。

「……そうですか。では…」

もっね？ここに来てね？覚悟を決めるしかないと思うのね？だから比較的マジメそうな女の子にしようとサッと探した。見渡す限り、女子、女子女子、女子女子女子……っ！！

しかも居ねえ…。皆、目を輝かせていやがる…。この中からマジメそうなのは無理そうだから今度は比較的“大丈夫”そうなのを探した。因みに「九重×織斑」とかふざけたこと抜かした生徒は問答無用で候補外だ！

「……その君」

「ハイツ！九重先生は男性ですがISのことを教えることができるのでしょうか！」

安心した！すごいマトモなことを聞く子で先生は安心した！君のことは目を掛けてやろう！安パイが引けてマジで安堵したー！！

しかし、やはり男の俺がISを教える、つまり使えるかについては疑問が出るか……。まあそれもこれも“織斑・一夏”と違ってメディアに出てないから当然だけだね。あんな晒し者になるのはマジで勘弁だ！却下だ、却下！！

「使えるからここに居る、それだけだ。……………しかし、安心した。あまりフザケタ質問をしたならば放課後に教育的指導をするところだった」

「……………えっ！？」「……………」

いや待て？「えっ！？」って何？教師を嘗めないように始めからお互いの立場をわからせることも大切なことだと思うよ？…え？違うの？少し話し合いとお説教をするだけだよ？

……………なんで担任の貴女まで生徒に混ざって「えっ！？」ってなってるの？当然、貴女も同席するに決まってるでしょ？なに自分とは関係ないみたいに生徒側に立っているの？そんなの天が許しても俺が許しませんよ？

「九重先生っ、ダメですよっ！放課後の他に誰も居ない教室に生徒と教師が二人きりなんて……………は、はは破廉恥ですっ！！」

おい、破廉恥って先生……「あわわわっ」していると思ったら何を言い出すんですか……。

いや思い返してみると“放課後”、“生徒と教師”、“二人きり”、“他に誰も居ない教室”というちよつと“えちい”考えが出ないでもないけどさ。先生は、その……欲求不満なんですか？とは聞けない。聞いたらセクハラだ。

「え？えっ？ええっ！？わ、私、そんな……困りますっ、心の準備もしてないのに、そんな……」
「ごによごによ」

先程質問してきた子が言う。おい、だから待てと言うに、という思いしか湧かなかつた……。てか、心の準備が整えばいいのか？いや、ダメだろ。俺も十代中頃の少女に手を出すことはしないよ。せめて18げふんげふん……何でもない。

「うそっ！？初日からあの子、九重先生に美味しく食べられちゃうの！？」

「わーお！九重先生つたらだ・い・た・ん 生徒と教師でイケないんだー」

「あうっ、あうあうあう……！！」

ほら、見てみるよ……。先生と先程のこの言葉が切欠になってクラスの中は騒然としてしまったではないか。ただどこか肯定的な黄色い喧騒だったのが俺の遣る瀬無さに拍車を掛けたのはどうしたらいいのか……。

この時心の中で「一度彼女達には自分の立場というものを教え込む必要があるかもしれないな」と考えた俺は悪くないと信じたい。少し強く言うのは俺の主義じゃないがやるしかない。

「貴様ら……！先生、貴女まで何を勘違いしているのか！」

「はいい！？そ、そうですね！勘違い……！かんちがいでちゅよね！失礼しましたーっ！」

いや、あーた「でちゅよね」って……。ちよつ、やめてよねー。可愛いな、とか思っちゃうでしょー……。まあ立ち直ったようではよりだ。これで残すは生徒達のみ……。

「噛んでますよ。落ち着いてください……。貴様らもアマリ嘗めたこと抜かすようなら……。」

「…………ぬ、抜かすようなら？」「…………」

ギロツと俺の怜悯な視線が教室中を席卷した。……制圧したとも言。言葉にも魔力を弱め（麻帆良の時の100分の1くらい）に込めて聞き入れ易くしておいた。魔力適正の低い者や無い者には効果は絶大だ。

……洗脳じゃないよ？本当ダヨ？軽く素直な状態になるだけだ。

「…………物理的、社会的、精神的、その他諸々の手段を用いて潰す……。わかったら返事をしろ！！わからなくとも返事をしろ！！わかったか！？」

「…………わ、わかりましたっ」「…………」

少し失敗した……。うん「潰す……」と言った瞬間に魔力（50分の1）を込め過ぎた！クラス内の女子が軽く酩酊状態のようになって

いる！？今なら素直に言うことを聞いてくれそうだ…！

「違うッ！！返事は“サーイエッサー”だッ！！もう一度！！わかったか！？」

「……さ、さーいえっさー！」「……」

少し悪ノリしていると自分でも思うけどここで嘗められるよりは百倍マシだ！！今ならすり込みができるのだからこのまま一気に逝こう！俺の平穩のために……すまないっ！

「聞こえない！！貴様らは声もマトモに出せない腰抜けか！？違うなら声を出せ！！わかったか！？」

「……サーイエッサー！」「……」

やべえ、この子達魔力とか関係無しでノリがいい……！！こうなつてくると俺も少し楽しくなってきたね！！

「どうした！！まだ聞こえないぞ！！声も出せない者は今ここでお家へ逃げ帰るほうがいいかもしれないな！！違うなら声を出せッ！！わかったか！？」

「……サーイエッサーッ！！！！」「……」

俺はお前らが大好きだ - つ……！！

もう、なんなの！？この子達ノリが良すぎるよっ！魔力の効果なんて最初の時にほぼ霧散しているのに麻帆良の某A組にも負けないノリの良さだ！！

「よろしい！！ひょっこにしてみれば上出来だ！！今のを忘れるな！！」

「サイエンス！」

素晴らしい……！完璧な姿勢……！完璧な声……！必ずこの子達のノリに酬い昇華させてみせよう！具体的には一流の兵士に鍛え上げてみせよう！！ハッ！IS？軽く使いこなせるようにしてやるうではな
いか！！

ふはーっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ ふごおごほごほっ ! ! ?

失礼……つい興奮して咽てしまった。

そういえば大分騒いでしたたが一組に迷惑を掛けてしまっただろうか？大分大声を出していたからな。放課後になつたら職員室で聞いてみよう。そして迷惑を掛けていたなら謝罪しなければならない。

とにかくこの一年二組は完全に俺の支配下に入ったも同然だな。これからはキビキビと行動してくれるだろうし色々やり易くなるのは間違いない。何よりも担当クラスで学級崩壊とかイヤ過ぎるしな！！

キーンコーン、カーンコーン、キンコーンカーンコン……

む？一限のHRは終了……んあ？いつの間にか二限の授業開始のチャイムが鳴っているし……！？き、気が付かなかつた……。俺はそこまでこの子達の調きげふんげふん、教育に熱を上げていたと

言うのか!!

「……こほんっ、では先生、授業をどうぞ」

「……………ごくっ（ポー）ごまじ……………」

「は？ゴシユジ…なんです？先生、どうしました？先生？」

今この先生は何を言いかけた？生唾飲んだあとに何を言いかけた？小さ過ぎてよく聞こえなかったんですけど。名も知らぬ女性教師（名前は宮古・京、^{みやこ・みやこ}25歳、美人目可愛い系おろおろ属）よ…一体君は何を言いかけたのかな？

「っ！？は、はいつ、ごまじ、じゃなくって！！じ、授業ですね！？アハ、アハハハッ！それでは皆さん始めますよ！教科書の5ページを抜いてくださいっ！」

このクラス激しく幸先が不安だ…。

……………。

……………。

放課後、授業を終えて移動してきたこの場所はその名を職員室…！学生時代ならまず間違はなく近寄りたくも無い場所の一つに数えられることだろう！そんな場所で俺こと九重・葵は絶賛、談笑中だ！！

「はははっ、なるほど“弟さん”がクラスに居る？やはり身内が居るとやり辛いものがありますか」

「いえ、私は仕事に私情を持ち込むなどという愚かなことはしません。寧ろ逆ですね。身内だからこそ厳しく接します」

厳しく？それはアレだろうか？^{エクスカリバー}出席簿のことだろうか。午前の授業中にも隣の二組にまでバシンツという鈍い音が聞こえてきたが……いや今はいい、気にするな、気にしたら君の頭にも^{エクスカリバー}出席簿が……！！

それはいい。今は織斑先生と山田先生と談笑中だ。担当クラスが隣だから軽く交流会をしようと思つてね。二人して教室から帰つてきたところをお誘いしたわけだ。話を聞くと部屋の鍵を“織斑・一夏”に渡してきて戻ってきたらしい。

「いやー、織斑先生は教師の鏡ですね。東君が“ちーちゃん”と呼び慕う人物に不安を抱えていたのですが貴女のように清廉な人で安心しました」

本当にね。小説の中の“織斑・千冬”しか知らないから不安だったのよ。何がどうなつて人が変化するかなんて誰にもわからないからね。実際に見て、会つて、話して、初めてこの織斑・千冬という人の人物像が見えてくる。

東君は色々とハツチャけた子だからね……。時々付き合うなら楽しいけど常に傍に居ると疲れること言えはいいのか飽きがこないと言えはいいのか正直表現に困る。嫌いじゃないんだけどね。

その点、織斑先生はまだ付き合い易いかもしれない。第一印象として立ち居振る舞いから狼のような印象を思い浮かべる女性だ。それと話してみte感じたが自分にとても厳しく、多少頑固な一面を持つているということだな。

でも家族へ向ける愛情は本気だと思う。俺と同じくファミコン（ファミリーコンプレックス、造語）の匂いを織斑先生からは感じ取った。いや彼女の場合はブラコ。

「……束は私のことをなんと言っていましたか？」

「……いえ、白騎士のバストが8どーのとか、仕事はできるけど生活が、とかなどですかね？そんな大層なことは話していませんでした」

焦った！マジ焦った！俺の考えが読まれたのでは、というタイミングで話しかけられたから本気で焦った！それでも表情には出さないのが俺クオリティ！顔面筋マジでありがとう！お蔭で命拾いした！

……………あれ？

俺ってさっきなんて言った？「白騎士のバストが8どーのとか、仕事はできるけど生活が……」みたいなことを口にしたような気がする……。

「……白騎士……バスト8？……私生活だと？……クツ……」

織斑先生、俯きながらボールペンをバキツと押し折るのはやめてください……。ほら、隣の山田先生なんか少し涙目ですよ。こっちに助けを求めるような目で見られても困るのですが……。

でも仕方ない、か……。そもその始まりは俺の言葉が原因だし……。確か、休憩時間にも淹れようとした紅茶の茶葉がカバンに入っていたはず、コレを使って場を和ませるとしよう。

「……織斑先生、どうかなさいましたか？あ、お茶を淹れますけど飲みます？」

「……いえ、友人がご迷惑を掛けたようで申し訳なく思っただけです。お気になさらずに」

「そうですね……。じゃあ、山田先生はお茶どうです？それでも淹れるの上手いんですよ」

お願いっ！ノツて来てくれ！じゃないと場を和ますことができない！紅茶の香りと味で織斑先生の荒んだ心も山田先生のプレッシャーにやられた心も和ませてみせようではないか！伊達に喫茶店をやっていなかったのだよ！

「えええっ？わ、私ですか？その、えっと……」

なぜに俺から視線を逸らして織斑先生にお伺いを掛けるし！？君のためでしょ！自分で判断しなさい！教師でしょうが！というか俺を助けて！

「いいじゃないか、山田先生。九重先生の厚意を無碍にする必要は無い。ああ、やはり私にもお願いできますか？」

「は、はいっ、そうですねっ！九重先生っ、お茶お願いしますっ！」

山田先生……。結局織斑先生に気遣われているじゃないか。ダメだよ？もつと自分に自信を持たないとね。ほら、君の立派な富士山否！エベレストの如く自信を……。すまん、オヤジっぽかったから今の無しの方向でお願い。

マジで自前だよ？これさ、無名の茶器一式だけどデザインがシンブルで気に入ったから購入した。それなりにいい値段がしたのは痛かったけど後悔はない。だって！美味しいものはいつでも食べたいし飲みたいじゃないか！！

「それは楽しみです。期待していますよ」

「???山田先生、なにか?」

「い、いいえっ、何でもありませんよ」

「そうですか……」

むっ！俺としたことが痛恨の失敗をしてしまったッ！！！シツト
 ！！！！なんと言うことだ！！紅茶に合うお茶菓子を忘れてしまったと
 は…ッ！！！！しかし、紅茶はもう蒸らしている最中だ。

……今回は諦めるしかないのかorz

「……はい、どうぞ。熱いのでゆっくりお飲みになってくださいね」

「ふむ、では頂こう……！ほう、これは……」

「それでは頂きますね……！わぁー……」

おっ いい表情頂きましたっ どうやら満足のいく紅茶を淹れられたようだ。その証拠にニコニコ笑顔の山田先生はいつも以上にニコニコしているし、織斑先生は無意識だろうけど口元が上がって笑っているのだから。

「……ふふっ、どうですか？」

「うむ、これは美味しいな……」

「ホントにお、美味しいですっ」

「ええ、お砂糖無しでも十分美味しいですよ」

うん、今日はこの二人の笑顔が見られただけでもIS学園に来た甲斐があったかな。食べ物“美味しい”と素直に表現できる人は信用してもいいと思うんだ。

別に料理評論家のように蘊蓄だとか重箱の隅を突くような表現は要らない。寧ろ邪魔。ただ素直に“美味しい”という一言を言ってもらえるだけで作る人としては満足だ。百の言葉より一つの美味しいだね。

「さて、俺はお先に失礼します。ISの関係各所に一通り顔を出しておきたいので」

「ああ、気を付けて行くといい。美味しいお茶をありがとう」

「いつてらっしゃい、九重先生。お茶ありがとうございましたっ」

「はい。ではまた明日」

飲み終わったカップは流しに水に浸けてくれるようにお願いしてから職員室を出た。

そのあとはまあ宣言通りに各種施設を回って挨拶したな。どこでも男の俺が開発に関することに少なからず驚かれたが快く受け入れられたことに安堵したものだ。

最後に特筆すべきことは行く先々の女性が皆可愛いか美人の二通りということだろうか。不満じゃないよ？俺も男だしね。綺麗なお姉さんが大好きです。……可愛い小さな子も大好きです。

それにしても何ここ？大奥屋敷でも作っているのか？なあ学長さんよ、どうなのよ？と問い詰めてはいないったらいい……。

第2話「IS学園、来ちゃった」(後書き)

おう…！？まさかの一年二組の副担任兼！兼！！兼！！！！

幾つ掛け持ちする気だと作者は言いたいですね！

クラス内の似非軍隊調教と職員室のほのぼのお茶会でお送りしました！

ISが欠片も出てこない件について…作者はorzてしまいました。
やはり本番は鈴が来た時でしょうかね？

そもそもなぜに鈴だけ別クラス？と作者は疑問が尽きない！
いや作者はラウラスキーですけどね！

ではでは！B i s b a l d !

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第3話「アリーナに来ちゃった」(前書き)

…いや、わかってる。皆の言いたいことはわかってるんだ。
こつち書く暇があるなら”ネギま!”を書けと言っただろ?
わかってるんだよ。でも同時に書いているんだ。
モチベーションを維持するには違うこともやりたかったんだよ。

では続き!

第3話「アリーナに来ちゃった」

こんばんは、九重・葵です。

初日からノリのいい……良すぎるクラス一同と女子中学生にしか見えないクラス担任の宮古・京先生みやこ・みやこに激しく幸先に不安を感じたものだったが案外上手くいつている。

クラスはいい、俺も気に入った。これから楽しくなりそうだ。是非とも一流の兵士に育て上げてみせようと思う。授業の飲み込みもいいので教え甲斐もある。なかなか優秀な子達だ。

でも宮古先生は胸と身長が足りないから先生に見えんのよ。クラスからは可愛いと言われてとても人気者なんだ。本人も見た目（中学生）以外は優秀だった。授業の説明はたどたどしいが丁寧で間違いは無いしね。

まあ俺がジッと観察した結果、宮古先生は身長低いし胸がスズメの涙……。泣けるっ！でも可愛い！あれで25歳とか反則だと思う。それに職員室では山田先生（の胸）を羨望の眼差しで見ているし！

……宮古先生は（色々と）小さいままでいいと思いますよ？可愛いし。

そんなこんなで楽しく宮古先生イジリもとい授業ができて充実し

た時間を過ごせた。逆にクラスを弄りだすと際限なくノツてくるから下手に手を出せなくて困る。イベント時には是非ともハツチャケよう。

……やっぱり楽しいしね。

……。

今は入学式から四日が経った日の放課後、もう日も暮れて星が見え始めている。俺はそんな空の下、職員寮までの帰り道を歩いている。ただ俺が住むのは通常の職員寮とは違う。

俺の住む職員寮はISアリーナとIS開発部門のある研究棟との間にある。校舎から少し遠いが研究棟にも校舎にも等間隔の距離だから複数の役職を兼任している俺には都合がいい住処だった。

それでまあ今アリーナの近くを通っているわけだが……うん、おかしい。この時間、アリーナの使用は届けが無い限りできないはずなのに機械音が中からする。んー、音から推測するに一人かな？それもビームカレーザー系の射撃武器。

……まずはアリーナの使用届けが出ているかの確認を事務局に確認するか。

「ラミエルさん、ちょっと事務局にコールお願い」

『うむ、承った。暫し待つが良い。……繋がりましたぞ』

「ありがとう。……あー、一年二組副担任の九重ですが今第3アリーナを使用している者は居ますか？届けが出ているかの確認をし

たいのですが」

『はい、少々お待ち下さい。…… あ、はい、ありました。本日午後7時30分までの使用で届けが出ています。届け人は、はい、一年一組イギリス代表候補生セシリア・オルコットさん本人から提出されています』

ふむ、届けあり、つと。…… ん？一年一組？イギリス代表候補生？“セシリア・オルコット”だとお…？あの子この時期は主人公に喧嘩売ってイライラしているはずでマトモにアーリーナを使用していなかったはずじゃなかったっけか？

それともそれは俺の思い込みだったのだろうか？あー、原作の小説やマンガ、二次も結構読んでいたから知識が混在してんのかな？イライラしてっつてのは二次だったのか？技術情報は問題ないのにこういう知識は弱いなあ…。

まあなんにせよ。俺は二組の副担任であって一組のではないわけだから放っておいても問題ないか。使用届けも出ているって話だしね。サッサと事務との話を切り上げてお家に帰ろう！

「…そうですか、無断ではないので安心しました。それでは…」

『はい。ですがもう直ぐ時間ですのでよろしければ九重先生のほうから言っていただけるようお願いできませんでしょうか？』

チィイ、切り上げようとした瞬間に事務のお姉さんが待ったを掛けてきやがった…！なんという読みの深さ！俺の行動は先読みされていたというのか！？まあ頼まれたからには行くでしょう。

……お姉さんからの頼みだからね！

「………わかりました。俺のほうから言っておきます」

『はい、ありがとうございます。それではお願いします』

プツツという小さな音がして電話は切れた。ちくそう、マジカー……。事務のお姉さんめ……。ちょっと声が綺麗だからって俺がいつも言うことを聞くと思っくなよ……。いつかデートに誘ってやるからな！

はぁ……。バカなこと考えてないで頼まれた用件を終わらせてこよう。何気にあのお姉さん電話を切る前にアリーナ使用者の使用するピクトの場所を俺の情報端末ヘデータを送ってくれていた。

………いい仕事するぜい。

これなら擦れ違いにもならないし迷うこともないな。えーっと、アリーナに入るには……。？ああ、あつた、入り口はあそこだ。

「あー、少し教師らしくしようとしたらコレか……」

『なに、ここで嘆いていても始まるまい。疾く行くが良い』

「ああ……」

………。

………。

ここか……。届けのデータからAピットを使用とあるからとりあえずピットへ出よう。歩いてAピットまでの道を行く。でも途中にある更衣室やシャワー室には寄りたくないし近付きたくない。

……ラッキースケベは主人公の特権だしね。

それに今の俺は仮にも教師の立場にあるわけだから変な問題は起せないだろう。……更に言うなら相手がイギリス代表候補生なら国際問題になりかねない。

……痴漢や覗きの冤罪で社会的抹殺とかイヤ過ぎる。

それでまあアリーナ内を望める出口の先端に着いたわけで使用者のセシリア・オルコットを探していとISSスーツの姿で休憩している姿が見えた。

……あそこに居たのか。壁の影になって見えなかった。

驚かせないように足音は立てて近づくことにした。だつて驚いた拍子に大口徑狙撃銃でドタマをぶち抜かれたら堪ったものじゃないしさ！そんなの怖過ぎるだろ！

「…君がセシリア・オルコットだな」

「?????…そうですが、貴方はどなたですの？このISS学園に居る男は織斑さんくらいのはずですわ」

……確かにそうだ。それに顔も名前も何も知らない男に自分のフルネームを呼ばれるのはいい気がしないだろう。これは俺の配慮が足りなかったと素直に反省だ。

「む、許すがいい。まずは謝罪の印に自己紹介しよう。俺はIS開発部門兼IS整備部門兼一年二組副担任兼非常勤講師の九重・葵だ。疑問は解けたかね？」

こういう時は織斑・一夏と違い俺はメディアにも出ていない存在だからわからなくても仕方ないかな。なにせ入学式も辞退して二組の教壇に立ったのが生徒と初顔合わせだったからな。

……それでも学校内に噂だけは密かに浸透しているようだったが。そんなわけでまあ突然、女の園と言っても過言では無い場所に俺のような男が現れたら警戒されること請け合いだよな。

「……………男性の貴方がISを教える？男性でISの教師ですって？ISを使えない男性が教師？おほほほ、日本の殿方は“今のような冗談”が流行っておいでなのかしら」

ん？彼女の言う“今のような冗談”というのは知らんが使えるから教師などすることになった、それだけのことだ。そもその原因は東君だったけど…。もしかして俺はこの子にバカにされているのか？

「ふむ、最初は思うところがあったが、なに教師というものも今は存外に楽しんでいるよ」

そう言ったら「ふっ…」と鼻で笑われました。少しコイツを殴ってもいいかなと考えてしまった件について…。いやダメだけどね？だって仮にも俺は教師だし。……仮じゃなくて本採用だけど。

それにしてもISが出てきてから加速度的に男の立場が崩壊しているってスゴイね。俺がこの世界に流れてきた時は普通の、うん、現実世界のそれと変わらなかったのに、今ではこれ（セシリアを見て）だよ。

……女尊男卑の社会は世知辛え。

変に絡まれると厄介事を運んできそうだからサッサと要件を済ませてしまつか。今なら俺の堪忍袋の緒も切れることもないからな。アイリ達のような女性達に囲まれて生活しているとある程度は寛容になるものだよ。

「さて俺の要件を済ませよう。君のアリーナ使用時間が迫っているので注意に来たのだよ。さあ小娘、急ぐがいい。寮の門限まであと少しだ」

「こむすっ？ なっ……！（なんて失礼なの！日本の殿方は皆こんなのかしら！！）」

しまった……。つい二組のノリで“小娘”呼ばわりしてしまった。一組は織斑先生のクラスだったから生徒の人柄を把握していなかったのが痛い。

原作組の性格も実際に会うと案外わからないものだしなあ。表情はともかく感情が読めない。それでもまあこの子はえらくプライドが高そうだし……。沸点とかも低そうだし……。わかり易いほう、なのかな。

……言ってしまったものは取り消せない。畳み込んで即座に切上させるとしよう。

「いいから早く帰れ、小娘。練習することはいいい、だが今はダメだ、帰れ」

「なつなななああ！？貴方のような男にそこまで言われる謂れはありませんわっ！失礼ではなくって！」

「うるさい、黙れ。そして早く帰れ、邪魔だ。黙って帰れ」

これだけ畳み込めばいかに高飛車なセシリア・オルコットといえども意気消沈となって帰ってくれることだろう。内心ではゴメンね、という気持ちで一杯だけどね。女性に荒い言葉を使うのはそれなりに疲れる。

……ネタなら平気なんだけどね。

さて……現実を直視しようか。本当ならこのまま意気消沈とした彼女が走って帰るところだと俺は思っていたけど、どうやら読み間違えたらしい。目の前に居る彼女だが 肩を震わせてモノスゴク睨んできています……。

……下手には出たくなかったが優しくするべきだったのか？

「ッ！！なんですの！？その言葉は！！あ、貴方のような粗暴な教師に教えられている方達を哀れに思いますわ！！それはもう出来の悪い生徒に……」

「黙れ」……

この子は今何を言ったのか？俺の生徒をバカにしたか？したよな

？うん、それは アウトだよ。だから…。

「ッ！……（今身体がゾクゾクッとしましたわ。…え？今の感覚は…え？え？）」

今までの“黙れ”という言葉よりも強めに力を込めた。魔力ではない。今のは“意志”という名の力を込めたんだ。わかり易く言うならば“想いの力”だな。それを人はカリスマと認識する。

……最も俺のは一時的なもので言うなればカリスマ（偽）だけど。

「黙れ、小娘、いや、セシリア・オルコット。俺のことをとやかく言うのは構わない。だが俺の生徒への侮辱は断じて許すことはできない」

そうだよ。俺のことだけなら別に構わないよ。そりやものすごくへこんで職員寮に帰ったらラムエルさんにコレでもかと言うほど慰められている光景が目につかぶけどさ。それでも俺の生徒にまで言葉を向けるのは間違っていると思うわけですよ。

何をそんなに焦っている？

何をそんなに追い込まれている？

何をそんなに力んでいる？

もう少し肩の力を抜いて外の世界を見てみれば、もっともっと広く世界を見ることもできるし、もっともっと色鮮やかに世界を見ることもできるだろうに…。

……少しは休むことも覚えたほうがいいと先生は思っただけだねえ。

「…ゆ“許すことはできない？”ならば暴力を振るいますの？ISも使えない男の貴方に勝ち目があるとは思えません」

なんだかそんなこと考えていたら怒る気持ちが萎えちゃったしなあ。それに彼女の言う暴力なんて振るえない。泣きそうな女の子を殴るなんてできないでしょう？いや、実際に彼女が泣いているわけじゃないけどさ。

ああ、そうか。彼女の気晴らしになればいいんだ。

「暴力？違うな、これは教育的指導だ。…そして一体、誰が“ISを使えない”などと言った？」

憎悪の空より来たりて、正しき怒りを胸に、我らは魔を断つ剣を執る！汝、無垢なる刃！

「デモンベイン
魔を断つ剣！！」

デモンベイン
魔を断つ剣 ISには珍しい全身装甲、それもかなりの重装甲だ。その姿は正しくこれは重厚で堅牢な難攻不落の城壁のイメージを髣髴とされる機体だ。

頭部には雄雄しきライトグリーンの鬣、大きく張り出した肩部は比類なき力強さを感じさせる。背面とアンロック・ユニットが半身体となった高速飛行補助型“シャントク”は大空を翔ることに喜びを感じさせるものだ。

そして特徴的なのは両足から腰の高さまで突き出した断鎖兵装“ティマイオス”と“クリティアス”だった。

“ティマイオス”と“クリティアス” この二つは時空間歪曲機構の作用によって生み出される爆発的な反発力により瞬間加速イクニッション・フーストの数倍の加速力を以って推進するものだ。

……魔改造ですが何か？

この機体を製作するに当たり単純な装甲防御力は勿論、それ以上に防衛機構を満載した。たぶんだけどシールドバリア無しでレールカノンを喰らっても装甲が凹むくらいで済むと思うね。機械（IS）と魔術（葵謹製）の愛の子というのは伊達ではないのだよ。

……この世界に魔法も魔術もないけど外の世界から来た俺には関係ない。それに薄いけどマナは感じるし。

例え魔力の枯渇した世界でも俺は散々に大量にして膨大な魔力を保有しているから半永久的に魔法行使可能なのさ。かなり溜め込んだ。ラミエルさんの中にも貯蔵されているから尚大丈夫だね！

「……（なんと雄雄しき姿なのかしら…はッ!?）そ、それは、その姿はISですって!?なぜ、男ではあの織斑・一夏だけのはすですわ!」

「他のことなど知らん。俺は俺であり俺以外の何者でもない、ただそれだけだ。俺以外の何かになるつもりも無いしな」

「…………（この男…何という力強い意志をお持ちなのでしょう）」

「さあ構えろ、セシリア・オルコット。教育的指導をしてやろう」

「ッ！よろしいでしょう！例え教師といえども降りかかる火の粉は払わせて頂きますわ！！」

セシリア・オルコットは宣言と同時に自らのISを顕現（この世界では量子展開というのか？）をしたのであった、なんてな。

……。

セシリア・オルコットが“ブルー・ティアーズ”を纏った時、即座にデモンベインのハイパーセンサーが相手の簡易スペックを表示する。

彼女が搭乗する専用機IS“ブルー・ティアーズ”の戦闘タイプは中距離射撃型。オマケに特殊兵装が搭載されており“ブルー・ティアーズ”というビットを持ち、主兵装は六十七口径特殊レーザーライフル“スターライトmk？”が一門とある。

機体名とビットの名前が被っているのはややこしいので今後、機体は“ブルー・ティアーズ”特殊兵装を“ビット”と呼称しよう。

上空に飛び立ちながら考えるのはセシリアの搭乗する“ブルー・ティアーズ”のことだ。細かいことは省くが確かこの手の特殊兵装は一对多戦闘向けのはずだ。単機による射撃特化型と言っている仕様の装備と推測する。

「わたくしを侮辱したことを後悔させてみせますわ！」

「（侮辱したつもりは無いが……）いいだろう！ならば見せてみるがいい！己が最も輝く姿を俺に魅せてみる！セシリア・オルコット！」

星空の中、俺達は数百m離れて向かい合った中で試合は始まった。
「ごめん、うそ、限りなく私闘に近い教育的指導です。でも俺は教師だ。クラスは違えども生徒のためになるとなれば……やるしかないだろ。」

……^{イベント}こう面倒事が続くようなら流石に萎えるけどな。

「（ああ……なんと力強い、意志！）さあ踊りなさい！わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

セシリア・オルコットはその言葉と同時に何の躊躇もなく六十七口径特殊レーザーライフル（名称は“スターライトmk？”）を撃ち放った。狙うは俺の心臓……って、こわっ！？

彼女の操縦するIS“ブルー・ティアーズ”がスターライトmk？で俺の機体の中心点を狙った狙撃は学生の今でさえ驚くほど正確だった。並みの相手ならば一方的に撃破できるだけの腕を彼女は持っている。

……だが、だからこそ甘い。

「（学生の身でこの正確な狙撃か……素晴らしい）……だが、その正確さゆえに弾道の予測も容易い！よって避けることも容易だ！」

高速飛行補助型ユニット“シャントク”にエネルギーを回し、小さく機敏な動作ができるように機体の機動データを（主にラミエルさんのサポートを受けて）調整する。

……イキナリ亜高速の速度なんて出したくもないし。

部分調整したお蔭で苦もなく空中で一步分横に移動することで初撃を回避した。うん、いい調子だ。多少、空中機動の切れが鈍く感じるが彼女の指導、それに気晴らしも兼ねているのだからこれくらいがいい。

「…ッ（あんな、あんな簡単に避けられた…！？）まだですわ！そこっ…！」

俺が狙撃を回避したことで一撃、二撃、三撃と正確な狙撃が続く。しかしそれはデモンベインの小さな空中機動で悉く避けられる結果に終わる。彼女は諦めず更に一撃、二撃、三撃と正確な狙撃をする。

……ここまで正確だと避け易いよね。

どれも教本通りの正確さで不純なものを極力排したような純粹さを感じられる。これが的当て競技ならば確実に上位を狙えると思うね。でもそれは無機物を相手にした時の評価でもある。

「…???（あれは拳銃？名前は…クトウグアにイタクア？どのような効果があるのかしら）わたくしと銃撃戦をしようとは片腹痛いですわ！」

「……………」

彼女は銃撃、その中でも狙撃に絶対の自信を持っているようだ。俺はただ静かにクトウグアとイタクアを格納領域から実体化させ両手に構えセシリア・オルコット（の心臓）に照準を合わせる。

俺が彼女のためにできることは射撃戦における、より実践的な、

うん、言ってしまえば泥臭い方法だ。

純粹さ？大いに結構だ、だがそれは試合では邪魔だ。

正確な狙撃？大いに結構だ、だが時としてその正確さが仇となる。狙撃に絶対の自信？大いに結構だ、だが慢心するとは精進が足りない。

……さあ射撃合戦といこうか。

「セシリア・オルコット、一つ教授してやろう。貫き決れ！クトウグアー！」

右手に構える自動式拳銃クトウグアを連射して彼女の周囲へ斉射して動きを封じ込める。そこへ止めの三点射、それぞれ心臓、頭、そして一番命中率の高い腹部に一発ずつだ。

彼女も灼熱のエネルギー弾を回避しようと出来うる限りの行動を取るが機動を制限された状態で完全は不可能だった。

「シールドがつー！なんという威力ですの！？っ！そこですわー！」

クトウグアの灼熱が襲い、セシリア・オルコットの操縦する蒼き^{ブルー・ティ}アースの晴れ渡った青空のような装甲が微かに焼け焦げている。そのことで一瞬動きが鈍るがそれでもスターライトmk？で反撃してくる。

むう、意外とシールドが削れていないとは……。やはり実践仕様では危ないと判断して試合用にリミッターが掛かっている状態ではこれが限界ということか。いや、これはこれでいいのか？

……彼女の指導と気晴らしが目的だしね。

直ぐに撃墜じゃ彼女の気晴らしにもならない。何より、そんなことをすればイジメみたいになる。それに指導になりようもないじゃないか。だから結果良ければ全て良し、と言ったところか。……そして！

「まだだ！まだ終わらない！！喰らい付け！イタクア！！」

回転式拳銃イタクアの撃ち放った全六発は極寒の冷気を纏うエネルギー弾だ。それが彼女目掛けて銃弾特有の鋭く早く一直線に突き進む。

「これくらいなんともありませんわ！」

当然、彼女はバカ正直に銃弾の的になってくれるはずもなくクトウグアの時と違い夜空を大きく舞い全ての銃弾を回避した。彼女は得意げに俺のを見てくる。「こんなもののですか、先生？」とでも言うように。

……だから君は甘いのだよ。

回避された極寒のエネルギー弾はキンッキンツと鋭角的に曲がる、曲がる曲がる曲がる！！敵を捕捉せよ！敵を追撃せよ！！敵に突撃せよ！！ガンホー！ガンホー！！ガンホー！！！！

百発百中の全六発の極寒纏う魔弾はセシリア・オルコットの背後から奇襲を仕掛ける。

「くうう！！そんな！？エネルギー弾が曲がったですって！！（今のは、そんな！まだ理論上のもものではなかったのですの！？）」

ミサイルや誘導弾なら驚くには値しないだろうけど真直ぐにしか射出されないエネルギー弾が自立的に追尾したのは驚くものなのか……。この世界の科学的基準がわかり難いなあ。……どこかで基準を定めないと大きな力をやらかしてしまいそうだ。

「驚くな。それができるだけの技術も腕もある、それだけに過ぎない。肝心なのは“思考することをやめないこと”だ。常に考え、動き、試行錯誤し、状況を打開することだ」

「……ッ！（“あの男”とは違うのですね。……ならば貴方の言うとおり打倒しましょう！）行きなさい！ブルー・ティアーズ……！」

ブルー・ティアーズから解離したのは四つのビット（ブルー・ティアーズ）。セシリア・オルコットの意志に忠実に従う番犬が静かに解き放たれる。

「否！貴様のそれは悪手だ……！」

ブルー・ティアーズのビットとは視界外からの奇襲と数に物を言わせた面制圧で本領を発揮すると俺は考えている。無論、彼女の考える“ビットの使用定義”なるものがあるとは思っけだね。

それで回避に専念していると彼女の操るはビットは速射も連射も一呼吸抑えている。観察した限りの動きから推測するにどうやら彼女は自身の正確な狙撃をイメージしているように見えるのだよ。

……ならば俺も付き合おう。

ビットの射撃を回避しながら俺はISであるデモンベインにイメ

ージ・インターフェイスを通して今欲しい兵装を命じる。そう、あのビットに合わせて対抗する手段の一つを呼び出す。

「迎討て！ナイトゴースト！！」

ナイトゴーストは高度なAIを搭載した独立支援機だ。ナノマシン集合体のため固定された姿はないが基本的に大きさ50cmほどの夜魔のような姿をしている。音声会話とイメージ・インターフェイスを使用した思考会話で操作することが可能だ。

ナイトゴーストを搭載した切欠はただ単に“単独での戦闘はイヤ、だってコワイじゃん？”という俺の臆病からくるものだったが役に立っていますぜ、旦那。

「ふふんっ、自立機動兵器の“たかが一機”でわたくしのブルー・ティアーズを止められるものですか！！行きなさいッ！！」

「（人が気にしていることを…！）くくくっ！ひよっこの貴様に自立特殊兵装を用いた“連携”の重要性を教授してやろう！！」

迫り来る四つのビットを俺とナイトゴーストは時に互いを囿にして一つ目のビットを落とし、時に背後を守り合い周囲を警戒し、時に共に突撃して一人と一機で二つのビットを落とし、時に敵の射線を塞ぎ、時に攪乱し狙いを狂わせる。

あのブルー・ティアーズの“ビット”は特殊レーザーを射出する

ことができるものだ。この世界では大胆な発想と堅実な設計思想の下、開発されている。…俺もビットやファンネルは王道だと思うよ。

変わってデモンベインの“ナイトゴースト”は固定された姿を持たないナノマシン集合体だ。中距離戦闘にエネルギー弾を使用し近接戦闘ではナノマシン全体を振動させることで超振動攻撃を爪となり牙となり刃となって襲い掛かる。

うん、厳密に言えばブルー・ティアーズの“ビット”とデモンベインの“ナイトゴースト”は違うが根っこの部分は同じだ。そう、つまり自立機動兵器であることは変わらない。

閑話休題…。

上空に佇むブルー・ティアーズの更になら眺めるのは最後のビットを破壊して（壊していない、墜落させただけだ。弁償とか、なにそれこわい…）、ナイトゴーストを左横に待機させたデモンベインを操縦する俺だ。

「連携の重要性を理解したか？これが“人機一体”となることで得られる強固な絆であり、その最高峰の一つだ」

「…そんな（一人と一機、交互にフェイントを併用しどちらか一方が奇襲を仕掛けるなんて）…これは（経験が違いすぎますわ！）」

「ごめん、先生は言葉にしてくれないと君の言いたいことがわかり

ません。「…そんな」の次は何？「…これは」の次は何？先生はスゴク気になりますよ…。とりあえず当たり障りないことを言って教師らしい態度を表現してみるか…。

「…貴様は良くも悪くも教本通りの動きしかできていない。機体情報^{ヒョウ}を鵜呑みにして自ら試すことしないからだ。なぜ、できないと判断した？なぜ、できないと思う？なぜ、そこで終わる？」

「……わたくしは（わたくしがここで終わる？ここまでですの？…いいえ！そんなはずありませんわ！！）」

イ、イカンツ！？ハイパーセンサーの捉える彼女の表情は泣く一歩前の段階のそれだツ！？夜のアリーナで女子生徒と教師が二人きり…それも女子生徒は泣きそう！？こんなのが第三者の目に留まれば教師（俺）は悪者決定じゃなかるうか！？

……なんとかして 逃げなければならぬ！！

「む！アリーナ使用時間が残り少ないようだ！最後はこれで指導を終わるとしよう！バルザイの偃月刀^{えんげつとう}！！ハアーツ！！」

この時の俺は間抜けにも焦っていたのかもしれない。ブルー・テイアーズにはビットが全部で四機以上あることを忘れていたんだから。

そのまま急接近した俺は残り15mとなった時にシッカリと見えただよ。そう、俯いて口元以外捉えられないセシリア・オルコットの、その口角が“ニイイ”と釣り上がったのを確かに見た。

「……掛かりましたわ。ブルー・テイアーズは四機だけではなくて

よ！」

そう言う彼女だがそれは二流だ。気付いてしまえばどうと言うことはない。打ち出される弾道型ブルー・ティアーズは喰らい付かんと追いつがる。すぐさま上空に進路を変更、回避に専念したが追尾性能の高い弾道型ビットを振り切ることができない。

そしてドガンツ、ドオンツという爆発音が二回…。

彼女には俺が撃墜されたように見え、更に今までの状況から一矢報いたように感じているんだろう。男の俺に一方的に押されていたのだからそれも仕方ないかもしれない。彼女は今も“俺の目の前で嘲笑している”のだからな。

……笑いたくもなるだろう。だがそれは甘い。

ガシャアンというガラス（鏡）の割れる音がすると彼女が、セシリア・オルコットが見ていたデモンベインの姿が消えていた。

「えっ！消えた！？どこに居ますのー！！」

「どこを見ている？よく見ろ、俺はここに居るだろうが」

「い、いつの間に…！？」

彼女は俺が先程まで居た15m地点に突然に現れたことに驚いている様子だ。だがわからないからと言って方法を聞くのは感心しない、考えると言っただろうに…。機体スペックをペラペラと話すが、さすがにじゃないか。

……弱点などを探られては困るからな。情報は極力秘匿するに限る。

因みに今のはニトクリスの鏡：簡単に言えば非実体の^{デコイ}。電子的・視覚的のように様々な妨害が可能でもある。

「そして時間もない。今日の指導はここまでだ。はあーっ！ー！」

「え？あ？き、きゃーっ！ー！？」

俺はバルザイの^{えんげつとう}偃月刀を呆然とするセシリア・オルコットの身体
の中心線に沿って上段から下段に掛けて一気に振り下ろした。それは絶対に真っ二つにするという意志を込めた力強い一撃だったな。

……。

……。

時刻は午後8時15分…。アリーナから学生寮までの道のりを歩く影が二つ…。

「……（この殿方は私の理想“強い意志を持った男性”…）」

「……（なぜに黙るし…）」

「……（いえっ、でもっ、葵さんはこの学園の教師ですわ！）」

「……（なぜに空気が重いし…）」

「……（わたくしは生徒ですし…ああ、もう！わたくしは一体どう

したらいいですよ!!)」

「……（なぜに身体を震わせるし……ん？今寒気がした）」

……沈黙が痛いぜい。

はい！そんなわけで教育的指導を終えた九重・葵です！！結局あのあとセシリア・オルコットは最後の一撃が原因で気絶しやがったよ。うん、俺の予想以上に彼女の身体に過負荷が掛かったようだ。これでは危なくて使えないし今後、要調整だな。

それもあってアリーナ使用時間を過ぎてしまったので俺が彼女を学生寮へ送っている最中でありますです！彼女のほうは俯いて歩いているのです！表情も見えないのです！何を考えているのかわからないのです…。

暫く歩いて寮が見えてくると門の前に仁王立ちした女性の姿が見えて……って！あんな下手な男よりも男らしい女性なんて一人しか居ないじゃないか！……確か一年の寮監もしているって話していたしね。

「随分と遅いお帰りだな、セシリア・オルコット。寮の門限は疾く過ぎているぞ」

「あ、それは…その、申しわ…」

「いやー、すみません、織斑先生。実は自分のせいです」

ここで彼女を庇ったのは間違いじゃないと思います…。だって教育的指導をして気絶させたのは俺だしね。そのせいでこんな時間に帰らせることになったんだ。庇うだろ？普通。

……織斑先生のギラリと光る瞳が怖いです。

「む、九重先生が？それはどういことですか？」

それでも話を聞いてくれる織斑先生が大好きだ！ではでは拙いながらも説明をさせていただこうではないか！織斑先生　言い訳を聞く時間は十分か？い、言ってみただけです、ごめんなさい！！

「……ええ、実はアリーナを使用している者が居たようなので早く帰るように言うつもりだったのですが、彼女の訓練姿を見て、つい俺も実機の訓練に夢中になってしまい生徒を解放する時間が遅くなっでして。あはははっ、申し訳ないです」

う、ウソは言っていないよ？色々と端折ったけど少し言葉を削っただけで本当のことしか言っていない、うん。

「ふむ……オルコット、そうなのか？」

……なぜに織斑先生は俺ではなくセシリア・オルコットに聞くのですかな？そんなに俺の信用はないのだろうか。明日、職員室でその辺を聞いてみようか？……やめよう、緊張でお茶の味がわからないくなりそうだしね。

「えっ？あの…（ヒツ！）え、ええっ、そ、その通りですわ、ええ！“葵先生”のご指導には感服いたしましたわ！」

織斑先生に見えないようにギロツとセシリア・オルコットを睨んで「話を合わせるよ」と視線に力を入れて脅はげぶんげぶん説得、

うん、説得した。でもこの子は根が素直だからウソとか基本的に向いてない。…直ぐに態度に出るし。

……ん？“葵先生”だとお？

「……………そうか。九重先生、ウチのクラスの者がお世話を掛けたようです。すみませんでした」

それどころじゃなかった！つか！うわ、絶対バレてーらー！！
織斑先生、絶対に疑っているよ！それでも何も言わないところを考えると、どうやら今回は俺の顔を立てて見逃してくれるようだよ！
！いい先生だ！彼女はいい先生だ！！

……でもこれは“貸し一つ”ということなのだろうか。

「あは、あははは…いやだなあ、気にしないでくださいよ…。それにオルコット君はなかなか筋がいいです。流石は織斑先生の生徒さんですよ。では俺はこれで失礼し」

「あ、葵先生…！（今、お話ししませんと次の機会があるとは思えませんわ！）」

セシリアエ…。俺に何か恨みでもあるのか！？いいか？織斑先生は俺達のウソに目を瞑ってくれているのだぞ！その気マズイ場を脱出しようとする俺の心情も少しは察してくれてもいいんじゃないか！？

「……………何か、オルコット君、何か？」

「（なにをそんなにお顔を引き攣らせておられるのかしら？）また

…また、お相手…していただけますか！」

「（あー、つまりは動くサンドバックが欲しいのね…）…いいだろう。ただし、訓練する場合は事前に連絡するように。いいな？」

「は、はいっ！よろしくお願いしますわ！（これでまた“二人きり”ですわ！ああ、夜空の下、星の海を…うふふっ）」

……はいはい、先生は生きたサンドバックになりますよー。

このブルジョアめ、そんなに嬉しそうにしゃがって…！！そんなに今日のことが頭にキタというのかっ！？ボコツたのは確かだが普通その仕返しに“サンドバックになれ”はないと思うんだが…。

教師は辛いぜ！！主に体力・肉体的に！！あ、それと精神的にも！！……気疲れが多いのよ。

第3話「アリーナに来ちゃった」(後書き)

セシリアフラグ？ありませんけど何か？

ええ、ありませんとも、あったとしても葵は気付いてない。

だからセーフなのですよ。ヒロインは一夏寄りになる、はず…。

いや、大丈夫。葵もスルー（気付いてないだけ）しているのですからね。

それになんと言っても葵は二組の副担任です。

一組との接点なんて”現時点”では存在しませんよww

大丈夫、これ以上フラグは立たないハズもとい立たないです。

ではでは！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

IS & キャラ設定集だったりして…。（前書き）

ある日突然、作者の脳が妄想に囚われてしまいました。

そして我慢できなくて設定作っちゃったですよ！

気紛れ更新だと思うから気長に待っていてくれ。

まあ”なのは”のようにPCを初期化して加筆修正されたデータを消さなければねえ？

あのようなことが起きなければ永遠には旅立たないはず……。

もう”なのは”書けるかわかんないや…。

アレに関しては限りなくモチベーションが下がっているからね。

修正ってメンドイのよ…。

前後の文章がおかしくならないように直そうとするんだけど失敗するしね。

それでもまた修正するから時間が掛かるの。

やっとできたと思えばCPがイカれて初期化ですよ？

マジでイラッて来たね…。

すまん、これこそただの愚痴だな。

女々しかった。ホント、ごめんなさい。

IS & キャラ設定集だったりして…。

IS < インフィニテッド・ストラトス >

本作の主人公…。

別作品へお邪魔してきちゃった うん、趣味だよ…。反省しているけど後悔はしていない。だって楽しいもの！ 気晴らし的な意味で！あはははっ！！！！ごめん、調子に乗った。今後は気を付ける…。

九重・葵…。

外見年齢21歳（実年齢800歳以上）、でも学園では三十路設定。性別は男性。日本人だから身体年齢よりも若く見える。黒髪、黒い瞳。身長170cm。体重62kg。

能力は開発（魔法・科学）・資源（何でもござれ）・技術（魔法・科学）・武器や乗り物の操作・操縦（某使い魔的な能力が2つ）・寿命などが全てチート。中でも開発・資源・技術は群を抜いている。文字通りこれらに際限が無い。

このIS世界では日本の横浜に拠点（研究所）を構えている。ちよつとした予想外でISを偶然にも手に入れることが出来た。その時に自分でも動かすことが出来ると知ったために専用機を自ら開発した。ネタ的な意味でやや暴走した…。

現実世界に居た頃からなぜか体質的に猫に好かれる。でも本人の気持ち的には犬派。最も猫も嫌いではない。動物を愛する気持ちに偽りなし。子犬には好かれるが成長すると噛まれる。それでも懲りずに撫でようとする。愛は偉大だ…。

親しい人を対象にだが優しく思いやる気持ちが人一倍ある。

全体的に中世的だが少し男性よりの容姿。目鼻立ちハッキリし

ている。強面ではない。目元は釣り上がっていて怖いが良く見ると優しい瞳の色を宿している。眠たげ。

現実世界から女神（幼女）の手によって“ネギま！”の世界に落されたが与えられた能力と自力で研究した結果“異世界”または“別世界”と言われる世界へ時間を、空間を、次元を歪ませて飛び越えることを可能にした。

だけど、“IS”の世界に来たのは事故。世界間を移動する実験は結果的に成功を収めたが暴走事故のためラミエルだけしかお供が居ない。

ラミエル

葵のことを我が主と呼び慕う。構成人格は女性型。負けず嫌い。正八角形をした青いクリスタル。待機状態は3cmの正八面体のペンダント。いつも葵の胸元で揺れているデバイス？

葵以外で実験に巻き込まれた唯一の存在。この“SI”の世界では葵の最大の理解者であり家族。電子ネットワークの海を散策することで順調にIS技術や知識を吸収中。

とある時にネットワーク上で偶然にも“篠ノ之・束”と接触した疑いがある。ただし接触も一瞬のことなのでお互いにハッキリしていない様子。

葵がこの世界の“IS”を実際に触って、見て、弄ってみたいと呟いたのを聞いたラミエルは密かにハッキングして某研究所へ輸送されるはずだったISの輸送先を葵の住居兼研究所に変更した。束博士が関与した疑いあり。

ISが届いた時に葵は慌てて返還しようとしたがハッキングという手段を用いたのにデータ上では正式な手続きを踏んだことになっているため運び込まれたISはそのまま葵の研究所所属になっている。ラミエルの手際は完璧だった…。

最大展開では100mの巨体になるがこの“IS”の世界では空中要塞（大小様々な荷電粒子砲、ミサイル、掘削用ドリルなどを搭

載)よりも純粹に電子情報系のサポートを重視している。次元結界を独自に習得したが使う予定は無い。

防弾チョッキ代わりに強力なDフィールドは健在。無機物に関しては悪食。何でも取り込み解析し吸収する悪癖がある。空間領域に色々な物が格納されている。趣味は自己進化、自己強化。最終兵器たる孫の手を完備。

ちよい役…。

少しだけ登場する人達。……………それ以外に何を言えと？

女性教師…。

名前は宮古・京、^{みやこ・みやこ}25歳。身長157cm体重は kg:あれ？ kg:むう、本人の意思により掲載不能。

体型はスレンダーぼでえ。胸は:押して知るべし。大丈夫だ、大きじゃない。小ぶりなほうが下着は可愛いのが多いさ！

一年二組の担任。担任なのに始終ペースを葵に取られてしまう可哀相な人。でも本人は仕方ないなあ、と広い心で許せる優しく大らかな一面がある。葵曰く美人目可愛い系おるおる属。少し妄想癖がある。

機体名:デモンベイン

全身装甲。装甲には葵が錬金術で練成した特殊合金ヒイロカネを用い、何重にも機械的防御と魔術的防御が施されている。一部位的な例として機械的には装甲素材・Dフィールドなど、魔術的にはルーン文字による強化・固定化などがある。

搭乗者を半ば無視するマシンマシマム構想。機械(IS)と魔術(葵謹製)の愛の子。通常のISに比べてかなりの重装甲。そのため通常兵器では傷一つ付ける事ができないという利点がある。

エネルギー源は通常のISコアから得られるものとメタトロン技

術の一つであるアンチプロトンリアクターの二系統。

前者の説明は省くとして後者は反陽子生成炉。メタロン製のリアクターによって反陽子を生成、これを陽子と衝突させることで対消滅を起こし発生したエネルギーを動力や電気エネルギーに変換する半永久機関。

そして後者は搭載されているが緊急時以外は封印中。理由としては“エネルギー消費をほぼ無視できることと半永久的に活動可能というフザケタ仕様のため究極的に卑怯だから”というものがある。

特筆すべきことはメタロン技術を用いた大規模演算を可能とする量子コンピュータを搭載していることだ。通常のISが搭載している量子コンピュータ以上の演算力を発揮することができる。

その恩恵は補助兵装である“ナイトゴント”の高度に自立AIや量子化されている武装の格納領域にも影響している。後者は多数の武装を装備するデモンベインには必要不可欠だった。

デモンベインを製作するに当たり葵という搭乗者の凄まじいほどの臆病な性格が浮き出て反映された機体。単純な装甲防御力や防衛機構が満載されている。正しくこれは重厚で堅牢な難攻不落の城壁をイメージされた機体だ。

だがしかし過剰なまでに各種機能や兵装、防衛機構を組み込み、機体を頑丈に造ったため機体重量が増加した。単体の飛行ができないわけではないが三次元空間戦闘には専用の飛行補助型アンロックユニット“シャントク”が必要不可欠という欠点がある。

そして欠点の解決だけではなく“シャントク”を装備したことでISに必要な三次元空間における高速飛行能力を手に入れることができた。

機体デザインの特徴としては両足首から脚部前面を覆うように突き出た装甲が挙げられる。チャームポイントはライトグリーンの長い鬚。

.....。

ワンオフ・アビリティー
単一仕様能力…。

コル・レオニス
獅子の心臓…。

通常エネルギーとは別にある第二の動力炉であるアンチプロトンリアクターの封印を解き尚且つ臨界稼働させることで超大なエネルギーを無限生成する。そして生成されるエネルギーは機体と搭乗者が持つ限りエネルギーは供給され続ける。

供給される高エネルギーは機体性能の向上は勿論のことだがナノマシンを活性化させ機体を瞬く間に完全修復する。さらに一時的にはあるが補助兵装である“ナイトゴースト”が1機から3機に増加される。

……。

デモンベインに搭載されている武装一覧…。

基本的に某機神咆吼の主人公の機体と同じ。ただし今後、作者が趣味に走った場合に限り無作為に武装が増える……かもしれない。増やすのは疲れるからない可能性が高い。

小型レーザー砲…。

固定武装としては頭部に小型レーザー砲が2門装備されている。

本来はバルカン砲が装備されていたが耳元で騒音が激しいため静穏性に優れるエネルギー兵器に変更した。この武装は即応性が高いが威力は低く精々が牽制目的の補助武装である。

バルザイの偃月刀…。
えんげつとう

近接武装として幅広の刀身を持つ機工大剣。ブーメランのように投擲することも可能。投擲時には自動で敵を追尾し一当てすると手元へ帰還する。
ギミックブレード

断鎖兵装ティマイオス・クリティアス…。

両足に装備された、この時空間歪曲機構による近接粉碎兵装“アランティス・ストライク”がある。また、この時空間歪曲機構の作用によって生み出される爆発的な反発力により推進する。

ニトクリスの鏡…。

様々な妨害が可能。チャフやフレイのような^{デコイ}。実体無き分身。電子的・視覚的など様々な感覚を狂わせる。

アトラックIIナチャ…。

捕縛専用兵装。蜘蛛の巣状の捕縛結界を広範囲に渡って展開する。接触した場合、高粘度のエネルギー体が張り付き、絡み付き相手の動きを封じる。

遠距離武装“自動式拳銃クトウグア・回転式拳銃イタクア”…。

自動式拳銃クトウグアは高打撃力・高貫通力・超高熱のエネルギー弾と放つことを可能とし、回転式拳銃イタクアは高い追尾性能・高威力・極低温のエネルギー弾を放つことが出来る。

限定兵装として両武装を用いた特殊兵装を展開可能。使用する時には暴発予防のために設定してある安全装置^{セーフティ}を解除する必要がある。特殊兵装を発動するための起動言語は「フルグレイ・ムグルウナフ・クトウグア・イタクア。フォマルハウト・ンガア・グアナフルタグン」。

レムリア・インパクト…。

無限熱量を右手に宿す必滅の威力を持つ近接昇華兵装である。使用時にはヒラニプラ・システムを発動しナアカル・コードを暗号化構成する必要がある。通常時ではこの兵装が第一の決戦武装に挙げられる。

シャイニング・トラペゾヘドロン…。

最大出力で使用した場合、対象を完全消滅させることができる究極殲滅兵装。あまりに危険なため“死闘”にならない限りはリミッターが働き試合用の低出力へ強制的に下げられる。

ただし使用するには条件がある。それは大量のエネルギーを必要とするため単一仕様能力の発動中に限るといいうが発動の絶対条件だ。
ワンオフ・アビリティ

……。

補助兵装…。

戦闘・基本活動など全てに渡って操縦者の行動を補助^{サポート}することを目的とした自動戦闘支援機。

ナイトゴント…。

高度なAIによる独立支援機。ナノマシン集合体のため固定された姿はないが基本的に大きさ50cmほどの悪魔のような姿。操縦者とは基本の音声会話とイメージ・インターフェイスを使用した思考会話で指示することが可能。

シャントク…。

高速飛行補助型アンロック・ユニットとして装備。優れた空間飛翔能力を獲得し、過剰なほどの機動力を発揮できる。最大速度は搭乗者に多大な負担がかかるため普段は三段階に渡ってリミッターが掛けられている。

IS & キャラ設定集だったりして…。(後書き)

うん、デモンベインをパクッたぜ！

……魔改造だけだな！

ハードル高いわー。

万が一、ダメだと思ったら人知れずにポシヤるかもしれんな！

あはははははっ！！うん、消える時はキチンと予告します。

この設定集ページはちょこちょこ更新、変更されるかもしれませんが。
あしからず！

タイトルのIS/A & R時々Dは

”IいやあS失敗した/A葵さんとRラミエルさん時々Dデモンベイン”

の略称です。気分で決めたから意味は無い。

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第4話「中国代表候補が来ちゃった」(前書き)

原作では一巻中頃から後半辺りでしょうかね。

息抜きで書いているはずなのに文字数が”ネギま!”並みに増えること増えること…。

もう息抜きじゃない気がするわー…。

ポシヤらないように応援お願いします!

では続き!

第4話「中国代表候補が来ちゃった」

やあ、九重・葵だ。明けて翌日、セシリア君（今日の昼頃に名前
で、とお願いされた…なぜ？）を指導して、今俺は放課後の第3ア
リーナでISを装着してここに居る。

なぜ放課後のこの時間に俺がこんなところに居るかと言うとだ。

今日、午前授業の休み時間に訓練の相手を要請されたからに他なら
ない。動く的になれというのか？そんなに俺が嫌いか、セシリア君
…。

だが俺はタダではやられないし起きない。折角の専用機との訓練
もとい指導訓練だ。授業外だが良い見本、教材になることは間違
いはずだ。それに生徒の良い刺激になれば教師としては言うこと
はない。

よって！俺は副担任権限で二組の連中に“今日の放課後に時間の
ある者は第3アリーナへ見学に来るように”と帰りのSHRで突然、
宣言しておいた。本気でISを求めているならば来るように、とも
言っておいたな。

……強制じゃないよ？自主性は尊重したよ？ホントだよ？

そして今！アリーナの観客席の一部は我らが二組の生徒で占領状

態となっております！一人も残さず皆が来たぜい！！イヤツフウーッ！！お前らのISに対する情熱、確かに受け取った！

……よく見て技術を盗むんだぞお、いいなあ？

ん？デジタルカメラにビデオカメラ？なぜに完璧な撮影態勢を確立しているし……。あー、教材資料として映像と写真に残そうという魂胆だな。なるほど！我が二組は無駄に気が利くじゃないか！俺もそこまで考えてなかったよ！

あれ？声が聞こえる？ハイパーセンサーが生徒の声を捉えた。内容……おい、なにが「先生え、こっち向いてえ」なんだ？いや、お前ら？その撮影機材は教材確保のために用意したんだよな？学ぶためだよな？え？違うの？え？

「……………（二人つきりではなかったの？）ちょっと葵先生、よろしくて？」

「……………何か、セシリア君、何か？（人目がないところでフクロにしようなんてさせないよ……）」

俺の目の前でISブルー・ティアーズを装着したセシリア君が冷たい視線を俺に寄越してくる。……いや待て。とにかく待つてくれ。俺は悪くない。二組の生徒に来るように促したのは確かだがこれも考えがあつてのことだ。

それにいくら約束していたとしても別クラスの生徒を無断で指導するわけにもいかない。キチンと織斑先生に許可を取りましたとも。その時のやり取りを簡単に言つと以下の通りだ。

「セシリア・オルコツトを鍛えたい」率直に言った俺。

「なぜ？」胡散臭げな目で聞いてくる織斑先生。

「織斑・一夏の強敵となれるように」意味深に言い切った俺。

「……………そうか」目を瞑り沈黙のあとに肯定してくれた織斑先生。

というものだ。織斑先生もわかつているんだ。これからの彼は“ISを使える男”としてほぼ決められた人生を歩むことになることをな。だからこそ織斑君の成長を願っている。そのためには“強大な敵”、所謂好敵手^{ライバル}が必要不可欠だ。

言い方は悪いがセシリア君は当て馬だ。それを用意することで織斑君の成長する機会を意図的に作るうとした。学ぶ時間も限られているのだから多少急ぎ足だろうとも早急に鍛える必要がある。

明確に言葉にしたわけではないが織斑先生と俺の意見が一致した結果が今の状況だ。俺、鍛える人です。しかし鍛えるからにはセシリア君の精神を鍛えようと思う。彼女の操縦技術は高いから助言程度で十分だしね。

「あの方達は一体なんなんですか？わたくしは（二人きりで）訓練をお願いしたはずですよ。それなのにあの賑やかなギャラリーは……………なんなのですか？」

「……………まあ聞け。ただの訓練になるのは面白くないからな。それに優秀なセシリア君の機動を直接見れば俺の生徒の良い刺激になると思っ
^{サンドバック}
って呼んだのだ」

決して人目がない場所でサンドバックになるのはイヤだったわけではない。人目がないと過剰にボコられそうだとか考えてないっただけだ。

「（優秀……！）そ、そうでしたの……！ええ、そういうことでしたらいいでしょう！わたくし、セシリア・オルコット、葵先生の期待に応えてご覧に入れますわ！」

突如、機嫌を上方修正したセシリア君が自信満々に言ってくれた。彼女のヤル気が上がった理由はわからないが、これで良い映像教材が手に入ることは間違いない。内容も期待して良さそうだ。

あ、でも今のセシリア君は一組のクラス代表になるために努力を怠らないようにしなければならない。確かクラス代表の椅子をかけた試合は明日、いや、明後日だったか。どうやら原作通りに織斑・一夏と試合をするようだ。

「それでは訓練を始める！貴様らもよく見てそれを己の糧になるようにしろ！セシリア・オルコット！　用意は十分か？」

「ええっ、よろしくてよ！（ああ……この力強い気迫、それに意志！堪りませんわ……！）」

「ならばこれより模擬戦を開始する！ルールは基本を重視する。どちらかがエネルギー切れを起こしたら終了だ！　行くぞ……！」

「さあ踊りなさい……！ブルー・ティアーズ……！」

指導開始、訓練開始、撮影開始、教材確保、二組の力量アップ
う……その他諸々も。俺はなんて生徒思いなんだろうか！

……………。

……。

訓練開始から一時間弱。撃っては斬って、斬っては避けて、避けては撃って、と指導を続けましたよ。マジで疲れた。いやあ若い子は疲れ知らずですな。それで当然のことだが訓練を終えたら反省会が必ずある。

今は反省会ももう終わったのでセシリア君を寮へ送っている最中。帰り道は彼女と二人きりだ。二組の皆は反省会終了後、真っ先に帰宅している。何やら編集がどうこうとかPVの販売会がどうこう言っていたが何のことだか…。

「セシリア君は近接戦が不得手のようだ。それに近接武装の展開が遅い。そして突発的な事態にも対応が遅れることがある。これらは今後の課題だ」

「はい…」

シヨボン、とするセシリア君が隣を歩く。そして内心焦る俺…。帰り道で会話がないのも一男子としてどうかと思ったから話しているんだけど口を出るのはこんなことです、はい。

「…落ち込むことはない。その他の技術はバランスよく綺麗にまとまっていた。このまま精進するならばより高く飛び立てるはずだ」

「は、はいっ、わたくし頑張りますわっ」

一転してキラキラと顔を輝かせるセシリア君。柄にもないことを言ったと反省する俺。もうこの子が何をしたいのかわかりません。何を喜んでいるのかね、彼女は。先生は精神的に疲れてゲンナリで

す。

「いいか、セシリア君。常に考え動くようにしろ。思考が止まった瞬間、慢心した瞬間が貴様の敗北だ」

「ええ、葵先生のお言葉、確かにわたくしの心に刻み込みますわ。もう慢心も油断も致しませんわ」

反省してそれでも動くのは俺の口か……。先生のモデルに“ちゃん”を選んだのはもしかして失敗だったのだろうか。どうにも柄にも無いことを言ってしまう。家族や親しい者以外にこんなこと言ったことないのになあ。

それでもまあ女の子を邪険に扱うのも気が引けるしね。これがベストか……。いやベターかな。近々、セシリア君もクラス代表を掛けて織斑君と模擬試合があるみたいだし頑張ってほしいよ、うん。

……。

……。

そしてクラス対抗戦……のクラス代表を決める選抜戦のようなことが一組で起きた当日。試合結果はまあ……。予想通りにセシリア君が勝った。試合中、油断も慢心もしないセシリア君は始終織斑君を圧倒していたよ。

多少状況は違ったがセシリア君の弾道型ビットが発射された。あの名シーンだ。そして織斑君に弾道型ビットが命中した時に彼のI びやくしき “白式” ファースト・シフト が一次移行した。それに驚くセシリアく、ん……？

…んん？驚いて、ない？多少いぶかしむ目で見ているが冷静だった。突撃する織斑君。それを急速後退しながら冷静にスターライトmkで狙撃するセシリア君。

セシリア君の撃つべし、撃つべし撃つべし撃つべし！織斑君も避けるべし、避けるべし避けるべし避けるべし！距離は縮まるがセシリア君の狙撃が命中するほうが圧倒的に多いため敢無く織斑君撃墜……て？

……あれ？織斑君がセシリア君を間一髪まで追い込むあの名シーンはどこに？

ま、まあ状況は似たようなものだから問題はないな。俺のせいじゃない。セシリア君を多少は鍛えたが俺のせいじゃないはずだ。意識改革だけでもこれだけの影響があるものなのかね…。

あ、でも試合終了後には彼女も織斑君のことを“一夏さん”と呼んでいたから…ニヤリ…惚れたな？いいねえ！青春だよ、青春！学生はそうじゃなくちゃね！命短し恋せよ乙女、とはよく言ったものだよね！

ともあれセシリア君をこれで指導する必要も無くなった。自分のクラスを蔑ろにして他のクラス代表を教えていた、なんて笑い話にもならないからな。このことは試合の前日にはセシリア君に伝えてあるしね。

……頑張れ、セシリア君！先生は応援しているぞ！

……。

……。

揉めに揉めた一組のクラス代表が決まってから……あー、そうそう、俺のクラスのクラス代表は問題もなく順調に決まった。初日に俺の副担任としての能力に疑問を持った生徒が居ただろ？その子だ。

……ウチは代表候補生なんて居ないから俺の独断と偏見で決めた。

授業初日に目を掛けるとも考えていたしね。彼女なら平気、いや上手くヤれるさ。成績のほうも問題ない。強いて言うなら能力の数値がやや平均的で面白みがないと言ったところかね。それでも高めの基準でまとまっているけどさ。

うん、まあとにかく、だ。それから数日後のとある日、職員室の早朝会議で二組に転入生が入るという知らせを受けた。生徒の名はファン・リンイン“鳳・鈴音”。中国の代表候補生だ。

どうもこの転入は中国側の強引な要請だったようだ。一度は入学を辞退したのに掌を返したように転入という手順を踏んできた。

宮古先生曰く、この時期に、しかも“転入”というのは珍しい、という話だ。その理由として普通に入学するよりも審査基準や試験項目が厳しいかららしい。

……何気に鳳君の能力は高いようだ。

とりあえず、件の彼女のIS学園到着は早くとも夕刻。どんなに遅くとも今夜には着くと連絡があったとのことだ。

仮にも中国の代表候補生を迎えるから学園側は大変だ。急遽、部

屋割りやら関係各所への通達、その他にも何やらと事務方は大忙しだったらしい。

うん、二組に凰・鈴音が来た。ということは、だ。原作通りならば今の二組クラス代表は必然的に降ろされてしまうわけですな。：

……あれ？それって結構、不憫じゃね？

「ここは副代表的な扱いでいくか…」

「はい？九重先生、何か？」

「いえ何でもありません」

そうですか、と疑問の表情を残した宮古先生をはぐらかして早朝会議が終わり自分達の受け持つクラスへ移動する。一応、二組の間になるわけだから迎えに行くと思いますかね。

……迷子になられても困るしな。

……。

……。

その日の夜。時刻が午後八時に近付いた時。俺は銜えタバコ（ハーブなどの薬草）に缶コーヒ―を片手に校門へ移動している。今朝考えたように個人的に生徒を迎えに行くんだよ。俺って生徒思いだよねえ。

ラミエルさんに広範囲センサーで転入生の凰・鈴音らしい生体反応を感知したら知らせてくれるようにお願いしておいたのよ。空い

ている時間はIS開発部門と整備部門に顔出して一仕事しに行っていたんだ。

……人の発明品（IS）だけど弄ったり開発したりって楽しいよね。

ん？あれか？遠めにだがそれらしい姿を確認した。クシャクシャした紙を上着のポケットから取り出している。あ、なにやら喚くとまたグシャッと紙を上着のポケットに突っ込んだ。

……なかなか豪快な、うん、大雑把な性格のようだな。

なに？薄暗闇なのによく見えるな、だと？俺には暗闇とかは関係ないのよ。街灯もあるし、この程度の暗闇なら魔力で視力を強化すれば昼間のようによく見える。体内には身体能力強化のナノマシンもあるしね。

……とにかくまずは一声掛けるとするか。

「……貴様、転入生の凰・鈴音だな」

「……ッ！そ、そうだけどアンタ誰よ！」

むう？咄嗟に拳を構えるとは……なかなかだな。動作も速い。流石は中国代表候補生。子供だと考えていたら痛い目を見るな。さっきの動作を見る限り体術は優秀と見ていいようだ。伊達に転入試験を突破したわけではないと言ったことかね。

「……そう怯えるな、小娘が。俺は九重・葵。貴様が所属することになるクラスの副担任を兼任する者だ」

「はあ？先生？アンタがあ？アンタ、男じゃない！だいたいその副担任がここで何してるのよ！」

またか？またこの反応なのか。つくづく男の肩身が狭い世界だな…。織斑・一夏以外にISを動かしたらいけないのか！？俺も世界の晒し者になればいいのか！こら！？……マジでイヤだ、それだけはゴメンだ！

だいたいなあ元々俺は人外には好かれ易いんだよ！それが精霊だろうが悪魔だろうが妖精だろうが妖怪だろうが龍種だろうが幻想種だろうが機械だろうが情報生命体だろうがな！ふふんっ 人外なら全てに好かれ易いんだよ！

……だからISにも好かれた。というか懐かれたっぽいんだよ。

あ、彼女の理不尽な言葉にイライラしたから愛の拳で折檻してもいいかな、って考えた自分は悪くないはずだ。キチンと愛はあるし。大丈夫。きっと…。

「喚くな、小娘。教師であることは事実だ。以後、嘗めた口を利くなら厳しく指導するのでそのつもりでいろ。それと俺がここに居る理由だったな？迷子が一匹生まれるようだったので様子を見に来たまでだ」

ギロツと視線に力を込めて睨みつける。…正直、生徒に向ける視線じゃないかもしれない。だけど俺はこれでいいんだ。彼女達を立派な兵士に鍛えるとクラスの皆に（心の中で）誓ったのだからな！

「まっ！ま、まま迷子じゃないわよーっ！ただ、その…散歩…散歩

してただけよ！」

「……………そうか、邪魔したな。余計なお世話だったようだ」

原作では迷子になりかけていたから助けようと思ったがこの世界の彼女はそんなことになってはいないらしい。ただ、散歩と言う彼女がなにやら焦っているようだったが…。うん、散歩に集中しすぎて疲れているのだろう。

……散歩も程々にしないと身体に悪いから気を付けろよ？

はあ。いやー、こういう小さな変化があると全てが原作通りとは限らない、と考えさせられるな。どんな風に世界が動くかわからないね！

……とりあえず寮に帰って緑茶を飲みながら桜餅を食べよう。

「ち、ちよつと待ちなさいよ！アンタ案内してくれるんじゃないの！？」

あゝっ？君が散歩していると言ったんでしょうが。話を聞く限り道は知っているようだね。まったく、俺がここに迎えに来た意味が無駄になったよ。無駄足だったの。

……はあ、それと先生に対して態度が悪いよ？凰・鈴音…。

「うるさい小娘。黙れ小娘。喚くな小娘。今回は見逃すが今後は九重先生と呼べ。理解したな？理解したなら“はい”または“イエス”と答える」

「は、はい。九重先生……。あれ？はいもイエスも肯定じゃない？あれ？」

ギロリツと初見よりも強く睨みつけた。ラミエルさんのリアルタイム立体映像加工技術で俺の目元がギリリと光って見える素敵仕様だ！流石ラミエルさん！芸が細かい！技術の無駄遣いがヒドイね！

「よろしい。それで何用だ、凰・鈴音。俺は帰るのだが」

「あ、えと…その…（クウ！今更本校舎一階総合事務受付はどこですか、なんて聞き難いじゃない！どうしよう…）」

目の前の彼女が言葉の切れも悪くしどろもどろになっている。なに地団太踏んでいるんだよ…。地面に何かの恨みでもあるのか？地面が哀れだ…。

……いや、まさか、こいつ…え？ホントに？

迷っていたのか…？原作通りに迷っていたのか！迷っていたんだな！？この駄迷子チャイナ娘が！最初から素直になればいいものを。なぜに意地を張るのか…。それさえなければ織斑・一夏も君の気持ちに気付く……。ゴメン、無理だろうな。

「……………はあ、本校舎一階にある総合事務受付はこの先を行ったアリーナの近くだ。行って転入手続きを済ませてくるが良い」

「え？あの、え？（イジワルなヤツかと思ったら意外と良いヤツね…）」

「だから、本校舎一階にある総合事務受付はこの先を行ったアリー

ナの近くだ。それとも俺も付いて行こうか？」

困惑する凰・鈴音。それに構わずに俺は用件を簡潔に言い切った。このままここに居ても彼女にとっても俺にとっても時間の無駄だ。ここは俺が折れることで解決を図るとしよう。いつも折れると思ったら大間違いだからな？

「い、いいえっ！大丈夫です…。あ、ありがとうございました…」

「うむ。では行け。早くしないと事務が閉まってしまうぞ」

「えっ！？あ、もうこんな時間っ！？それじゃ失礼します！！」

バビューンと慌てて駆け出す凰・鈴音の背中を見送る。なんと言うかあいつ足速え…。あの小柄な身体にどれだけの元気を詰め込んでいるのだろうか？まるで子供…。

……いや、十五歳は十分に子供だったな。

「くくくっ、慌しい子だなあ…」

『良いではないか、我が主よ。子供は元氣過ぎるくらいが可愛げがあるというものぞ』

「なるほど。言われてみれば確かにな」

とにかくこれからの二組はまた一段と賑やかになるかもしれない。それが不安なような楽しみなような気持ちを懐かせるから教師としては複雑だ。

……。
……。

凰・鈴音が到着したその日の学生食堂をパーティー会場にした場所にて一年一組のクラス代表は今話題の織斑・一夏に決まったことが二年生の“まゆずみ・かおるこ 黛・薫子”の取材で明らかになった。

後日、彼女の記事は学園新聞の一面を飾り総発行部数は過去最高をマークしたらしい。いい売り上げだったようだ。それにしてもやはりと言っかなんと言っかセシリア君は案の定クラス代表の座を織斑君に譲ったんだねえ。

惚れた男のために身を引く、かあ。……意地らしいじゃないかなかなかできることじゃないよね！……あ？となると今後も指導要請があるかもしれないのか。むう……。

……二組の教師が一組の生徒を指導していいものなのだろうか。

いや、仮にも彼女はイギリス代表候補生であり、その中でも優秀な専用機持ちだ。その訓練を見るだけでも二組の糧になるかもしれない。……ふむ、本人から指導要請があればということでもいいか。深く考えるのも色々と面倒だ。

……自分のクラスを贖罪して悪いか、あ、っ？

どうせ他クラスで指導をお願いしてくるのはセシリア君だけだ。彼女も酔狂に過ぎると思うがな。ISで無名の男に教わるよりも一組は担任の織斑先生にお願いしたほうがタメになるだろうに。彼女のようなのをモノ好き、と言っのだったか。

……。

……。

翌日早朝、転入生として一度は職員室に来ることになっているのに鳳・鈴音がまだ来ていない。あのバカ者はどこをほっつき歩いているのか。手続きはともかくクラスへの案内や紹介とかあるのに…。

「鳳さん、遅いですねえ。もう時間はとくに過ぎてますよ」

職員室で宮古先生と共に今日から転入する鳳・鈴音を待っている。俺は宮古先生の言葉にそうですね、と返して来ない理由と今日の早朝会議の内容を頭の中でまとめていた。それと二組のクラス代表が変更になったことが。

変更。昨夜、宮古先生の下に電話があったらしい。二組のクラス代表が本人たつての希望で変更になった、と。俺は宮古先生の口から直接聞いた。何でも譲ることになった人に懇願されたい。せつかくのクラス代表を譲るとは人がいい子だ。

あ、でも…。昨夜、学生寮でISの部分展開の反応を微量に感知したとラミエルさんが言っていたが、まさか…。鳳・鈴音……脅してないだろうな？ちゃんと話し合っただけなんだよな？

……。あ。そういえば原作では転校初日は朝から一組に…

「となると今彼女は一組に、か…」

「はい？……（九重先生どうしたのかしら？）」

だとしたらここに居る俺達は無駄も無駄。意味がないじゃないか。朝のSHRの時間も迫ってきているからこれ以上ここで待つこともできない。それに予想が正しければ凰・鈴音は織斑・一夏の居る一組に向かっているはずだ。

「宮古先生。凰・鈴音は先に行つた可能性があります。だから俺達も行きますよ」

「え？あの、えっ？あ、はい！（ひゃああ！手っ！手えっ！？ぎゅつと握られてます！握られてますよお！？…あ、暖かい）」

宮古先生の手を引いて俺はやや早足で廊下を進む。驚かせてしまったために宮古先生の表情が赤い。すまないとは思うが今は急ぐので許してほしい。

……宮古先生。…なぜに瞳を潤ませて俺をガン見してくるのですか？

……。

二組に近付くと一組の戸口から凰・鈴音の怒鳴り声とバシーンツと織斑先生の出席簿エクスカリパーから発生した破壊音が聞こえてきた。いい音をさせるじゃないか…。今日の織斑先生も絶好調のようだ。

「やはりここに居たのか…」

「わあ、本当ですね…」

あとで織斑先生には二組の生徒が迷惑を掛けたことを謝罪してお

かなければならないな。お詫びの印に桜餅を包むか……。彼女も他の女性同様に甘味菓子が好きのようだからな。あ、山田先生にも渡さなければな。

「それでは九重先生、鳳さんをクラスへ連れて来て下さい。私はS HRをしておきますから」

「任せましょう。では、またあとで」

俺は鳳・鈴音の確保へ。宮古先生は二組へ。それぞれに向かつて行く。まずは初日から迷惑を掛けたバカ者を引き摺ってでもクラスへ連行しなければならぬ……。

……。

鳳・鈴音の背後に音も立てず、気配も絶って近付く。彼女は気付きもしない。そうか。そうかそうか。貴様は反省する気はないのだな？そうかそうか。

……いや、本気で気配絶っているから気付くはずもないんだけどね。

「鳳・鈴音……」

「今度は何よっ！？って、げっ！？！？（こわっ！目がこわいッ！）」

一声掛けたら勢いよく振り返ってきた。俺はその小さな顔を右手でグワシッと掴む。俗に言うアイアンクロード。ただしまだ力は込めていない。ただ掴んでいるだけだ。

「…なあ、貴様はここで何をしている？事務から聞いているはずだ。今朝は最初に職員室に行くように、と」

「そ、それは、その、えと、ごめんなさい……（こわっ！この人、こわいわよっ！雰囲気は千冬さんに似てるわね……）」

む？素直に謝罪されたからには手を離すしかないではないか……。何かに怯えているような雰囲気だがそれは仕方ないかもしれない。こんな時間にクラスの副担任に見付かったのだからな。

……ともかくキチンと謝罪ができることは立派なことだと先生は思うのよ。

だから手を顔から離し彼女を許す。それにしても残念だ。少しでも反抗的な態度を見せる気ならこれでもかと言うほど頭蓋骨を絞つてやったというのに……。本当に残念だ……。

「……………今回だけだ。次はない。では二組へ行く。ついて来るかい」

「はい……。……（いや、でもこっちのほうが遥かにこわいかも……。背中からオーラが出てそうだし）」

これは怯えているのか？…ハッ！何をバカな。強気なこの子が怯える相手は織斑先生くらいのものだろう。俺はそこまでではないはずだ。でも何か失礼なことを考えているような……。いや、でもなあ……。

……………とりあえずここはカマかけてみるか。

「…凰・鈴音。何か良からぬことを考えたか？」

「い、いいえっ、考えてませんよぉ！……（なによ！勘も鋭いじゃないのよ！？心臓が止まるかと思っ たわ…）」

「……………そうか」

凰・鈴音の慌てている声を背中越しに聞く。彼女の声の震え具合から推測するに何か考えていたようだ。まあいい。今はクラスへ連行することが先決だ。コイツも俺の生徒になったのだから面倒はキツチリ見ようではないか！

……精々、立派な兵士に鍛え上げて見せよう！くははははっ！！

余談だがその日の午前の授業中、一組のほうからバシインツという音が複数回、俺の居る二組まで響いてきた。ふふふのふ。出席簿が乱発されていたようだ。…本当に今日の織斑先生は絶対調なのですね。

こわっ！？

第4話「中国代表候補が来ちゃった」(後書き)

男の立場というか葵の知名度が低いような気がする。

まあ一分野では有名なのだろうけど…。

やはりISを使っていることが知られていない。

各国の裏では動いているだろうけどこの作品内では書かないかもしれない。

読者の要請があれば書くけどね！でも、来ないだろうな…orz

注意：この作品の葵君は基本的に口が悪いですww

ではでは！B i s b a l d !

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第5話「二組の訓練場に来ちゃった」(前書き)

なんだか”ネギま!”の息抜きでちょこちょこ書いていたら長々と…。

不思議だな…。塵も積もれば山となるの典型か。
では続き!

第5話「二組の訓練場に来ちゃった」

アイヤー！九重・葵だよ！今日この日より二組に新しいお友達である凰・鈴音を迎えて“新 一年二組”となる。

二組の扉の前で凰・鈴音に呼ぶまで廊下で待つように言ってから俺が教室に入ると二組のクラス全員が起立しザツと踵を鳴らして敬礼してくる。先に中に居た宮古先生は苦笑いだ。そして改めて思う。

……ここはどここの軍学校なのだろうか。

俺も答礼を返して生徒（訓練生）達を席に着かせる。ここで二組に急遽、転入生が来ることを宣言した。一瞬、緊張の走る教室。昨夜のことだから噂で知っている者も居るが大半は寝耳に水の出来事だったようだ。

しかし、そんなザワメキも一瞬だ。生徒達はギラリと目を光らせていた。その目が言っている。そいつは自分達よりも強いのか？自分達との協調を期待できるのか？自分達の仲間足り得るのか？と…。

数秒の沈黙後、生徒を代表して一人が挙手した。発言する許可を得るためだ。

「…発言を許可する。何か？」

「サー！ありがとうございます！サー！質問ですがその転入生は“使える”のでしょうか？」

ふむ、実力がどうのではなく“使えるか？”ときたか。なかなかいい指摘だ。なぜなら郡体として行動する二組では実力があってもスタンドプレーの多い味方など害悪以外の何ものでもないからな。

……そう考えると凰・鈴音は大丈夫なのだろうか。…いや、鍛えれば矯正もするか。

「…俺が言えるのは“そこそこに使える”ということだけだ。詳しいことは自分達で判断しろ」

「サー！イエスサー！」

皆…もうクラスは俺色に染まっていると言っても過言ではないかもしれないよ…。やはり初日から軽く罵ったのは失敗だったかもしれない。今では罵ると恍惚とした表情をするんです。15歳の少女がですよ？

……先生はこの子達の将来に多大なもとい一抹の不安があるのを隠せません！

でもある意味この子達は不屈の心を持った一人前の兵士になれる素質に恵まれているかもしれない。叩いてもめげずに“寧ろそれがご褒美です！”とキラキラと輝く目がそう語っているんだからな…。

……M心つてすげえ。マジぱねえです…。ちょいSな俺には理解できないな！

苦痛を跳ね返す精神力（M的な意味で）、鍛え抜かれた身体能力（今後の予定）、そして群体としての協調性（現時点にて異常なまでの結束力あり）。最低限これら三つを将来的に得られるようにするのが俺の仕事だしねー…。

「転人生、入れ」

扉越しに「はい」という返事とともにスツと扉が横に開いた。そのまま過不足なく俺の居る教壇の横。つまり俺と宮古先生の間に凰・鈴音が居ることになる。電子黒板にすぐさま彼女の名前がディスプレイに表示される。

「中国から来た凰・鈴音よ。あたしは国家代表候補生で専用機も持つてるわ！あ、それと昨日、このクラスのクラス代表になったからそのつもりでよろしく！」

「……」

お前らア……。凰・鈴音を見極めようとするのはいいが視線がギラつき過ぎだよ。それと、一言も話さないでハンドシグナルだけで意思疎通するんじゃないやありません！何が「想像していたよりも意外と小さい」だ！

……ん？小さい？何がだ？何が小さい？身長か？身長だよな？アレはステータスだぞ！

「え、えーと……」

「……凰・鈴音、自己紹介は終わりか？」

「え、はい」

まあこのまま突っ立っているだけでは凰・鈴音が可哀そうだからな。俺から話しを進めることで切欠としよう。序でだから彼女がクラスに馴染めるように俺からも言うておくとするか…。

「そうか、諸君、新しい仲間だ。色々丁寧に歓迎してやれ」

「……サー！イエスサー！」……」

「うわっ！？……（ビックリしたビックリしたビックリしたビックリ……）」

二組の生徒達が起立して最敬礼したことに凰・鈴音は驚きの声を上げていた。無理もないと思うけど……。初対面だった俺でも驚くっての。ウチのクラスは統率力、というか意思統一がハッキリしていて楽だね…。

……どこで育て方を間違えたのだろうか。先生にもわかりません…。

「……よろしい。では凰・鈴音、空いている席に着け。どこでもいいがヤル気があるなら前のほうに座れ」

「わ、わかったわよ」

「………！！（ざわざわ）」……」

「え？なにっ？え！？」

ざわつくクラスを見て凰・鈴音が何事かとキョロキョロしている。このクラスで俺にそんな軽い口調で返すことが二組では驚きなのだろうな。まあそれも仕方ないことだ。彼女はまだ知らないのだから。

「………今はそれでいい。だが我がクラスの鉄のルールだけは厳守しろ。詳しいことはクラスメイトに休み時間にでも聞け」

「へ？鉄の？え？」

初日の彼女には最初にこのクラスにおける“鉄のルール”を徹底的に叩き込むことにした。勿論叩き込んだのは俺ではなく元クラス代表の子が中心となって凰・鈴音に”丁寧”に教え抜いた。

……拳銃やナイフに手が掛かっていたように見えた？そんなのは幻覚です。

一つ、先生（上官）の命令には従え。逆らってもいいが絶対に従え。

二つ、口から言葉^{クソ}をたれる時は頭と後ろに“サー”を付けること。三つ、一人前（の兵士）になるまでは蛆虫以下の存在であることを心に刻み込め。

四つ、思考することをやめてはならない。諦めてはならない。困難を打開せよ。

五つ、自分や他者の身体を労ってやれ。休息は適度に必要だ。

以上の五か条を二組では徹底させている。そんなだからかは知らないがウチのクラスは全員が大変な負けず嫌いになった。もう負けるくらいなら死ぬほうがマシだと豪語しているくらいだ。

……。

……。

次の日。凰・鈴音の表情が少し硬かった。織斑少年と寮で騒いでいたとラミエルさんから報告を受けていたがそのせいかもしれない。例の“酢豚”云々”という約束の件だったのかも。

その日のIS実習の時にイライラしていた凰・鈴音が俺を挑発してきた。恐らく織斑少年と喧嘩した翌日で虫の居所が悪かったのかもね。彼女の気持ちもわからなくはない。

……だが教師に暴言を吐くことは許されない。

そこで俺は考えた。丁度良い機会だから凰・鈴音をお仕置きするついでにクラスの完全掌握をより完璧なものにするための生贄にしよう。

思いつけば即実行。凰・鈴音の挑発に逆に挑発し返して教育的指導を実行した。そして指導終了後。凰・鈴音のIS操縦者としてのプライドを犠牲にして得た成果。それはほぼ成功したと見ていいだろう。

些細な犠牲の下、これで二組はまた一つ団結を強くした。俺としても予想外で不本意のことだが“新 M 心”という名の下に……。本格的に凰・鈴音以外の生徒達の将来に不安が残った日でもあったな……。

……その内、鞭で打つてなどと言われたらどうしよう。

……何？俺が凰・鈴音に何をしたか、って？簡単なことだ。只管にボコスのみだ。ただし精神的に“折る”のではなく“屈服”させる意味で。二度と逆らう気がなくなるように徹底的に叩き伏せた。

第三世代IS“シエンロン甲龍”を纏った凰・鈴音を相手に俺は生身のままで第二世代IS“打鉄”の刀を使って叩き潰した。一応は変則ルールで地上戦に限定して仕合した結果だがな。

最低限、ナノマシンの身体強化と気や魔法で身体強化したのだから最悪でも負けることはない。戦闘エリアを地上戦に限定しているのも大きい。この世界で生身のまま飛んだら変な目で見られるからな。

凰・鈴音の考えではISは最強。男には使えないのだからISを使える女の自分が上位に立つべきという思考があったのだろう。生身の俺がフルボッコにしてやったら彼女の目が変に虚ろだった。

この模擬戦を見ていた二組の生徒達は啞然としていたがどことなく頬を上気させて軽い興奮状態になっていた。潤んだ瞳、上気した頬、熱い吐息。胸の前で組まれた手。二組の大半の生徒達が熱に浮かされているように見えた。

これは……風邪か？それなら早く帰り……ちょっと待て。誰だ？今、ご主人様とか言ったヤツは？まさか家族の誰かが紛れ込んでいるのか？いや、それならこの俺が見逃すはずがない。

……まあいい。深くは突っ込むまい。

生身でISを圧倒する。こればかりは撮影などの許可は出さずにしていた。こんなの今の世界に配信されたら俺が変態扱いを受けかねないからな！

……だが生徒達よ。血走るくらいガン見してくるのはヤメロといいたい。

ハアハアと息を荒くしたこの子達を見てみると激しく身の危機を感じる。主に貞操的な意味で。だって彼女達の手がニギニギと卑猥

な動きをしているのだから…。ええいつ、涎を拭かないか！

俺は織斑君のように決して鈍くないつもりだ。彼女達の奥底に眠るM心を目覚めさせた自覚もある。だけど俺は教師で君達は生徒だろう。せめてもう五年して気持ちが変わらないならまた来なさい。

……いや、断るけどね？将来的に俺は家族のところに帰るしさ。

そもそも寿命的に無理。最低限、長寿種でないと“家族”としては認め難い。俺は小心者の臆病者だからさあ。家族を失うのに耐えられないのよ。だから“最低限”長寿種ね。

……。

……。

こほんっ。うん、数週間後。未だに凰・鈴音の機嫌が悪いようだが俺の前では静かに騒がずに講義を受けている。逆らうとペナルティが増えるから大人しくするつもりのような。限定的にだが理性は働くようになったらしい。

前に教師（教官）の俺に逆らうことの愚かしさを骨の髄まで叩き込んでやった成果が現れているようだ。これでわからないようならISをオシヤカにしてでも徹底的に叩くところだった。

「…では講義を始める。全員、教科書の32ページを開け」

凰・鈴音はまだぎこちないが統一された動きで動く我が一年二組の生徒諸君。休み時間とか休日は普通に女の子しているのに講義中は訓練された兵士のそれだ。

その内に凰・鈴音もこのクラスに染められてしまうのだろうか…。先生はまたも不安が隠せません。宮古先生なんか二組の生徒達を見ても微笑ましそくに「青春ですねー」なんてズレタこと言っていたし…。

切欠を与えたのは俺だがホントにこのクラスは大丈夫なのだろうか？いろいろな意味で。風格だけなら二組は精鋭部隊のそれだしさ。無論、戦闘技術もそこそこにある。

……人間としてだよ？人外としての戦闘能力じゃないよ？

あー…。一月未満の比較的短期間だが彼女達の精神力を俺自ら徹底的に苛め抜いたので忍耐だけはある。今直ぐにでも米屋の海兵隊へ入隊できるほどだ。本当にね、気力だけなら最精鋭を誇っているというのは夢だと思いたい。

……この短期間にクラスで何があつたのかと先生は考えさせられるね！

俺も悪乗りが過ぎたんだな。どこの兵士だと思っほどキビキビ動くんだよ。今ではクラス全員に護身用の9mm拳銃とナイフ、簡易ハッキングツールや無線などを配布し緊急時における安全確保や連絡手段を確保した。

……装備一式は俺が配りましたが何か？

これで女子高生兵士の完成だな！すまん、俺も今回は正直やり過ぎたかもと不安に感じた。アイリ達と違い彼女達はISを使えるというだけの普通の人間なんだからな。

……最後に自動小銃でも装備すればより完璧な兵士に。

いやいや、今は持たせないけどね？ただでさえ学園内で生徒に銃を持たせていることに他の教師陣から反発があるのにこれ以上装備を強化したら教師を解雇されて研究所に押し込められてしまうよ！

……たかが銃くらいでガタガタとうるさい。学園内は治外法権ではなかったのか？

まったく、変なところで日本人的なんだから。数年前、何かの憂さ晴らしにドイツ軍の演習地へ不法侵入した時は問答無用で銃火^{ハイキング}以上に砲火が飛び交ったものだがなあ。あ、今思い出すとアレは俗に言う不法入国だったのか…。

……別に良いけどね！もう一度言うが銃くらいでガタガタとうるさいものだね！

それに別に無秩序に配布したわけではないんだ。これは護身用なんだよ。俺の生徒である間は彼女達の安全性を可能な限り引き上げる努力をする。少なくとも二組の生徒の根幹には俺や宮古先生の命令は絶対遵守するという思想があるしね。

下手な人間よりも秩序と鉄の意志を以って行動することができはずだ。はずだ、と言うのはまあ…実戦経験が圧倒的に不足していることに他ならない。故に“殺し”というものはやってみなければわからない。

……まあ学園内で殺傷行為をする機会など早々ないと思うけどね！

うん、だがしかした。いざという時のために用心だけはしている。生徒達にはまだまだ学生気分で過ごしてもらいたいからな。今の内の厄介事は大人の俺達が片付ければいいさ。専用機のデモンベインがあるからいつでも出撃可能だしね。

……でも、食事中に邪魔しやがったらヌツ殺してやる……！それだけは我慢できん！

まあ殺し云々は置いておくとして、だ。それでも今のところ一年では二組が実力では一番だと思う。個人のじゃないよ？クラス全体の平均だよ？つまり平均的、総合的に見て基本能力が高いと断言できるのよ。

まだ俺の指導期間は短いがそれでもできるギリギリまで厳しく濃密な内容の訓練をしたのだからクラスの能力が高いのも当然の結果だろう。普段の講義だけでなく二組は週に何度か放課後にも特別訓練を俺自ら監督したからな。

人間では最高峰の戦闘集団になりつつあると自負している。今年の夏休み中には人外三歩いや五か六歩手前まで鍛えることができるだろうね。まあそれも訓練を最後までやり遂げれば、という制限はあるけど。

ただねえ……時々どこか育て方を間違えたかな、と考えるいでもないけど。でも彼女達はISを学びに来ているのだし、その関連で戦闘技術を学ぶのは間違いいではないと考えるようにしている。

彼女達がM心に目覚めたのは……わからない。本人の資質の問題だしね。まあ俺のすることは唯一つだけ。彼女達を立派（？）な兵士に鍛え上げることだけだ。ISは勿論。生身でもそれ相応の実力

を身に付けさせよう。

「…本日の講義はこれまでだ。放課後の特別訓練は午後四時半から六時半を予定している。来る者は来るが良い」

毎回全員来るが今日は何人が来るのかねー。一応これは自主参加だしねー。

……。

……。

更に日数が経ち。クラス対抗戦^{リーグマッチ}まで残り二週間。今居る場所は第三アリーナ近くのただっ広いグラウンド。週に数回ある放課後の特別訓練。二組の恒例行事のようなものだ。

お陰で二組の実力は鰻登り。上限知らずに上がっていく。いや、上がると言っても人間の成長率の限界は超えないけどね。精魔奇兵とは比べてはイカンのよ。人間には寿命というものもあるのだからな。

「凰・鈴音。クラス対抗戦が近い。準備はどうか？」

「さ、さー！問題な、ありませんです！さー！」

「……………そうか」

……コイツ今“問題ないわよ”って素で答えようとしたな？

未だに“サー”もぎこちないし。それでも敬礼する姿はやつと様になってきたか。立派な兵士には程遠い。…凰・鈴音が将来何になりたいのか知らないが俺がここに居る限りは鍛え続けよう。

気になるのはことなく彼女の雰囲気がいライライライしていることか。織斑少年の件がまだ続いているようだ。身体のキレは変わっているようには見えないが織斑少年を前にしたらどうなることか…。

「…貴様が何かに苛立っているのは察している」

「え…？」

「だが貴様は二組の代表だ。泥を塗るような試合を試してみる。その時は……」

「そ、その時は？（え？えっ？えっ！？）」

俺の前には敗北の二文字はない！……なんて一人じゃ絶対に言えないな！今のこの世界ではラミエルさんが頼りだよ！この子は間違いない今の世界では物理的にも電子的にも無敵だからな！

……俺？存在としては上位にあるけど心情的に小心者だから…ねえ？

まあ今それはいい。凰・鈴音がクラス対抗戦で二組の顔に泥を塗り、恥を晒すようなら相応のペナルティを科すことになる。一言で表すなら“九重先生のドキドキ 個人レッスン 先生、もうダメです” が待っているといった感じが。

「……………今の貴様が知る必要はない。試合に勝て。それだけでいい」

「さ、さーいえすさー…（なによ、それ！余計に気になるわよ！？あたし何されるのよ！…）」

ここで敢えてペナルティの内容を言わないことでより強く認識す

ることになるよね！これで絶対に勝とうとするはずだ。試合で変な手心などいらぬ。敵が立ち塞がるなら自分の今持つ全力を以って当たればいいんだ。

……。

それでまあ一通りランニングなどの準備運動を済ませて、いつも通りに五人で一班となるように六つの班を作らせた。一班ごとに訓練機である第二世代ISの打鉄かラファール・リヴァイブを一機ずつ提供してある。

…… ISの使用申請って面倒だからハッキングして優先順位を弄っているんだ。

準備運動を終えた今、いつもならここでISに交代しながら搭乗するように指示するところだが今回は事情が違う。それらの前に連絡事項があった。何かを察した生徒達は直立不動の姿勢で沈黙し待つ。その姿は不屈の精神を持った一兵士のようなのだ。

「…… 凰・鈴音。今日の貴様は見学だ。二組の各班を見てやれ」

「質問をよろしいですか？」

「…… 許可する。なんだ？」

「なぜ、あたしだけ見学なんですか？」

まあそこから質問してくるよな！。自分だけ見学で他のクラスメイトはいつも通りの訓練なのだから当然疑問に思うのは無理ないことだ。俺だって何も知らなければ疑問を持つ。

「…… 織斑先生の要請で今日は一組の生徒数名を指導することになった。念のために貴様の實力、専用機の性能などを一時的に秘匿

する。これも試合に勝つための布石だ」

うん、後半の台詞は口から出任せもいいところだ！……まあ半分くらいは本気だけど。

一番の理由として今日は二組の放課後訓練があつたのだが例によつてセシリア君に自主訓練の要請があつた。予定が重なつてしまつたのでそのことを一組担当の織斑先生に相談したら……なんか教える子が増えていた。

しかも織斑先生から変な視線を感じたから何かと思つたら前に門限を過ぎてしまったセシリアを見逃した件について仄めかしてきた。言葉の裏を察するに要は借りを少しは返せ、ということらしい。

何だかんだで織斑先生はブラコ……家族思いだから普段肩身の狭い男として同性の俺を宛がうことでストレスを軽減したいらしい。心配性の織斑先生らしい気配りだと思う。可愛らしいとも思うね。

……ただ朴念仁で鈍感の織斑少年に異性のことでストレスなど感じるのか？

という疑問を内心で思つたけど口に出してはいない。正直、人の色恋など興味はないからな。それに他人の色恋に手を出しても碌な事にならないのは八百年以上の経験から身に沁みてわかっている。

俺の前に立つ凰・鈴音は俺の言つた“勝つための布石”という表向きの理由に眉を寄せている。彼女の表情から不機嫌であることが容易に読み取れる。この子、何だかんだで直情的思考の持ち主だからわかり易いんだよ。

「秘匿？このあたしが一夏に負けるとでも言うの？」

「貴様の感情などはあとにしる。納得する必要はない。だが理解だけはしろ」

「……………わかり、ました」

不機嫌な雰囲気が更に強くなったように感じ取れる。納得もしていない様子だ。まあIS初心者を相手に国家代表候補の自分が、っていうプライドもあるのだろうね。

だが自分の実力を過信するところが彼女にはある。それじゃダメだ。戦闘者としてそんなでは二流止まり。更に悪ければ三流以下だ。慢心は敵だよ。どんな相手だろうと初手から全力で叩き伏せることこそが肝要だ。

ただ、今の彼女の気持ちの大半が織斑少年には負けないという負けん気。…というか個人的感情に左右されているのだろうけどね。彼女なりに負けられない理由もあると俺は予想する。

……………そういえば負けたら酢豚云々の理由を白状させられるのだったか。

「よろしい。では二組の連中の監督は貴様に任せる」

「さーいえすさー…」

「……………よし。行け」

15歳の勝気な少女なのに中身は乙女心を満載しているんだものなあ。本当に意地張ってないでサッサと素直になっつまえば楽だろうにね。まあそれができないから乙女心や女心は複雑だということなのか。

いやー、宮古先生ではないけどこれも青春というものかー、と考
えてしまうね。俺も歳を取ったものだ。歳若くも青臭い子達を微笑
ましく見えるのだから。くくく！

……深くは関わらないけどね！馬に蹴られたくないし！

「ん……？」

胸元で青い結晶がプルプルと震える感触。ラミエルさんがこのグ
ラウンドに近付いて来る反応を察知した。

「……来たか」

第三アリーナの方から三人の人影。今回の一組の生徒達だ。

……。

「よろしくお願いします、先生！」

「……よろしくお願いします」

「……よろしくお願いしますわ」

「ああ……」

俺の目の前に並ぶ一年一組の三人の生徒。内訳は女子が二人に、
男子が一人…。男子は言わずもがな。IS学園で話題の織斑・一夏
だ。女子の一人は当然セシリア君。そしてもう一人、うん、問題は
もう一人のほうかな。

……名前は篠ノ之・箒。サムライガール、辻斬り 箒ちゃんだ。

いや彼女自身に問題は無いのよ。多少頑固ちゃんで性格に難が見
られるがそれとて思春期の乙女精神だと考えればどうと言つこと

もない。…よく癪癪を起こして織斑少年に竹刀で斬りかかるけどね。

「????九重先生、何か？」

「いや、なんでもない」

……やべえ。どことなく刹那ちゃんを思い出すなあ。

少し前にやっとラミエルさんが元の世界から発信されるシグナルを解析してわかったことがあった。驚いたことにこっちでは十数年経っているのに向こうでは一日も経っていないかった。こっちと向こうでは時間の流れの速さが違うそうだ。

それに嬉しい誤算だが僅かな時間だけど通信も可能になった。亜空間通信も次元間通信もその他の通信手段もノイズだらけで酷かったけど。…うん、でも、俺としては久しぶりの家族との会話ができて楽しかったかな。

これで条件さえ整えばいつでも帰還できる　かもしれない？うん、だからラミエルさんが言うには帰還するのに焦る必要はないらしい。それでも早く帰還するに越したことはないよなあ。条件が厳しいからなあ…。どうしたものか。

……でもなあ。麻帆良に帰ると木乃香ちゃんに約束しちゃったしねえ。

可愛い妹分との約束くらいキッチリ守ってやらないと兄貴分としては立つ瀬がないというものだろうさ。何よりも家族が俺達を待っている！そのためには大量の資材と莫大なエネルギーが必要だ。

……まあコツコツと地道に貯えていくしかないか。

こほんっ、考えが逸れたな。問題は彼女よりもその姉にある。まあ苗字からもわかるようにあの束君の愛する妹殿だということだな。

そして篠ノ之君に近付くということは束君の厄介事（遊び）に巻き込まれる可能性がグンと跳ね上がるかも……訂正だ。確実に巻き込まれるのだよ……。まあこれは篠ノ之君自身に罪はないのでそこはどうでもいいが。

とにかく今回の放課後訓練は一組の織斑、セシリア、篠ノ之の三人が加わる。クラス対抗戦が控えているから今日だけだな！それが終わったら……まあ気が向いたら指導するか。他クラスとは言え学園の生徒だし。

「では本日の特別訓練を始める！各班は支給されたISへ搭乗せよ！搭乗時間は一人二十分で交代だ！時間を有効に活用しろ！」

「……サー！イエスサー！」「……」

このまま二組は凰・鈴音に任せておけば一先ず安心だ。まあ俺の監督がなくても通常のノルマをこなしていくから事故がない限りは問題ないはずだ。今までの放課後訓練を見て実際に体験している彼女ならその事をわかっているから変な気負いもない。

「一組の貴様らは別枠だ。俺が直接指導する。まず、初めての者も居るので最初に言っておく。俺の命令に従え。逆らっても良いが命令には絶対に従え。質問がある場合は拳手しろ。その二人、わかったな？」

「は、はいっ、わかりました……（うう、千冬姉と似たような人だ……）」

「……わかりました（随分、高圧的な男だな。一夏とは大違いだ…）」

「織斑君。緊張しているのはわかるが落ち着け。今のところISを
使える男は俺と貴様だけだ。それに何か困れば教師として俺も少し
は助けてやる」

織斑少年は「はい」と幾分緊張の取れた顔をして返事をした。

「よろしい。ただし学園内では自重しろ。貴様は生徒で俺は教師な
のだからな」

軽く釘を差すと織斑少年はもう一度「はい」と今度は苦笑しながら返事をした。

「それでは訓練を始める。専用機を所持していない篠ノ之君には訓練機の打鉄を用意してある。それを使うが良い」

「わかりました」

「セシリア君の相手は俺がするので織斑君と篠ノ之君で軽く模擬戦をしてもらう。異論はないな？」

「はい。それでいいです」

「ああ！それでかまわない！」

「ええっ、それで良くってよっ」

織斑君は無難に返事してきたな。やはり気心の知れた幼馴染が相手になるから気分的には安堵しているのかもしれない。セシリア君

ガンガン攻めないと彼は気付いてくれないぞ？なんてったってキングオブ鈍感だからな！

篠ノ之がキラキラと輝く顔をして嬉しそうなのはわかる。だって相手が好意を駄々漏れの如く寄せている織斑君だからな。恋心というのは他人から見るとわかり易いものだ。はあ、これで気付かない織斑君って…。

あ、だけどセシリア君がわからん。織斑君が相手じゃないのに楽しそうにしている。彼のことを一夏さんと名前で呼んでいたから絶対に突っ掛かってくると思ったのにな。少し予想外の事態ですな。

まあ俺の受け持ちクラスじゃないからサーを付けるとかうるさくは言わないけどな。一応、学ぶ意欲があるのは確かのようなだから大目に見るとしよう。まあ学ぶ動機が織斑君と一緒に居るためという多少不純なのが玉に瑕だな。

「……元気があるのはいいことだ。この時間はミツチリ鍛えてやろう。まずは織斑君と篠ノ之君からだ。では二人とも配置に着け！」

「「はいっ！」「」

こういう時は専用機持ちが断然早いね。打鉄は量子化しないから搭乗するしかないしさ。ISを装着してグラウンドの一角を戦闘フィールドに向かい合う織斑君と篠ノ之君。二人とも近接戦闘オンリーだから楽しみだ。

……なるべくでいいから二組の参考になるデータが取れるように頑張れよ？

あ、セシリア君は俺の隣で待機してなさいね。時々質問するから二人の模擬戦をよく見ているんだぞ？いいな？…うん、言い返事だな。それじゃこっちにおいで。

…いや待て。少し待て。それは色々とマズイ。近い。近いから。腕にやーらかいモノが当たるからもう少し離れ、なんで不満そうなんだよ…。ほら、はじめろ！

「ルールは基本を重視する。だが戦闘フィールドはグラウンド内に限る。理解したな？」

「はいっ！」「」

「用意は良いな？では

」

両者、睨み合って…。いや、俺から見ると篠ノ之君のほうは見詰めているように見えるんだけどね。もう突っ込まないよ…。馬に蹴られたくないものね。

「始めッ！！」

「行くぞ、第！うおおおおおっ！！」

「来い、一夏！はああああああっ！！」

この子達って熱血だな…。意外でもなんでもないね…。あまにも暑苦しく見えたら横からクトウグアとイタクアを乱れ撃ちしてやろう…。俺は熱血系が苦手なんだよ。いや、マスターアアアアアで東方は熱く燃えているう！とか好きだけどね？

……。

それでまあ両者の模擬戦が始まってから十分弱で決着がついた。勝者は篠ノ之君。やはり同じ近接専門の二人だから修練してきた経

験と培ってきた腕の差が明確に出た。機体は織斑君が有利。剣の実力では篠ノ之君の有利。ある意味で丁度良い相手と言える。

初心者にしてはそこそこ見栄えのある模擬戦をしていた、と普通なら思つかもしれない。だが残念なことに今評価するのは俺だ。厳しく言ってしまうえば鈍い、拙いなどと辛口の意見しか口からは出ない。

……たぶんだけど織斑先生だともっと酷評するんじゃないかな。

篠ノ之君の搭乗していた打鉄に比べて機体スペックは織斑君の白式が圧倒している。だが如何せん燃費が悪過ぎるのが玉に瑕と言わざるを得ない。最初は織斑君が押していた。でも後半になるとエネルギー不足で逆転された。

「…篠ノ之君。IS初心者ではあったがその剣筋は素晴らしいものがあつた。ISの操縦も面白みはなかったが堅実で確実だ。そこは評価されるところだろう」

「はあ……？（これは褒められているのだろうか？それとも貶されているのだろうか？むう…）」

地上戦の剣術だから空中の三次元機動戦術にフィードバックするのは慣れが必要だけど経験が少ない中でこの子は良くやっていたと思う。長い間、実家の剣術と部活の剣道を続けていた経験でカバーしているんだろうね。

まあ後半に言ったように彼女の空中機動に面白みがないから見ていてパツとしないのがツマライ。一つ二つ個性というか遊びを入れてもいいと思う。フザケロと言っているわけじゃない。余裕を持

てと言っているんだ。

彼女の三次元空中機動は言ってしまうば普通。織斑君のように突飛な突撃癖があるわけでもなければ、セシリア君のように緻密な理詰めで先の動きを計算しているわけでもない。

確かに面白みはないが基本に忠実で操作は丁寧で確実に実行しようという気持ちを全体の動きから読み取ることができた。今後の彼女に期待だ。彼女自身の伸びしろもまだ十分にあるから現時点での評価が平凡という、ただそれだけのことだ。

「だが、だ」

「っ…。なにか？……（一夏に勝ったが私はどこかでミスをしたのだろうか？）」

「貴様は調子に乗ることがあり、その時は周りが見えなくなる癖があるようだ。剣の使い方は様になっているのだから、あとは常に自分を戒められれば問題はない」

「は、はい、気を付けます…（よく見ている。しかし私はそんなにお調子者だろうか？）」

この子、模擬戦の後半に何度か織斑君を追い詰めたんだ。その度にくぐらないミスをした。獲物を前に舌なめずりをするととは愚かな行為以外の何ものでもない。それをして許されるのは圧倒的な実力差がある場合のみだ。それでも油断は大敵なのに。

その辺りのことを篠ノ之君に良く言い聞かせてから、今度は彼女の隣に並び立つ織斑君のほうを向く。

「そして織斑君、まさかとは思いが…一応聞いておく。…ISの教本などは読破しているな？」

「ええと…あの…教本って電話帳みたいに分厚いやつですか？」

「そうだ。入学前に配られた最初に読破するものだ」

それ以外に何がある？いや、原作通りならば古い電話帳と一緒に捨ててしまったことになるんだろうが…。今は入学式から一月以上が経っている。いい加減、基礎教本は読破しているはずだ。

……織斑先生の話しでは一週間で内容を覚えたはずだし。

あ、基礎教本とは別に専用機持ちの彼はIS取り扱い教本も渡されていたはずだ。ISを使用するのに必要な規則なんか記載されているからこれは必読だったような…。

「…加えて織斑君のような専用機持ちには別のIS教本も渡されているはずだ。読破しているな？」

「ええと……」

「まさか、捨てたりや読んでない…とは言わない、な？」

「あは、あはははは、はあ…」

この瞬間、俺の瞳からハイライトが消えた…。ように周りからは見えなかったかもしれない。それと無意識にデモンベインを展開していたし、いや、実際は俺の精神状態を察してくれたISが気を利かせてくれただけなんだけどね。

そのまま一瞬の間にザツと近付いて織斑君の両肩をガシツと掴んだ。彼もISを展開していなければ肩の骨を粉碎しかねない圧力で

ギリギリと締め上げた。

「ッ ツ !！」

「……貴様、笑って誤魔化そうとは良い度胸だ。俺を相手にその態度とは……！」

フルスキン
全身装甲のデモンベインだが視線は力強くギロリと動きブォンと怪しく光っていた。俺から発する危険な雰囲気も彼らは直接肌で感じているはずだ。だってラミエルさんの演出で黒いオ・ラが漏れ出て視覚化しているからな！

……相変わらずの技術の無駄使い！スゴイけどヒドイね！そんなところが大好きだ！

「ひいひい！？……（怖い！？本気で怒っている時の千冬姉みたいだ……！）」

「ッッ！……（謝れ、一夏！今謝ればまだ間に合うはずだ！）」

怯えるな。恐れるな。逃げるな。何を二人でコソコソと話しているのかね？ハイパーセンサーで丸聞こえだ。それと篠ノ之君には何も知らないから安心していなさい。まあ今後も俺の訓練を受けるならばフルボッコすることがあるかもしれないが。

……ああ、そうだった。次はセシリア君の番だった。だが……。

「セシリア君……」

「は？はいっ！？（なんですか？なんですかのう？なんですかのっ！？）」

「

……（なぜに慌てているし……）すまないが予定変更だ。理由は察してくれるな？」

「え？ええっ！わかっておりましてよ！おほほほ…。存分になさってくださいな！」

背後のセシリア君に雰囲気だけで振り向く。この時も俺の両手は織斑君の肩を決して放すことはない。今もギリギリと音が立ちそうなほど締め上げています。ここからは織斑先生に倣ってスパルタ方式で行こうと思う。

……決して美少女に囲まれていることが羨ましいわけじゃないからね？

俺の気迫がセシリア君にも伝わったようで快く意見を聞き入れてくれた。彼女は物事を機敏に察してくれるから助かる。これも長年貴族として過ごしていたことで身に付けた技術なのかもね。

「ありがとう、セシリア君。そんな君が大好きだ」

「そんな…大好きなどと…うふふ」

だからそんなセシリア君が大好きだ。変な意味じゃないよ？良き生徒という意味で俺は好感を持っているだけだからね？誤解するなよ？それに俺はロリコンじゃないお姉さん好きなんだよ。

あ、あれ？セシリア君？あの、ちよつと？なんで身悶えているのですかね？顔も赤いよ？え？風邪？ああ、そうなの。辛かったら今日は早めにあがるといいよ。あ、それは大丈夫なの？じゃ篠ノ之君の相手をお願いね？

……俺は織斑（鈍感）君の相手をしなければならぬからさ！

「…さあ喜べ、織斑君ッ！今日は俺自ら鍛えてやろう！…骨の髄ま

で恐怖もとい…絶望違っ…とにかく鍛え抜いてやる!!」

「ッ!? (何がというわけじゃないけど、とにかくコワイ!?) はい…!」

「声が小さい!! さては貴様は玉無しの野郎か!? もつと腹の底から声を出せ!! それとも潰されたいのか?」

「はいいい!! がんばりますっ!!」

いい返事だ! 織斑君は一組の生徒だから俺も無理はできない。それでも俺が彼らを兵士じゃないIS操縦者にしなくとも織斑先生が立派なIS操縦者にとことだろっから不安はない。

だから俺にできることは今彼に耐えられる極限まで肉体的、精神的に追い込んで双方から鍛え抜くことだけだ。故に少々口汚くとも挑発する必要があるさ。彼は何だかんで熱血漢の負けず嫌いだかな。

「さあ! 今より訓練を始める!! キチンと避けるよ?」
「は?」

右手にクトウグア、左手にイタクアを展開させる。その銃口をゆつくりと織斑君に見せ付けるようにして照準した。ISのロックオン機能が白式に照準したことをデモンベインが示し、白式はロックオンされたことを彼に報せる。

「…クトウグア!! イタクア!! さあ! 踊れ! 踊れ!! 踊れ!!! あははははっ!!!」

「ぎゃーっ!? !?!?!?」

ドンドンドンッ。クトウグアが一直線に貫かんと突き進み。キン
ッキンッキンッ。イタクアが的外れな方向へ進むも自動で方向転換
し織斑君の背後に回る。

全方位を囲まれた彼に逃れる道はない。銃弾を斬り落とすか十分
な防御力を以って耐えるか。それとも被弾覚悟である程度のダメー
ジは仕方ないとして包囲網を突破するのか。たぶん三つ目の可能性
が高いか…。

……。

……。

今日はそんな風にして終わった。皆を見ていてくれた凰・鈴音は
不満そうにこちらを見ていたのが気になったと言えば気になったか
な。まあその不満そうな視線は甘んじて受けよう。本番で勝てば俺
は文句ないさ。

……次はクラス対抗戦か。

第5話「二組の訓練場に来ちゃった」(後書き)

後半、鈴ちゃんの出番がなかったorz

主人公組に出番を取られたぜよww

作者的には早くシャルロットとラウラをだしたいね！だって好きだもの！

アニメのほうも何だかんだでこの二人は贖罪されていたように思えるしね！

やはり可愛い世界の真理に通じているのだろうか…。

次回はクラス対抗戦を書けたら満足かな！

ではでは！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第6話「会場に來ちやつた」(前書き)

IS書いてますよー。ええ、まだ続いています。

息抜きで書き始めたはずなのにのめり込んでいる自分が居る…。

”ネギま!” も書いているけどね!

では続き!

皆さんの感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告なども歓迎。

第6話「会場に來ちゃった」

現在は五月。生徒達も四月の入学したての雰囲気は少しは落ち着いてきた。そんな時期だ。入学式から早いもので一ヶ月が経った。いや実質的に寿命のない俺からすれば本当に瞬く間だけだね。

それでまあ来週にはクラス対抗戦リーグマッチが始まる。そのためセシリア君をはじめとした一組の放課後訓練はクラス対抗戦までお断りして凰・鈴音と二組生徒に集中している。

……なに？教師が教え子の願いを断っていいのか、だと？

本当はダメかもしれないけど、今だけはいいのだよ。だって、クラス対抗戦なんだから！自分の担当クラスを覇占して何が悪いか！できうる限りウチのクラス代表である凰・鈴音を鍛えぬくさ！

ただ、気になることがある。連日放課後になると凰君は何やら絶望が目の前に広がったかのように瞳からハイライトが消えて虚ろになっていたが……なんで？やはり疲れているのかね。

まあここところ放課後では一に訓練二に訓練三四がなくて五に訓練と言っていいほど訓練漬けだったからな。少々の疲れが溜まっているのも仕方ないか。無茶ではあったが無理のないスケジュールを組んだのに…。

でも、そのお陰で二組の個人技能は天井知らずの鰻登りだ。同時にM心の発展も加速したかね…。今までは罵倒されることで軽い快感程度だったのだが、やや深い快感を得てしまっているらしい。

……訓練時の彼女達の目はヤバかった。雌の目をしていた…。

あ、でもでも鳳・鈴音はその兆候は皆無だった。勝気な性格の彼女にM心はない……と断言したい。いや、少し反応が見られる時があるから判断は保留です。彼女って中身が純情乙女だからさ。

でも筆記も実技も一年の学年では今のところ二組の殆どが成績上位者で占められているんだ。彼女達、外面は優等生なのに内側は変態ですよ？M的な意味で。まあ罵倒されるにしても誰でもいいわけじゃないみたいだけどね。

……誰に罵倒されてもM的な部分が反応するとしたらイヤ過ぎる。

無節操な変態は俺の手に余るよ。無差別に罵倒されて反応する変態はただのいや、ダメな変態だがご主人様を自分で選んだ変態はよマスターく訓練された精鋭の変態（兵）だ。

……今イヤな基準を考えてしまった気がする。

なんだよ、訓練された変態って…。ウチのクラスは本当に大丈夫なのだろうか？こうなる切欠を与えはしたがここまで彼女達が順応してくることは意外だった。どこかで必ず反発してくると考えていたのに…。

とりあえず今日からの訓練は優しくしよう。訓練内容は変わらない

いけど…。これ以上M化が進んだら依存になってしまいそうだ。いや、冗談だけどね？…冗談だよ。そこまでじゃないはずだ。

……。

……。

それで今は二組恒例となりつつある放課後訓練が終了して反省会だ。まあ今回は反省会と言っても学生寮まで送っている間に駄弁るだけだけどね。クラス対抗戦も近いから少しリラックスしてもらったためにこんな形を取っている。

……多感な年頃の女の子達だからメンタル面も気を遣わないとならんのよ。

だって今の俺は何をどう間違ったのか先生をしているわけだからさ。十五歳の少女達を教え導くことなんかをしなければならないのよ。まあ彼女達の殆どがIS関連の進路を希望しているから他の学校よりも楽だけどね。

それでまあ帰り道。二組の皆をそろそろと背後にしながらクラス代表の凰・鈴音と話している。

「凰・鈴音。クラス対抗戦は来週だ」

「そうね。まっ！あたしがブッチギリで優勝に決まりよね！」

むう、この子の自信は一体どこから出てくるのだろうか。確かに生半可な訓練は課していないけどそれが原因で慢心して相手を過小評価するようでは目も当てられない。逆に過大評価するようでも危険なんだけどね。

何事も適当が一番だ。適当と言ってもいい加減にという意味じゃない。“適度に事に当たれ”という意味だ。

それなのに凰・鈴音は慢心とは言わないが少し気持ちが増長しているようだ。一応、痛い目を見る前に釘を刺しておくかね。

「貴様のその浅慮が勝率を激減させる。戦いとは心は熱く頭は冷静に得物には殺意を以って試合に当たることを心掛ける」

「う……。わかりました」

こういう時だけは素直なんだなあ……。こういうのを織斑君の前でも出せば少しは関係が進展するかもしれないのにね。……いや、無理だな。あの鈍感君では直接言わない限りわかりもしない。

「わかればいい。それと明日からは放課後の訓練はない。ゆっくり身体を休めて当日に備えろ」

「ホントに！？あ、さーいえすさー！わかりました！（やたー！これで地獄のような訓練から解放されるわ！）」

「……………貴様は寮に着いたら今日はもう休め」

はあ……。この子、なんか知らないけど嬉しそうだな……。訓練がないことがそんなに嬉しいのか？別に毎日行なっているわけでもなければ参加を強制したわけでもないのに。

明日からクラス対抗戦まで放課後訓練がないとわかった途端に凰・鈴音は大喜びだ。表面上は取り繕っているが声が喜びを隠せていな

い。

反対に他の生徒達の反応は様々だ。少し残念そうにする子。泣きそうな子。この世の絶望を現したように落ち込む子。空いた時間を何に使おうかと計画する子。どこかへ突撃お宅訪問しようとする子。

あれ？何人がオカシナことを計画していたように感じたのは俺の気のせいかな？なぜだかそこはかとなく身の危険を感じたような。…まあ、いいか。気にしないでおこつ。気にしたらフラグが立ちそうだし！

「…俺も明日から忙しくなる。寮に帰ったら諸君も今日は休め」
「……サー！イエスサー！」「……」

……俺も忙しくなるからこれまでのように放課後に時間は取れないしね。

クラス対抗戦の会場となる第三アリーナは明日から一時的に閉鎖される。会場を試合用に調整する必要があるからだ。これには教師陣や整備部がその準備に当たる。掛け持ちしている俺なんか他の人の二倍三倍は忙しくなるんだよ…。

……マジで笑えない。忙しくて笑えない。

ラミエルさんが居なかったら今頃俺は連日徹夜状態で皆の訓練なんて見ていられないよ。過労死するほどではないけど睡眠不足で何かがプチッとしてしまいそうだ。イラッ として上空にラミエルさんの荷電粒子砲をフルチャージでブツ放すとか…。

……ラミエルさん！マジで感謝！君が居てくれて嬉しいよ！

それに生徒達が楽しみにしているイベントだからさ、手は抜けないわけよ。なんと言ったって優勝クラスには“学食デザートの半年間フリーパス券”が進呈されるからね。女の子は甘いものに目がないから必死ですよ。

それは俺のクラスも例外ではない。二組の皆は口々に凰・鈴音に「勝って！とにかく勝って！」や「半年間デザート食べ放題は大きいの！だから勝て！」、「勝って！九重先生からご褒美が貰えるの！」などなど…。

人間、欲望には忠実なものだ…ん？三つ目のはなんだ？俺はクラスにそんなことを言ったことはないし覚えもない。ラミエルさんの記録にもない。勿論、デモンベインのログにもそんなものはない。

だいたい俺があげられるご褒美ってなんだよ。手料理か？和洋中どれでも一通りできるがお菓子だったら洋菓子くらいだが…。あ、それとも生徒個人の母国で行なわれているIS開発か？…それを手伝え、と？打算過ぎてイヤ過ぎる。

……いや、まさか…SM的なお願いではあるまいな？

それだけは勘弁してもらえないだろうか…。俺も今は先生なんて職業をしているからそういう対外的に危険な趣味っぽいものはできる限り遠ざけてしまいたいんだけど。…いざとなれば幻惑系の魔法を掛けて甘い夢でも見てもらうか。

流石に生徒に手を出す教師のレッテルは……ねえ？そんなことになるくらいなら魔法だろうが記憶操作だろうができることは何でもして回避しなければならぬ。うん、危険だ。主に俺の精神的に。

……その点、織斑君が羨ましいねえ。同年代だし。

幼馴染の篠ノ之君にデレたライバルのセシリア君。それに今はセカンド幼馴染の凰・鈴音も織斑ハーレムに加わった。これから来るシャルロット君やラウラ君も即効で落とされることは間違いない…。

……和洋中、選び放題ではないか！羨まげふんげふんっ、けしからんことですな！

そんなあり得ないような不毛なことを考え、二組の生徒達の将来に不安を感じていたら一年の学生寮が見えてきた。門限にはまだ早いので今回は玄関に織斑先生は居ない。

「…着いたか。何度も言うが休むように。ではまたな」

「九重先生ー、また明日ねー！」

「おやすみなさーい！先生！」

「……夜這いに行ってもいいですか？」

「「「それはダメでしょ！？」」「」「」」

「……………休め。俺が言えるのはそれだけだ」

いいな？来るなよ？来るんじゃないぞ？いや、これはフリじゃない。決してフリじゃないからな？マジで来るんじゃないぞ…。

本当にどうしよう…。一教師として本格的に彼女達の将来を心配したほうがいいのだろうか？まだ入学から一月ほどしか経ってないけど個人別進路指導などしたほうがいいのか？

朝、起きたら隣に知らない女生徒が…とか！そんなことになったら俺は………逃げる。うん！逃げるね！多少世界を荒らしたとしても資材を掻き集めて次元エンジンを造って家族の居る世界へ即帰還するね！

……あー、も…教師って難しいな！

ラミエルさんに監視を強化するようにお願いしておこうかな…。でもでも今も某生徒会長っぽいのが回りにチラホラ…、某ウサミミきよぬーメイドっぽいのからのハッキング…などなど。

クラス対抗戦が終わるまで後回しにするか…。いやもう深く考えるのはやめにしよう。永遠に裏でコソコソとしていてくれ。俺は関係ないし。うん、関係ない。

今の俺には他に考えることがあるしね！差し当たっては第三アリーナの調整とか！明日からがんばろっと！………また徹夜かもしれない。

……。

……。

はい！試合当日です！いや、クラス対抗戦ですよ！学園生徒達も学年を問わずに会場の第三アリーナに押し寄せております！当日の入場券を手に入れない生徒は野外モニターを立ち見して盛況だね！

あ、そうそう！前日に当日券を売りつけようとした生徒が居たよ。うだが織斑先生の手によって厳重注意をしたので未遂で終わって

る！計画性が甘いから見つかるようなへマをするんだよ！バカだね！

……でもそんなバカが俺は大好きだーッ！

いやいや、連日の徹夜でテンションがおかしいことはわかってい
る。まあ仕事の半分はラミエルさんをお願いしてやってもらったん
だけだね。最初から彼女に任せておけばよかったよ。情報関係なら
俺よりも早く処理してくれたし。

それで試合の前日、つまり昨日なんだけどさ。その時に俺は気が
付いたんだ。試合当日って正体不明機アンノウンの襲撃を受けたんじゃないかっ
たつけ、とね。あれだよ。無人ISがどうかいうヤツだ。

それが事実ならば今日まで獅子奮迅の勢いで用意してきたことが
全て無駄になることに……。この教師は大変なんだよ。うん。特殊
な国際学校だから各国の意見調整とかが面倒で面倒で……。あ、事務局
の人達もお疲れ様です。

……皆で準備してきたのに無駄になるとか……。ないよねー！

マジでそれは勘弁だー……。俺達学園関係者の努力を無駄にされる
のはイラッとする。本当に來たら問答無用で叩き潰してやる！スク
ラップだ、スクラップ！

あー、いや。襲撃されたら今年の対抗戦は中止になるんだけどね。
続けるにしても危険がどうこうってことでさ。

……今年のフリーパス券はなしだな。二組の皆ご愁傷様です。

時間があれば俺の手作り菓子を振舞ってやるからそのあたりは勘

弁しろよ。まあそうそう数が作れないから月に数度あればいいほうだけだな。

一応、緊急時のために二組の生徒達をアリーナ全体の客席に分散配置している。思い出したからには何らかの手を打って最低でも生徒の安全な脱出手段だけでも確保しておきたいのよ。

二組の生徒ならいざという時には常時装備させている簡易ハッキングツールや護身用の装備を持っているのでそれを以ってして他生徒達の脱出、誘導をしてもらうつもりだ。

まあそれでもダメとなったらラミエルさんに逆ハックを仕掛けてもらって事態の收拾を図るというのも一つの手ではある。ISはハックするよりも物理的に破壊したほうが早いので難しいが施設の制御権を奪還するのは容易のはずだ。

あ、それと分散させた二組皆の座席だが教師権限や開発部、整備部の権限をフルに使って無理矢理捻じ込んだ。学園の安全には変えられないからね。主に俺の安全的な意味合いで…。

それに一年二組は生徒会下部組織の執行部（某生徒会長と愉快なお友達）とは別で活動している。最低限だけど学園（学園での俺の活動範囲）を“密か”に守っていたりする。

……密かに、だよ！公式じゃないよ！アングラだよ！

地下活動って憧れるよね！なんというか、こう……秘密で背徳的な何かを連想させない？俺はするよ。

活動拠点は俺の居る寮の地下を掘削して設置した。核を落とされ

ても安心の安全設計だ。拠点の隠蔽は勿論だが、幾つかの脱出路や無数の迎撃システムも万全だ。拠点管理用のメインコンピュータはオモイ　ネを参考になっている。

……秘密基地ですが何か？ええ、俺の趣味ですが何か？フッフ！

あ、でも凰・鈴音は除外。あの子はお喋りというわけじゃないが織斑君には切欠があれば話してしまえそうだし。そこから学園側にバレたら面倒だ。研究所送りは望むところだが望まない研究は苦痛ではないしね！

フ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ツ
!!
!!
!!

○

失礼。寝不足でテンションがおかしかったんだ。本当にゴメン。内心で少しだけハツチャけていたらクラス対抗戦が始まる直前だった。今は発進前のBピットにて凰君と二人で最後のブリーフィングという名の激励会モドキをしている。

……いつの間にかこんな状況になっていたのだろう。

「……凰君。君が何かを気にしていることは察している。それはいい。だが試合は勝て」

「さーいえすさー。∴（もちろん勝つわよ。あたしが一夏に負けるわけないじゃない!）」

凰君のヤル気の無い返事。それなのに彼女の心の内が透けて見え
てしまいそうだ。なんとなくだが私は負けないことを考えてい
そうな気がする……。が、それでも表面上はそんなことはおくびにも

出していない。

……ここ数週間で猫被りスキルに磨きが掛かってないかね。

いや、ここでそういうことは置いておくとしてここは今一度彼女の気を引き締める必要があるか。

「……貴様、また負けるわけないとタ力を括っているな？」
「ぎくつ！？」

お前なア……。ぎくつて何？ぎくつて。口で言っているからね？今までの猫被りが全て台無しだからね？この中華娘は本当に可愛いヤツだな。わかり易い子は先生、嫌いじゃないぞ。

こういう子が所謂、愛されるバカと言うのだろうね。こういう子には幸せになって欲しい。先生は常々そう思いますな。

だけどさ。それとこれとは別なわけですよ。だからこそ引き締めるだけではなくここで釘を刺す必要がある。二組に敗北の二文字はありえないのだよ。フフフのフ。

「……いいな？確実に勝て。勝たなければ貴様に
「なっ！明日はない！？あたし何されるのよ！？」
明日はない」

……随分と慌てるじゃないか。お前は一体何を想像したのかね。

まあ明日はないと言ったのは冗談だ。教師である俺が生徒に対して非道なことをするはずがないじゃないか。…授業や訓練は別だ。締めるところは締めないと身につかないからしさ。

「では行け。早く行け。サッサと行け」

「えっ！無視！？無視なの！？ホントにあたし何されるのよ！？」

……えー、気にするのはそこかよ？冗談だろうよ。

あ、何気に俺の台詞を本気で受け止めていたりするのだろうか？
確かにそれなりに雰囲気出して言っただけだが、まさか……ねえ？
い、一応フォローはしておいたほうがいいのか。

「喧しい小娘だ……。ああ、最後に」

「な、なななにょ！？」

「貴様なら勝てる。気負わずに行くがいい」

「……はい！（なによ、なによ！散々貶しておいて最後に持ち上げるなんてズルイじゃない！）」

うん、俺ができるフォローはこれくらいか。ありきたりだけどね！
実際、現時点での能力対比は織斑君よりも勝っている。ただし彼は本番では異常なほどの能力を発揮する。それだけが心配だ。

……これが主人公補正というものなのか！？

あー、馬鹿なこと考えてるな、俺……。補正なんかあるわけないじゃん。ヒトは大半が努力と少し才能、そしてほんの僅かな運が結果を決めるんだ。それらがなくて良い結果が残せたためしもない。

IS甲龍を展開した凰・鈴音がピットから飛び出していく後姿を見ながら考えるのはそんなくないことだった。

第6話「会場に来ちゃった」(後書き)

ちくしょーorz

クラス対抗戦本番まで書ききれなかったぜい…。

でもまあ鈴の発進前のやり取りが掛けたから良し！

いやいや、次回……あー、その次か、その次かな？

うむ！その時こそが作者にとっての本番ですな！。

なんとか盛り上がるものが書けるように努力しますですよ！。

ではでは！

第7話「黒くて大きいのが来ちゃった」(前書き)

意外と長引いてしまった。

息抜きのはずなのに…。

では続き！

第7話「黒くて大きいのが来ちゃった」

……なにか来たよ…。

正体不明のISが突如としてアリーナ外周に展開されていた遮断シールドを高出力のビーム砲で打ち破り強引に侵入してきた。

その時に使用されたビーム砲の出力は凄まじいものがあつた。俺も燃える何かを感じたね。大鑑巨砲主義万歳の人が見たならば絶賛すること請け合いだ。

あー、そうだ。正体不明のISだが黒くて大きい、腕部や胴体部分のバランスがおかしいという不恰好な姿形をしていた。

……あー、これでクラス対抗戦は中止だな…、

表面上は冷静な無表情を貫いていたが内心では途方も無いほどの脱力感に俺は見舞われていた。そしてこの時までのことを思い出してもいた。なぜ事前に敵を強制的に排除する強攻策を取らなかったのか、と。

………。

少し戻ってこちらはクラス対抗戦。第一回戦は“織斑・一夏”対

“鳳・鈴音”だった。両選手は対戦前にごちゃごちゃと訳のわからないことを喚いていたが試合開始のベルがなると途端に空気が変わった。

一直線に突撃する両者。

激しくぶつかり合うが先手を決めたのは鳳君だった。鳳君の双龍刀（俺はこれを青竜刀と呼ぶには抵抗がある）から繰り出される斬撃の嵐が白式を追い詰めるかに思えたが織斑君は辛うじて回避することができた。

そこから暫くは鳳君も織斑君、どちらも付かず離れずのインファイトが空中で行なわれた。捻り込むようにして相手よりも有利な位置を取るうと高速機動を繰り返した。決め手が無い。ただそれは互いに機を窺っているのもあったためだ。

試合開始数分後、鳳君は埒を明けようと多少強引に捻り込みを掛けて織斑君よりも上を取った。次に甲龍の非固定浮遊部位がカシュッとスライド音をさせる。

次の瞬間、ドンッという衝撃に白式は殴り飛ばされた。

この時に起きた現象の正体は甲龍に搭載された第三世代兵器“衝撃砲”、通称“龍砲”だった。これは空間自体に圧力を掛けて砲身を生成し余剰で生じる反発力を利用した砲弾を射出する兵器。特徴として砲身も砲弾も“見えない”ことが挙げられる。

シールドエネルギーは減っている。だが何もされていないはずの織斑君は突然殴り飛ばされたことに何がなんだかわからないようだった。

ここで困惑する織斑君に気を良くした凰君が何を思ったのか丁寧
にその時に使用した龍砲の説明を聞いた。勿論、詳しい説明は
機密違反になるのでそこまではないが見えない砲身云々の正体を
明らかにしやがった。

……敵に自機の性能、能力を曝け出すとか……先生は無いと思う
んだ。

今、凰君は何をしているのかな？試合だろ。それなのになぜに龍
砲の最大の特徴をバラす必要がどこにあるのかな？それと敵に情報
を渡す時はダミーも混ぜるようにと口をすっぱくして言い聞かせた
のに……

フフ、フフッ！これはもうクラス対抗戦が閉幕して凰君が戻っ
てきたら後日にでも特別訓練を実施する必要があるかもしれない。
くくくっ！

それから試合は順調だった。織斑君も凰君もいい感じに身体が
温まってきた。お互いにさあ行くぞと加速し始めた試合中盤
にそれは起きた。そうアリーナ内に突然、侵入者が乱入してきたん
だ。

……。

そして現在。今は甲龍と白式が正体不明ISと対峙している。両
者ともにまだ動きを見せていない。動いた瞬間に戦端が切って落と
されることは容易に想像できる。

……あー、もー。懸念していたことが実際に起こるとマジで鬱だ

な。

やはり学園に接近した時点でラミエルさんの荷電粒子砲で跡形も無く消し飛ばしてしまえばよかったのだろうか？そうすればクラス対抗戦も中止にならずにすんでフリーパス券も手に入ったかもしれないのに。

いや、でもそんなことをすれば厄介事が俺のところにとめてくるのが容易に予想できるよなー……。ここは本当に襲撃されるまで静観するのが吉だったのかな？でも、こうして実際に襲撃されると腹が立つ。難しいものだ。

などと心の中で一人反省していると織斑先生達が詰めているＡピットから通信が入った。

『…九重先生、あれをどう考えますか？』

『…黒くて…すごく大きいです』

『は？』

『…あ、いえ、何でもありません』

しまった。通信に出た途端に正体不明のＩＳを見てどう思うかと聞かれたから“お約束”をしてしまったじゃないか。幸いにも向こうは理解していないのが救いだ。

うん、今思うと少し恥ずかしかったな……。人目が無ければ羞恥心から床を転げまわっていたかもしれない。皆の前でそんなことは絶対にしないけどね！とりあえず今できることを考えよう。

……織斑先生のほうも忙しそうだなー……。

通信画面の向こうから聞こえてくる慌しい音が現状の危険さを訴える一つのファクターになっている。まあそれは俺の居るBピットも変わらないと言えば変わらないか。

現状のBピットでは我が二組の精鋭達四名がアリーナの各地に散っている二組の生徒達二十六名から送られてくる情報を解析し整理し分析することで状況の把握に勤めている。それらの情報は俺や宮古先生の端末に常時拳げられ更新されていく。

本来ならばここに詰めるオペレーター関連は二年や三年が務めるのだがそれはクラスの意志と俺の意見によって断った。だってこれもオペレーティングの訓練になりそうじゃん！正しい理解力も補えそうだしさ！

それでまあそんな拳がつてきた情報に目を通していたわけなんだが……なによ、これは？アリーナの管理システムだけではなく一部だけで学園の管理システムも侵入されているじゃないか…。

いや、知ってたけどさ。まさかここまで学園システムの防壁が紙だったとは驚きだ。

もう麻帆良の時みたいに学園システムを乗っ取ってしまおうか。

………あー、いや。それはダメだ。うん、ダメだ。ここにはアンが居ないのだった。彼女が居ないと維持管理が困難に過ぎる。

『…アレに何か心当たりはありますか？』

「俺は知らないな。だがアレはISなのは間違いなさそうに見える」

『そうか…』

「だが…」

……そう。一応、ここで当たり障り無いことを言うならば。

「……だが、なんでしょう？」

「俺が言えるのはあのISが異質である、ということだけだ」

「……異質？それは……」

「ただの勘だ。実物を確かめてみなければわからない」

「……………」

そんなに深く考えないほうがいいよ、織斑先生。ほら眉間に深い皺ができているじゃないか。弟さんが心配なのは察するけどもう少し落ち着こうよ。俺のほうで生徒達の安全は確保するようにも動いているからさ。

「ともかく今は生徒達の安全を確保しましょう」

「……そうだな。山田君、状況は？」

「はい、現状は」

現状は厳しいと言っていい。乗っ取られたシステムは情報関連に強い学園生徒が事態の打開に当たっている。ISを装着した教師部隊はシステムが解放された瞬間に織斑君達の居るアリーナ内に突入する手はずになっていた。

ふむふむ。山田先生の解析した情報はこちらとほぼ同じだった。

違うところは俺達と違ってリアルタイムで生徒から情報を仕入れていないということかね。

「生徒達はウチの者に安全を確保させよう」

「……………できるのか？」

「俺は出来ることしか言わない。そこは任せてくれていい」

全面的に任せてくれるなら全システムの奪還と正体不明ISの処理の二つも確実に対処してみせよう。というよりあとからチャチャ入れられてもウザイから黙って任せて欲しい。

……あ、でも、事後処理の書類は押し付、げふんげふん！うん、任せる！

『……では任せる』

「ああ……」

……その間が俺は気になるかなー。

心の中で色々葛藤があったのかもしれないけどさ。もう少し早く返答してくれてもいいんじゃないかね。なんだか信用されていないようで俺は悲しいよ。

いやまあ俺は東君の紹介で学園に来たから変な不安が拭えないのは仕方ないんだけどな。織斑先生もそのところで悩んだのかもしれないし。それに大事な大事な弟君の安全も考えなければいけないんだから彼女も大変だ。

『……………』

……おうふつ。まだ通信が切れてない……だと？

未だに通信画面に映し出される織斑先生の表情は変化が少なく判断が難しい。冷静になることを心掛けているのだろうね。うん、それは仕方ない。だけどその分は言葉の意思疎通に力を入れて欲しいと願いたいな……。

「……何か、織斑先生、何か？」
『……………いえ。では』
「は、はあ……」

そこまで引つ張ってなんでもないのである。どれだけ弟君が心配なんだ。もう少し信じてやれば……あー、なるほど。いや、ごめん。それは無理だな。俺も同じ立場だったらと考えると家族のことが心配で仕方ない。

ただまあ俺には通信画面の向こうに消えた織斑先生の心の内を察することくらいしかできない。弟君が心配なら心配と一言言ってみれば楽になるのに意地というかなんと言つか。

……………うん、素直じゃないね！

……………。

織斑先生との通信を切ってからがこちらの仕事が始まった。任務目標は三つに限定する。第一目標は管理システムの即時奪還。第二目標は観覧席に居る生徒達の避難、そして誘導。第三目標はアリーナ内に居る二名の救出。敵ISの排除または撃破だ。

この場合だがハッキリ言って織斑君達の優先順位は低い。なぜなら彼らはISを装着しているからだ。ISには絶対防御というフザケタ仕様があるから最悪でも死ぬ可能性は低いと見ている。だからこそ第三目標だ。

「オペレーター！全部隊員に対応マニュアルC 13を実行するように通達せよ！」

「……サー！イエスサー！」……」

対応マニュアルC 13とは学園内に敵対勢力のISが襲撃してきたことを想定するものだ。そして“13”とはその中でも特に難しい人質救出任務も含まれることを表している。

観覧席に閉じ込められた生徒達をなんとかして助け出さなければならぬ。ISのない操縦者などただのヒトなのだから優先的に助けるべきだ。

「アリーナ全域に展開する部隊員へ通達。対応マニュアルC 13を実行。部隊識別用の腕章を着用せよ。繰り返す対応マニュアル

」

「現状報告。管理システムの侵食率が89%に到達。現在、三年生の精鋭がシステムを取り戻すために逆ハックを遂行中。ですが状況は芳しくない模様です」

「現地より緊急の報告です。アリーナ管理システムが乗っ取られているために観覧席の扉がロックされているようです。よって通常の手段では脱出が難航中。至急、指示、対応を望むとのことです」

「緊急。アリーナ内にて敵ISと交戦中の白式と甲龍のシールドエネルギーが半減。両者の残りエネルギーから逆算して予想戦闘可能限界まで三十分を切りました。早急な援護が必要と思われます」

生き残っている端末を使用して四人の精鋭達が状況を整理し情報を読み上げる。ここに居る四人は将来の進路をISの開発者や整備士になることを夢見ている者達だ。だからと言っわけではないがコンピュータ関連に強い。

俺もどちらかと言うと彼女達よりだから教えることが楽しい。若いし何よりも自分の好きなことだから俺が教えることを乾いた砂が水を吸収するが如く身に付けていく。だから楽しいね。

あー、大丈夫だよ。他世界の技術は教えてないからさ。一応、この世界の技術バランスのことも考えてはいるのだよ。いきなり未知の技術が広まるのはISが広まったのと同じく混乱を呼ぶことになりかねないからね。

「…状況は芳しくない、か。宮古先生、ゲートと遮断シールドは解除できますか？」

「ええ…さつきからっ…やってるんですけど…っ…う…んもおお！ やっぱりダメですう。…はふう」

くてええ、とコンソールに突っ伏す姿を見て俺が思うこと。うん、宮古先生。そうしているとまんま中学生にしか見えません。あれだよ。テストを前にした複雑な気持ち。

「あー……そうですか…」

「ううう…！悔しいですよお！ふえええ…」

宮古先生、泣かないくださいよ…。貴女も先生のように。寧ろ俺が泣きたい。いやどちらかと言うと寝たいですがね。もうクラス対抗戦が中止に追いやられて無駄に脱力しちゃったから眠いのなの。

……もうこの際だ。手っ取り早く終わらせるか。

「…わかりました。管理システムはこちらで取り戻しましょう。宮古先生はそのあと生徒達の避難誘導の指揮をお願いします」

「えっ？あ、は、はいっ。わかりまええっ？九重先生できるんですか！？」

あれ！？ウソ泣き！？想像したよりも元気な声が聞こえてきたんですけど！？いやいや、それよりもこの子今失礼なこと言わなかったか？俺に“できるのか？”と聞いたような…。失礼な先生だ。俺はできることしか言わないよ。

「……………はあ、一応それでも開発部門兼整備部門兼副担任なので」
「あ…………。あ、ああっ、そういえばそうですね！」

宮古先生エ…。この子は本当に…。俺の本来の役職を忘れてやがったな。確かに入学式から一月以上経った今も開発部にも整備部にも数えるくらいしか顔を出してない。だけどそれは慣れない教師の仕事に時間を取られていたからに他ならないんだ。

……………決して秘密基地を建造するのに忙しかったから忘れていたわけじゃないよ？

基地の建造は主に一自動人形（オートマ・タ）達に任せて俺が寝ている間の監督はラミエルさんが担当してくれたから二週間というハイペースで完成させることができた。皆お疲れ様です。

「…まあいい。 全員注目！これより管理システムを奪還する！各員奮励努力せよ！」

「…………サー！イエスサー！…………」 「は、はいっ」

宮古先生…。お願いだからもう少し覇気を持ってください。コンソールの跡が頬にクツキリと付いています。突っ伏した時に付いた

のは知っているけど緊張感が抜けるよ…。

「…はあ、宮古先生…」

「え？えっ？は、はいっ」

「……………いえ、もういいです」

「え？ええっ！？なんですか！なんですか！？すごい気になりますよー！」

「何でもない。宮古先生の頬にコンソールの跡がクッキリと残っているなどありません」

「コンソール…？頬に跡…？え？……………あっ！あにやああ！私ったらなんでええ…」

なんかもう色々としリアスが台無しな気がする。今って管理システムが乗っ取られたり正体不明の敵ISが襲撃したりという緊急事態だよな？なんでこの先生はこんなに元気なのだろうか…。

【…ラミエル、やれる？…】

【…ふふんっ それは愚問というものであるぞ。我が主はただ“やれ”と命ずれば良いのだ。それだけで我が何とかしよう…】

【…むむむ！ならば“お願い”しよう！ 何とかして？…】

【…我が主…。我は命じると、ええいつ、もう良いわ！その命令、オーダー確かに果たしてみせよう！…】

格好つかなかったけど今の俺はこれでいいと思う。家族に強く命令するってのはなんか悪いかなーって思うんだよね。でもまあ…もう少し、あと二百年くらい待ってほしい。そうすれば少しは偉そうに命令できると思うんだ。

……見かけただけだよ……。

「ラミエル……」

『Roger, My Master』

ペンダントの鎖から切り離れたラミエルさんが解き放たれ宙を舞う。ゆっくりと移動するとメインコンソールの上に直径15cmの青いクリスタルが陣取った。そこから下方に向かって掘削ドリルが伸びて掘り進む。

……やはりドリルはイイと思うのだが、どうだろうか？

こほんっ、ラミエルさんがああするのは中の回路ヘダイレクトに接続するためだ。変なところに接触するとシステムの基盤が吹っ飛ぶが彼女がそんなヘマをするはずがないと俺は信じているので心配していない。こういうのはアンに次いで任せて安心だしね。

『管理システムにアクセス。侵入に成功。敵侵入プログラムを索敵。全システム中93%の侵食を確認。即応プログラムを緊急構築。設置を開始。防壁を多重展開。侵入の遮断に成功。続いて』

空間モニターが次々と現れては消えて、消えては現れる。因みに敵プログラムを赤、管理システムを青で画面に表示している。それが徐々に青で埋め尽くされていくんだ。くくくっ！処理速度なら今この世界ではラミエルさんに敵う者は居ないよ。

それを見て今までその席に座っていた宮古先生が目を丸くしていたのには失礼ながら笑いが込み上げてくるものがあった。まあ誰だってラミエルさんを見たら多かれ少なかれ驚愕するよね。

……コンパクトな身体に強力な超高スペックを！

でも生徒達は、驚きはしても「まあ九重先生だし……」や「葵先生ならいいかな……」とか「気にしない、私も気にしないから……」などと反応が薄い……。ちくせう……。これがマンネリと言うものなのか！？あれ？違ったかな……。

「あ、あのお、九重先生……？」

「む？なにか、宮古先生なにか？」

「いえ、あの……これは何でしょうか？」

「何、と聞かれたら俺の愛する相棒だ、と答えるが。それが何か？」

一瞬の沈黙。時が凍りついた。え？……なぜ？

「えっ！？」「……あの鬼教官にそんな人がっ！？」「……」『っ！』

え？何、その反応？なんなの、それ？家族を愛するのは当然のことじゃないか！その何が悪いのか！だって好きなんだから仕方ないだろうが！あ、それとラミエルさんはヒト種ではなくAIだからね。

……それをこのオペレーター四人衆！お前らア……！

「俺のことをそんな風に思っていたのか……！？お仕置きするぞ……！」

「ッ！~~~~ッ！?!?!?!」

「……っ！（……これってご褒美じゃない！もしかして今がチャンス！？）「……」」

宮古先生も“お仕置き”という言葉になぜか反応したが気にしない。毎度の事ながらここで気にしたら即負けだと思っから。

ともかく俺の怒気を感じ取ったことで宮古先生を含め生徒達は失敗を感じたようだ。

皆、ガクガク…あれ？宮古先生とは違い生徒達のほうは身悶えている、のか？呼吸が荒いよ？顔も赤いが…風邪？え？違うの？なに？想像したら興奮した、だと…？

ガクガクブルブル震えている。…………俺が。

こんなところで場違いではあるが今激しく貞操の危機を感じた気がする！彼女達のMっ気が増強されている！この一週間、放課後訓練を中止していたから“色々”発散できずに溜まっていたのか！？ここに居る四人の生徒達の視線が妙に熱っぽいよ！？

俺の身の安全のため！心を鬼にして！再度おお！彼女達を睨んで威嚇した！！！！

「ギンッ！！！！！」

「……ッ！！はぁ……はぁ……ごくんっ……はぁ……はぁ……」

……熱気が、増した…だと！しかもピンク色…！？

危機回避のために熱した鉛玉をプレゼントしてやろうか、などと少し過激なことを考えてしまった俺は悪くないと信じたい。逆レなんて、それも女子生徒が男性教師をなんて……その手の人はイけるかもしれないけど俺には無理だ。

……俺はお姉さんが、お淑やかなお姉さんが好みなんだよ。

ええいつ！にじり寄って来るんじゃないよ！？仕事に戻れ！役割を全うしないか！……なんでお前らは残念そうな顔してんだよ。能力は別として最近のお前ら変じゃないか？……なに？私達をこうしたのは貴方です、だと……！？

……そんな、バカな……！

お、おい……？やめろよ。頬を赤らめてもじもじするなよ。少し可愛いなんて思ってしまうだろうが。ばっ！だから上目遣いなんかするんじゃないよ！お前ら元が美少女だから困るだろうが！だから……むっ！？

うむ、知らないうちに身体が力んでいて俺の気付かないうちにデモンベインが気を回してクトウグアとイタクアを展開してくれていた。銃による反動軽減のためにわざわざ腕にも装甲を部分展開してくれているという親切さ！

これはアレか？この二丁を使ってこの子達を撃て、と？撃って自分の身を守れと言うのか？なんという気の利く子に育ったんだ！そんな子と一緒に居られて俺は嬉しいよ！

わたし も うれしい です……。

うんうん！俺も嬉しいよ！こうして守ってくれるし俺も寂しさが

無くなつていくからね！皆一緒が一番だと思うのよ！でもでも本当に撃つちゃダメだからね。ポーズだけだよ。って……………あれ？

…………おい？今の誰よ？え？…あれ？

ごめん、今のは聞かなかった方向で話しを進めて行きます。ダメだなぁ。俺もここ数日の徹夜で疲れているようだよ。空耳というか幻聴が聞こえてしまったのだからね。今度から休息は適度に取りよう。

「ほらっ！全員持ち場に戻れ！上手くやれたヤツにはご褒美をやるっ」

…………ご褒美は手作りのお菓子ですよ？

「……ッ！！サー！！！！イエスサー！！！！」

ISを解除しながら思う。この子達はわかり易いヤツらと言っべきなのか。単純だと言っべきなのか。あ、どっちも同じ意味じゃないか…。まあこういうほうが俺は好みではあるな。愛されるバカって割と好きなのよ。俺は。

『わ、我が主はなかなか大胆であるな…。少し恥ずかしいものがあるが…うむ、イヤでは、ないぞ？ふふ、ふふふ』

ラミエルさん…。なぜに悶えているのかね？というか今までずっと悶えていたのか？仕事はどうした、仕事は。管理システムを取り戻さないとアリーナの観覧席に居る生徒達を脱出させられないだろうが。

「ん、ん、っ！…………ラミエル、状況は？」

『むっ？…あ、ああ、そうであつたな。即応プログラムで現状以上の侵入を阻止に成功。現在は敵プログラムを解析し構築した攻勢プログラムにて駆逐中。管理システムの復帰まで一分十八秒…』

うん、今のところ戦果は十分だ。管理システムの解放まで一分強。管理システムの奪還と平行して生徒達の避難誘導を開始。これで第一目標は完了。第二、三目標は…時間がないので同時進行しよう。

『…白式、甲龍の両機ともに通信状態の回復を確認。どうする、我が主よ？』

突入作戦の開始前に事前に言い含めておくのもアリか。何も知らないところへいきなり乱入を仕掛けても現場が混乱するだけだろ。

「凰君、織斑君の両名に通信を」

『了解。通信回線を開こう。　良いぞ』

……こほんっ。では…。

「…二人とも聞こえるか？こちら九重・葵だ」

『もっ！この忙しい時に何よっ！？くだらないことなら切るわよっ！』

『通信がつながった！？先生！なにがあつたんですか！？』

「……………」

こいつら意外と余裕があるじゃないか…。このまま放置してみるのも一興と言えば一興…っ！？なんだ、今の？背筋に悪寒が走つたような…？あー、織斑先生か？サッサと事態を收拾しろという意思を感じ取ったのかもしれない。

……まったく。これだからブラコンは仕方ないな。

「二人共、あと一分だ。一分だけ持たせろ。そうすれば直ぐに俺が行こう」

『へえ、それはいいこと聞けたわ。これで楽ができるわね』

「鳳君、油断して落とされるなど二組の恥だ。織斑君、これはお前もだ。…わかるな？」

『えっ！？あ…は、はいっ！！』

織斑君は自分にまでそんな忠告が来るとは思わなかったのか多少慌ててしまっているが大きな問題はなさそうだ。今は止まっているけど先ほどまで元気にビームを回避していたからね！

「よろしい。では時間稼ぎと敵の攪乱に集中するがいい」

『ええっ、わかってるわよ！だからサツサと来なさいよね！』

『わかりました！なんとかしますよ！』

鳳君の気が緩んでいるな。口調が前の状態に戻っているじゃないか。折角これまで矯正してきたのに。やはり無駄な努力だったのだろうか。元が自由奔放な気質を持っているから難しいと考えていたがここまでとは…。

……少しは女の子らしくしないと織斑君に呆れられてしまうよ。

まあそれはいいとしても直ぐにでもアリーナ内に発進できるように下に降りるとしますかね。管理システムの解放まで残り五十秒。

「宮古先生はAピットに状況を伝えてください。俺は発進ゲートへ降ります」

「はいっ、わかりましたっ。あれっ？ラミエルちゃん、どこ行くの

！？」

きゅぽんっ…という音を鳴らしてメインコンソールから掘削ドリルを引き抜いたラミエルさんが俺の胸元、つまりは元の位置に戻ってきた。

宮古先生はまだ侵入プログラムが駆逐され尽くしていないのに持ち場を離れたラミエルさんに驚いて止めようとしていたようだが一歩間に合わずにいた。もう今ラミエルさんは俺の胸元に居るのだよ。

『む…我を“ちゃん”などと気安く呼ぶでない。あとは我がやらなくとも自走式プログラムが勝手に駆逐しおる。故に心配は要らぬ。我は我が主の御身をお守りするのだ。わかったな？娘よ』

いつもながら手際がいいなー…。お兄さんは驚きです。でもそれ以上に家族の優秀さに鼻高々な気分だね！

「そうなのお？ラミエルちゃんってスゴイのねえ」

『娘エ…。まあ良い。我が主、行きますぞ。管理システムの解放まで残り三十秒だ』

「…ああ、行こう。最後の仕上げだ」

もうボッコボコにしてやる！連日徹夜してがんばった人様の努力を無駄にしやがって！無人機なのは理解しているがこの怒りは何かにぶつけないことには晴らすことは難しそうだ。

故にアイツは フルボッコ、だ！！！！

第7話「黒くて大きいのが来ちゃった」(後書き)

葵は着々と学園内に自分の勢力を拡大中なり。

家族の居る場所へ帰ることを目的としているのになにやっているんだろうか？

世界制服でもする気なのだろうか…？

もう作者にも葵が何をしたいのかがわからないよ…orz

因みに時間の流れですがある程度は融通が利くらしい。

世界間を移動する時にその世界で流れるはずだった時間の直前に移動している。

簡単に言つとセーブ機能の亜種みたいなものです。

タイムマシンのように過去に戻るわけではないのですね。

ではでは！

皆さんの感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第8話「デモンベインが来ちゃった」(前書き)

こっちの更新はお久しぶりですねー。

作者的に切りのいいところまでは”ネギま!”を進めたかったのもあります。

でも、こっちは元々息抜きを目的に書いているから更新率はそれほど高くないですよー。

それでも一話一話が一万字以上という長さです。マジで不思議だし。では続き!どぞー。

第8話「デモンベインが来ちゃった」

というわけでBピットの発進ゲートまで降りて来たわけだが…で
かくない？いや毎回思うんだけど、今日の前にある発進ゲートなん
だけど必要以上に大きいと思うんだよ。扉だけでISよりも十倍以
上大きいし。

……いやまあどうでもいいんだけどさ。

『管理システムの解放まで十三秒。…発進ゲート解放までカウント
10…9…8…7…』

ふむ。怒りを抑えるためになるべくだらないことを考えていた
ら出撃直前になっていたようだ。やろうと思えば数週間どころか数
ヶ月くらいの徹夜ならできるのに…。疲れるけどさ。

いやー、タカが数日間の徹夜でイライラしてしまった。それより
も今はISを装着しないと生身で突撃することになる。文庫本型の
待機状態にあるIS“ある・あじふ”を手に取り…こほんっ。では
…！

「憎悪の空より来たりて…正しき怒りを胸に…我らは魔を断つ剣を
執る！ 汝、無垢なる刃！デモンベイン…！」

叫んでみたのは気分だから気にしちゃダメだ！なんとなく叫ぶと

気合が入るしテンションも上がる気がしない？俺は上がる………と思う。

全長3m強とやや大きな全身装甲を身に纏う感覚は、なんと言うか：俺をして不思議だ。基本的に殆どが科学技術だからかね。いつもは愛機であるプロテアのように半分前後は魔法技術も使っているから気分的に新鮮だ。

『出撃シーケンス。IS機体状況、搭乗者バイタル、進路、その他まとめてオールグリーン。…3…2…1…ハッチ解放。いつでも行けるぞ』

「…九重・葵。デモンベイン、出るぞ！！」

……。

……。

少し時間は戻ってアリーナ内では正体不明ISを相手に時間稼ぎをする二人の姿がある。一人は二組クラス代表、凰・鈴音。もう一人は一組クラス代表、織斑・一夏。そして二人は今窮地に立たされている。

「一夏、離脱ッ！！」

「お、おう！」

凰・鈴音の警告に織斑・一夏は大きく回避機動を取る。直後に一夏の居た空間を極太のビーム砲が引き裂く。

一夏の装着する白式は燃費の悪さが災いしてシールドエネルギー

は残り六十を下回り、鈴音の甲龍は元々の燃費の良さとある副担任にイヤと言うほど地獄（訓練）に叩き込まれた経緯があるため二百以上のエネルギーを温存していた。

「ああつ、もうっ！いつになったら来るのよ！時間稼ぎつても限度があるのよ！」

「怒鳴るなよ、鈴。先生は来るって言っただから」

「わかってるわよ、そんなこと！……（でも一夏が…）」

一夏の駆る白式のシールドエネルギーが心許無いことに鈴音は焦りが出た。好きな人が危険に陥る。そんな状況に危機感が加速度的に高まっていた。

だからこそ鈴音は願う。早く、早くと。一分時間を稼げと言った副担任の到着を耐え忍びながら待つ。千冬並みに厳しくて…ある意味それ以上に怖いけどそれと同じくらい頼りになる副担任の到着を。

「……ッ（なにしてんのよ。早く来なさいよ。そうじゃないと一夏が…！）」

「鈴！避ける！」

「っ！？」

一瞬、考え事していた。でもそれがいけなかった。一夏の呼びかけに気付いた時には正体不明のISは隙を見せた鈴音に狙いをつけていたのだ。撃ち出される暴力の本流。彼女の目の前に極太のビームが迫っていた。

「こんのおおおっ！！！！！！」

「鈴　　ッ！！！！」

鈴音はこれでもかと言うほど甲龍を傾ける。スラスターを最大で噴かせて回避軌道に入った。身体を捻っている時も鈴音は迫りくるビームから視線を外さない。実戦中にそんなことをするのは二流いや三流だ。

真横を通り過ぎる凶悪なビームをやり過ごして回避に成功するも表面装甲はビームの高熱量で熔けている。このことから直撃したら絶対防御のあるISでもタダではすまないことがバカでも理解できる。

「はあ…はあ…（あ、危なかった…）」

「鈴っ！無事か!？」

「え、ええっ、あたしは大丈夫よ」

「そっか。そりゃよかった…」

飄々としている鈴音だが実際は代表候補生の彼女をしてギリギリのタイミングだった。あのタイミングで回避したのに物理ダメージが装甲だけ、殆どはシールドエネルギーで緩和されたので幸運とも言える結果だ。

心配している一夏にここで素直に感謝の言葉でも言えれば良かったのだが鈴音はこんな時でも恥ずかしがって素直になれない。最早これは意地というだけではなく病気じゃなかるうか？ただ乙女と言うにも限度がある。

「…にしてもアイツなんなのかしらね？」

「さあな。でもなんか妙じゃないか？なんか機械っぽいし」

「はああ？ISって機械なんだから当然じゃない」

「いや、そうじゃなくて。なんと云うか……あれって本当に人が乗ってるのか？」

「だから、人が乗らないとISは」

鈴音は言いかけた言葉を切り、正体不明ISを睨みつけている。
一夏の言う違和感に自身でも覚えがあった。甲龍に記録されている
今までの行動を統計させる。

するとどうだろうか。情報量が少ないから断言はできないがあの
ISは一定のパターンで攻撃・防御・回避…挙げれば切りが無いが、
ともかく多少の誤差はあるものの全ての行動が同じ拳動、同じ動き、
同じタイミングだった。

……一夏の言う通り、これじゃあのISがプログラムされた無人
…！

「…うん、それでも無人機なんてありえない。ISは人が乗らな
いと絶対に動かない」

言葉にするも自信も無ければ確信も無い。ただ自分の勘は一夏が
正しいと訴えている。それでも無人機とは認めたくない。だってI
Sはそういうモノだから。

「そうだけど、でも…」

『一夏あああつ！！！』

「「っ！？」」

尚も一夏が言葉を述べようとした時、アリーナ内にスピーカーから
大音量で彼の名前が叫ばれた。当然二人は突然のことで驚く。ど
こから、と探す。ISの360度死角のない視界とハイパーセンサ
ーで直ぐに見つけた。

アリーナの四つあるピットの一つに長い髪をポニーテールにした少女が一人で居た。そしてそれは一夏の幼馴染……。

「箒っ!？」

『男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!!』

彼女は、箒は言葉ではこう言っているが本心では一夏になにかあったらと考えるだけで不安に潰されそうなほど心配していた。その結果が我慢できずにこの行動を取ってしまった。

愚かな行為。誰もがそう思うだろう。しかし考えてみてほしい。

IS学園などに居るから勘違いされることもあるが彼女はまだ15歳の少女だ。高校一年の学園生だ。精神的に熟成しているかと言えばノーと言える子供だ。

優秀な頭脳を持つ姉に劣等感や嫉妬心を持つ普通の女の子だ。姉の開発したISのせいで家族は日本政府による保護という名目の下でバラバラになった。そう考えるのも仕方ない。…訂正しよう。それも事実だ。

そんな普通の少女が大切な人の命が危険に曝されていることを冷静に黙って見ていることができようか?できるわけがない。叱られることになるうとも黙っていられなかったというのが彼女の心境だ。

「あの子……」

「鈴…これはマズイか?」

「…聞かないでよ、バカ…」

最もそんな事情など当事者達には不確定要素以外の何ものでもないこともまた事実ではある。思わず聞いてしまった一夏とそれらに

頭を抱える鈴音。仕方がないだろう。

『……………』

正体不明ISが動き出した。二人へ向かわずに右腕のビーム砲を
箒へ照準した。光の粒子が砲身へ集まるエネルギーをチャージして
いることがわかった。こうなってしまうといつ発射してもおかしく
ない。

「ああっ！？ヤバイっ！！」

「ああ、もうっ！仕方ないわね！！」

慌てて動く一夏と呆れながらも確実に加速する鈴音。

まだだ。まだ発射されていない。ならば間に合う。箒は必ず助け
ると一夏は心の中で絶叫した。白式のエネルギーは僅かだが時間稼
ぎが目的の自分ならここで使い切ったとしても問題は無い。いや、
ないわけじゃないが。

ともかくビームなら一度くらいなら雪片式型のエネルギー無効化
攻撃で防げるかもしれない。そう考えた。一か八かの賭けだ。

そんな一夏を鈴音は最大限自分のことでサポートする。何
も言わずにこういうことができることからこれも惚れた弱みかもし
れない。

だが現実は無常だ。一夏が正体不明ISと箒の間に入る前にチャ
ージは終えてしまったようだ。鈴音も龍砲で気を逸らそうと必死だ
がそれを嘲笑うように正体不明ISの砲身がガラガラとエネルギー
光を発している。

「……………！」
「逃げろ！！纂っっ！！」
「なっ！？」

一際ビーム砲の砲身が輝いた。これが発射されれば纂の命が塵と消える。一夏はその姿を幻視してしまった。

「ほう　ッ」
「アトランティスストライクッ！！」
「ッッ！？！？」

纂の名を叫ぼうとした一夏の口は言いかけた状態で止まった。上空から隕石のように加速してきたモノが正体不明ISに激突してアリーナの壁際まで吹き飛ばしていた。

あの昔懐かしいライ　ーキックのように突然出てきたモノの正体は……。

「あっ……」
「なっ……」
「あ……」

難攻不落の堅牢な要塞のような印象を見た者に与えるISを纏った人物。開発部門兼整備部門兼一年二組副担任というフザケタ肩書きを持つ人物。九重・葵、その人だった。

「待たせたな、ガキども。下がっている、ここからは俺の仕事だ」
堂々とした頼もしい背中と出てきた言葉で、それを見て聞いた三

人の上げる小さな声は全てを遮られた。

これから先は第二ラウンドの開幕だった。

……。

……。

忘れてた！ 筈の存在を今の今まで忘れてた！ あ、危なかったぜい……。間に合ってよかったー。状況の細かいところが違うのは間違いない。俺が関係しているんだろう。ホント間に合ってよかった……。

「待たせたな、ガキども。下がっている、ここからは俺の仕事だ」
「え、でも……」

織斑君……状況を考えようよ？ 白式はエネルギー切れ間際、甲龍のほうはエネルギーがまだあるみたいだけど表面装甲は融解一步手前じゃないか。その状況でまだ戦おうとするのはバトルジャンキーの志向を持つ人じゃないとありえないよ。

「議論の余地はない。黙って下がれ。命を懸ける場面でもあるまいし」

「それでも一人より三人のほうが。それに皆が閉じ込められて……」

むむむ……正義感が強いのは悪いことじゃないけど今はかりはいただけない。そういうことを言いたいならキッチンと“自分だけの覚悟”と最低限“戦える実力”を持ってからにしようか。

それに織斑君に何かあると織斑先生が悲しむでしょうが。たった一人の姉なんだから下手な心配をかけたらダメだ。家族は大事に、

だ。だからと言って遠慮しろとは言わんけどね…。

「問題ない。鳳君、彼を連れて下がれ。…（ボソッ）心配なのだろう？ ん？ んん？」

「なっ！？ そそそそんなことないわよっ！！」

だが今の状況で彼の申し出は些か面倒だ。故に織斑君には鳳君を保護者げふんげふん引率ごほごほっ恋人…は鳳君次第か。…とにかく鳳君に織斑君の身柄を預けることで彼と篠ノ之君の安全を図ろう。

……はいはい、わかったわかった。テレてないで早く行けよ、このツンデレラが。

「~~~~っ！！ 行くわよ、一夏！！ ほらっ！ 早くっ！！」

「ええっ！ ちよっ！？ 鈴！ いきなりどうしたんだよ！？」

「いいから！ あんたは黙ってあたしについて来ればいいのよ！！ あの子も避難させないとダメでしょうが！？ ほらっ！！」

「え、ええっ！？ 鈴！ 待っ！？ 引っ張るなよ！！ 首っ、首が絞まっ

……！！」

くくくっ、これも青春か。若いね…。鳳君は二組だし応援するなら彼女だよな。だって俺は二組の副担任だし！ 一人だけクラスが違うのだからこれくらいのバックアップがあっても罰は当たるまいよ。うん。

「…さて、もう動けるだろ？ それともわざわざ待ってくれたのか？」

『

………』

黙して語らず、か…。仕方ないと言えば仕方ないがコミュニケーション機能が無い無人機は寂しいものだ。普段からアンやラミエル

さん、それにCOS MOSを見ているから物足りなさを感じる。

「恨みはない。だけど止める理由はある」

今日のクラス対抗戦のために教師や事務員、他関係者の皆が準備に惜しみない努力をしてきた。電話係の事務員は24時間体制で各国と意見調整してきた。それを無駄にされたことには多少あの子の背後に居る相手を恨んでも罰は当たらないと思う。

『……………』

それでもなにも反応なしか…。やはり寂しいものだ。まあ機械の何もかもに感情やそれに順ずるものを付加しろとも言わないし思わないけどさ。変に情が湧いたら困る。やり辛くて仕方ないし。

まあ、それはともかく、だ……。

「行くぞ！クトウグア！イタクア！」

『ツ……………』

先手必勝！クトウグアで三発叩き込んだ。…………どれも回避されたけどね。ゴーレム？型の割りにいい反応するじゃないか。行動パターンのバリエーションは少ないようだけどこれなら今の第二世代では少々ダルイかもしれない。

今度はイタクアで全六発を撃ち放った。半包囲していくエネルギー弾は確実にゴーレム？型を追い詰めて命中していた。それなのにさ…………。

「浅いつ！？なかなか堅いじゃないか！！」

『…ッ　ッ！』

競技用にリミッターを掛けた今の状態では負けなかった。これだから好かないんだ。こんなことなら競技用の設定じゃなくて実戦用にすればよかった。寝惚けた頭ではそんなこと考える余裕すらなかったんだ。仕方ないんだよ…。

>> 敵、内部に高エネルギー反応。砲撃態勢。緊急回避を推奨<<
「むっっ！？」

少し前のことを後悔していたらそれをゴーレム？型は隙と見たのかビーム砲撃してきた。ああ、俺の直ぐ脇を極太ビームが通り過ぎで行ったさ。デモンベインの装甲なら耐えられないこともないけど態々当たることもない。怖いし…。

さっきは助かった。デモンベインの警告にマジ感謝だ。この子なかなかい子だよ。サポート上手と言うかなんと言うか。戦闘補助に限ればラミエルさんに優りはしなくとも劣らないものだ。

「危ないだろが！？こらああああっ！！」

『　　ッッ！？』

それでまあこんな悪いことをする子はオシオキだべー、と思うクトウグアとイタクアを連射してボコボコにした。…なぜだろう？俺は悪くないはずなのにすごく罪悪感が湧いてくる気がした。

当然ゴーレム？型も黙ってやられてはくれない。両腕に装備された高出力ビーム砲を交互に連射してくる。砲射角は上空に向かっているからいいけど観客席に向いたら一大事だ。できるだけ撃たせないようにしないとダメか。

「出鱈目に撃ちまくってんじゃない!!」

「……………!!」

両手の銃を先程以上に連射した。それなのに…チイイ!リミッタ
ー掛けたままの銃撃じゃあの子の装甲を貫けない。イキナリ接近する
のは愚策もいいところだけど……こうなれば接近して斬り崩すし
かないか。

「バルザイの偃月刀!!」
えんげつとう

「ッ!?!」

「まずはその悪戯な腕……斬り伏せさせてもらう!!」

例え出力リミッターが掛かっていても速さだけは拘束を緩く設定
している。つまり今の状態でも速さと防御力の堅牢さなら格世代I
Sをしてデモンベインは凌駕しているということだ。

「ッッ!?!」

「まずは一つ…!そしてもう一つ…!」

くっ…外した。あー、失敗だ。機械ならではの判断と言ったこ
ろか。腕一本を囷にして形振り構わず後退するために全力でスラス
ター噴かして距離を取られた。斬撃後でこっちは硬直していたから
追うのに遅れたし…。

まったく…手間を掛けさせてくれるじゃないか。一気に両腕を斬
り捨てようとしたのに一つしか無力化できなかった…。向こうは一
定の距離を取ってこっちを伺っているのかね?随分と余裕じゃない
か。

……くくくっ！こうなったら今できる全力で攻めきってやるっじゃないか！！

「……！！！」

「チィー！逃げるなーっ！！」

「……！！！」

あの子：俺が近付けば近付くだけ後退して行きやがる。ジリジリと距離は縮まっているからこのまま追い詰めればいいのだけどそれだと余計に時間も掛かる。…何よりも俺が疲れるし、飽きてきた。

侵入してきた子は俺の斬撃をちょこまかと紙一重で回避するのはなく大雑把に大回りして確実に回避している。

瞬間。少し考えて一気に片付けるための準備を始めた。まずはバルザイの偃月刀を格納してアリーナの中央へ移動する。この時に危険や余計なちよっかいを出されないように警戒してあの子を視界に納め続けるのは忘れない。

「思ったよりよく動く！いや、ならば……動けないようにすればいい！！」 アトラック・ナチャ！」

「ッ！！！！！」

今までの行動パターンから考えてあの子はアリーナからの脱出はプログラムされてないはずだ。この場所の面積なら多少相手の動きを先読みすれば限られた範囲内で相手を止めることも可能だ。

アトラック・ナチャで絡めとり無理矢理あの子の動きを止めて地上に固定した。脱出しようと必死にもがいているけど無駄だ。数十秒は確実に拘束する自信がある。

「無駄だ。その系からは何人たりとも逃れることはできない」

「ッッ……！！！」

「もうやめよう。これ以上……」

今ももかくこの子を見ていると悲しくなってきた。捨て駒のように使われるのを見ているとどうしようもない思いが湧いてくる。

俺も戦闘を目的とした機械に携わってきたから可哀想という感情自体が矛盾していることはわかっている。麻帆良で作戦とは言え大量のシュワさんを大破させたこともあるし……。陽動や囷に使うこともある。

それでも壊れれば放置するんじやなくて回収する手段だけは残している。修理もするし改造、改良もする。家族のために犠牲にすることが主だから感謝もしている。無碍に扱うことなんかしない、して堪えるものか。

それなのに目前に居るこの子のように敵陣に単独突入なんて高確率で壊れることがわかってるのにバックアップもないなんて……効率が悪い上に、ちよつと、その……うん、この子の雑な扱いにムカツとする。

少し、この子の背後に居る人に小一時間ほど問い詰めたい。この子はいらない子なのか？あ、あ、っ？何様だ、お前はっ？……と、二〇三日問い詰めたい。ゴメン、小一時間じゃ済まないかもしれない。

これが俺の勝手な思い込みだとわかっている。だけど、それでもこればかりは納得できない。これ以上あの子と戦うのに抵抗がある。だから！

「……これで終わりだ！！おおお！！！！」
「　　っ！？！？」

デモンベインで止めの一撃、それも必殺技と言えばやっぱりこれしかないだろ！！それっぽい舞台演出はラミエルさんの無駄に高性能な立体投影技術によって完璧だ。

この機体を作ったからには一度は使ってみたかった！テストはしたけど実戦では初めてだ！この子を救いたいという思いはあるけど必殺技と考えて俺の中の男の子が燃え上がってきた！

「光差す世界に汝ら暗黒住まう場所無し！！渴かず！！飢えず！！無に帰れ！！！」

こういう厨二臭い台詞って男の子を燃え上がらせる要素に溢れていたりすると今でも思う。ちょっと徹夜したから俺のテンションもナチュラル廃もといハイになっているからこういう台詞も言えるんだよ？

イグニッション・ブースト

瞬時加速でゴーレム？型を目指して一瞬にして接近した。右手には暴虐を絵に描いたような高熱のエネルギーを集中させている。そしてその掌を目の前の子に押し当てた。

「　　ッッ！？！？」
「おおおお！！！！　　レムリア・インパクト！！！！」
「…………　　っっ！！！！」

この子を壊すかもしれない。頭の隅でそんなことを考えていた。だけど…それでも助けたいから敢えて攻撃の手は緩めない。だから

…。

『昇華ッ』

… 受け止めてくれ！！このっ！俺のっ！！想いをつ！！！！

止まることを知らない無限に高まる熱量は触れたものの全てを熱量に還元して更なる段階へ昇華し消滅させる。本物とはやや仕様が異なるけどIS技術とメタトロン技術で再現した割りには上手くできたと思う。

「???? って！消滅させたらダメじゃ!？」

『ふっ、我を甘く見るなよ？我が主の意志を汲み取り出力は調整してある』

「ラミエルさん、ナイスだ！素晴らしい！ハラショー！」

『ふふ、ふはーっはっはっはっはっ！ま、まあな！なにせ我は我が主の一番の理解者であるのだからこれくらいは当然よ!』

ちゃんと手加減はしたってことだ！さすがラミエルさんだ！つまり本気は出したけど全力は出してない！だから！消滅は一步手前で止まってる！…… よな？元々から競技用にリミッターが掛かっていただけ更に調整してくれたから。これなら…。

砂埃が晴れた先を見ると熱せられてガラス状になったクレーターの中心に横たわるゴーレム？型の姿があった。

ゴーレム？型は片腕がないし頭部も一部破損している。下半身に關しては全損しているから歩行は無理。エネルギー反応もないから完全に機能停止状態だ。それでも肝心のISコアは無傷という俺にとっては理想的な勝利に終わったと思う。

それはそうと……あー…アリーナの整地どうしょ？高熱で地面がガラス状に結晶化してんじゃない…。これは掘り返したあとで土砂から入れ替えないとダメだな。はあ…。

「ラミエルさん。織斑先生の居るAピットに繋いで」

『うむ……良いぞ』

「うん、ありがとね」

危険は排除したから後始末を押し付けふんげふんっ…任せたいから織斑先生に連絡したい。ここまで働いて更に後始末もやらされたんじゃ堪ったものじゃないからね。任せられることは任せておかないと。

『九重先生か？ご苦労だった。どうやら無事に終わったようだな』

「ええ、状況終了です。安全は確保したので織斑先生には事後処理を頼みたいのですが」

『ああ、それは山田先生に任せたら大丈夫だ。……すまない、少し待ってくれ』

「え？は、はあ……………え？」

織斑先生…なんか通信先から「えっ？先輩ヒドイ！」とか「私もまだ仕事が残っている！」とか「先輩も手伝って下さい！」とか、某きよぬーメガネっ娘先生の抗議の声が聞こえてくるんだけど……気のせいかな？

『んんっ！…すまないな、九重先生。少々意思統一に誤差が生じてしまったようだ』

「いえ、それは構わないのですが……あの」

いや、だからさ？今も山田先生が小さな声でブツブツと文句垂れてんですけど……それはいいのか？本当に山田先生に仕事を任せて……押し付けていいの？やっていいならトコトンやるよ？俺は。

『九重先生、貴方は“何も見ていない”……そうだな？』

「え？いや、あの、それは」

『何も、見ては、いない。……そうだな？』

「いや、だから、そうじゃなくて」

聞けよ。話を聞けよ。このブラコン生活能力皆無女教師が……。それでも美人なのが憎めないからまた困る。嫁に欲しいとは微塵も思わないけど……。

『九重先生、今度一緒に模擬戦で』

「あー！俺は何も見えていません！」

『そうか……』

おいコラ？今小さな声で「残念だ……」とか言わなかったか？気のせいだよな？な？な？はあああ、これだから個人の戦闘力が高いヤツは困るんだ。バトルジャンキーなんだから、もう……。

少しはウチの家族を見習えというのだよ。……ん？なに？お前の家族も似たようなもの、だと……？おいコラ？なにフザケタこと抜かしているのかな？ああん？ウチの子達はバトルジャンキーなんかじゃない。ちょーつとヤンチャなただけだ……！！

……ふんっ！失礼な！

……。

……。

襲撃事件が一段落した時にはもう夕方になっていた。最も俺は暴れたあとは職員室で報告書と被害報告書を作っていただけだ。そのあとは仮眠室で一時間の仮眠を取ったくらいか。寝不足だったからグッスリだったな。

そうそう、仮眠室は意外と寝心地が良かったのには驚いた。流石はIS学園だと思ったね。あ、ただ一っだけ気になるのはシーツから香水のような甘い香りがしていたのが気になった。

男女共用なのかね？…あー、でもこの学園に所属している男性なんて用務員の渋カツコイーおじいちゃんと朴念仁の織斑君それに錬金術師兼教師の俺くらいだから共用と言っても意味無いかもしい…。

まあそれはともかくだ。そんなこんなで起きてみれば少々手持ち無沙汰になったから散策がてらに出歩いていたわけよ。その時に思い立って事件後に保健室へ運ばれた織斑君と凰君のお見舞いに行くこととしているわけですな。

「ん？二人も織斑君達の見舞いか？」

保健室へ行く途中の廊下でセシリア君と篠ノ之君を見つけた。二人の様子からこれから二人のお見舞いに行くようだ。そもそもこの廊下は保健室に用がないと通ることすらないところだしね。

「ええ、そうですわ。そう言う葵先生も、でしょうか？」

「ああ。一応担当クラスの生徒と助け出した生徒だからな。無事かどうかの確認をするつもりだ。…篠ノ之君」

「…ッ！はい…」

名前を呼んだだけでビクツと大げさに反応するなよ…。この怯えた様子を見るに彼女は既に織斑先生からアリガターイお説教をいただいたんだろ？な。チラツとセシリア君に視線で確認を取るとコクリと頷いて肯定してくれた。

「くくくつ。なに、そう堅くなるな。別に叱るというわけじゃない」

「え？それでは一体…？」

「その様子だと織斑先生に十分絞られたのだろう？ならば俺から言うことは何もない」

うん、叱る役は織斑先生が既にやっている。それなら俺の役割はそのアフターケアだろうさ。篠ノ之君は褒めると調子に乗るが頭ごなしに叱り付けるとトコトン落ち込むからな。まだまだメンタル面が不十分のようだ。

……俺もだけど彼女も豆腐のようにヤツコイ精神をしているようだ。

「えっ？い、いいのですか？私は叱られて当然のことを」

「待て待て。ふむ？…ああ、なるほど、篠ノ之君は説教が好みかな？」

「い、いえっ、決してそういうわけではないのですがっ！」

挙動不審の篠ノ之君の緊張を解くために多少の冗談は必要だと判断して茶目っ気を出してみた。最も説教云々と言う時にすんごい楽しそうにニヤニヤして伝えるのが冗談に見えないと思うけどね。

なんでセシリア君はそのやり取りを見て微笑ましそうに見ている

のかね？俺の意図を察してくれたのは嬉しいが俺まで笑われる覚えは何もないんだけど。…って、なんでまた笑うのかね？

「くくくつ！冗談だ、バカ者が。そんなに慌てることはない」

「むつ、九重先生…」

「ん？なんだ、怒ったのか？」

「いえ、自分の不徳は理解していますので」

篠ノ之君さ、ムツとした表情と雰囲気と言われても説得力がないよ？くくくつ。可愛いものだね、本当に。東君もこんなに可愛い妹さんを放っておくなんてことはしないでずっと側に居ればいいのに、勿体無いね！。

……今度写真に撮って画像データを送ってあげようかな。

「頭の固いヤツだ。…では行くぞ。このまま廊下に居ても時間の無駄だからな」

「はい…」

「ふふふ。ええ、参りましょう」

セシリア君も彼女の心境を察しているのか、うふふと微笑んでいますね。まあその気持ちはよくわかる。こういう幼い反応はどことなく微笑ましい気持ちにさせられるからね。

そうしているうちに保健室前に着いた。まずは俺が中に入って様子を見ることにした。中には鳳君だけじゃなくて男の子の織斑君も居るわけだからさ。着替えの時に入ったら気まずいじゃないか。

それでまあガラツと扉を開けるとそこには……。

「失礼す ツツ!!」

「……すう……すう……んん……」

「……んー……ん? ツ!？」

寝ている織斑君の唇を奪わんとする凰君の姿が!?!うわっ!うわっ!どうしよう!?!決定的瞬間を目撃しちゃった!?!見たところ未遂のようだけど織斑君の寝込みを襲うとは……凰君も大概大胆だね!?!先生はドキドキだよ!!

……こゝこは氣を利かせて何も言わずに去るほうがいいよね?
(ドキドキ)

「あわっ!あわわわわわわっ!?!?」

「………すまない」

「ひゃわわわわわわーっ!?!?!ち、違うのよ!先生!あたしは、っ!お願いだから何も言わずに出て行かないでーっ!」

いって!いって!気にしないで!どうぞ続きをしてちょうだいな!先生は凰君を応援しているよ!俺の担当クラスの生徒だしね!だけど避 だけはキチンとするようにね?“学生の身で”とか大変でしょ?じゃ!

「待てっって言ってるでしょーがっ!!あ!?!こらーっ!?!?」

俺はススツと滑るような流れと速さでつい今し方入って来た扉を開けてまた閉める。この時に手を掛けて扉が開かないようにガツチリと固定するのを忘れない。なぜか?そのほうがからかえて楽しいからだ。

保健室を出る時に凰君が何か言っていたような氣もするが氣のせ

いだろう。しかしまあ、寝込みを襲うとは言え、折角凰君がなければの勇気を振り絞っていたのに悪いことをしたものだ。これでは応援しているとは言えないな。ハハハ。

「あら？葵先生どうしましたの？これでは中へ入れませんわ。…それにしても中が騒がしいですね。ここは保健室ではなかったのかしら？」

「そうです、九重先生。これでは一夏の見舞いができない。ん？それと中からなにやらガチャガチャと叫び声が聞こえるのですが。…ほら今も」

俺の押さえている扉が今もガタガタと煩く軋んでいる。凰君も扉を開けようと必死だねー。だがしかし、ただの人間の膂力で俺の力に勝てるものか。外に出たかったらISでも使わないとね。

……あれ？何かフラグが立ったような？

「二人とも…今は何も聞くな。中ではある意味で青春の1ページが行なわれているんだ…」

「え？え？え？」

「はぁ……は？」

俺の言うことに戸惑っている二人だがそれよりも「扉が…」と先程以上にガタガタ煩い扉が大変気になっている様子だ。俺もいい加減に押さえるのが面倒になってきた。ここまで引張っておいてアレだけど……これからどうしよう？

「だ・か・らあ！！ちよつと待ちなさいって言ってんでしょーっ！？！？」

ドガンツという轟音がした。それは俺の押さえた扉の横、つまり保健室の壁が破壊された音だった。破片が飛んでこないようにさり気なくラミエルさんがDフィールドを張ってくれたことにまずは感謝だ。

「なんですの！？なんですの！？なんですの！？」

「なんだ！？なんだ！？なんだ！？」

「鳳君……。はぁ……。この穴どうするんだよ……」

イキナリのこととで混乱する二人とその原因が思い当たることから呆れる俺というオモシロ空間に突入した。どうでもいいが少し涙目になっているセシリア君とワタワタしている篠ノ之君が可愛いと思っ

た。
それで、だ。壁をゴツソリと吹き飛ばしてその開いた穴から出て来たのは予想通り甲龍に搭乗した鳳君だった。この状況でも起きない織斑君に先生は呆れていいやら笑っていいやらわからんね、本当に。

それにしてもこの子もかなり無茶をするなあ。本国じゃどうか知らないけどこのIS学園内でISの無断使用は厳しく規制されているつてのにさ。これに壁などの備品破壊を含めると反省文と本国への抗議文は確実かね。あと織斑先生のオセツキョウ……。

……それもマンツーマンで二時間くらい？いや、もしかしたら三時間かも……。

……。

後日、保健室の壁を破壊したことが織斑先生にバレた凰君が正座させられてお説教されている姿が一年学生寮にて見られた。チクチクと、しかしハッキリと彼女の愚かさを弄り最後に貫く説教方法に俺は愕然とした。

……そんなテクニクがあつたなんて…。

「千冬さん！お願いだからもう許してーっ！！」

「学校では織斑先生と呼ばんか！！」

「イタイっ！？う、うう…うわーんっ！！」

パソコンと凰君の頭に炸裂するのは織斑先生の出席簿エクスカリバーの音だった。これで少しは彼女の暴走の歯止めになればいいけど……無茶かな！。

第8話「デモンベインが来ちゃった」(後書き)

戦闘描写はアレですが必殺技を撃てたので作者的には満足です。終わりのほうがプチギヤグ空間に入ってしまったけど仕方ない。

だってシリアスになるところがなかったしww

作者は基本的にギャグ分とほのぼの分で構成されているのですよー。

(えー…)

それにしても鈴が書き易いです。作者はラウラ党のはずなのに…。

基本的に葵は人間よりも人外に好まれる傾向にあります。

本人は無意識ですが葵も人間よりも人外のほうが好きというか好む傾向にありますね。

だから機械にも愛情を持って接するのですよー。

ではでは！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第9話「ほのぼのが来ちゃった」(前書き)

今回はほのぼのが中心です。

戦闘はありません。予めご了承ください(ペコリ)。
では続きをどうぞ！

第9話「ほのぼのが来ちゃった」

襲撃事件が一応の解決を見てから暫く経った。今は六月になったばかりだ。季節は順調に夏へ移りつつある。そんな中、久しぶりの休日なので俺は今“とある食堂”へ来ている。

……この店、“五反田食堂”の“業火野菜炒め”を食べるためにな！

この店の業火野菜炒めを定食で注文したのは確認のためだ。その確認することは“美味か否か”だ。これがとても気になった。前に居た研究所は横浜にあったからここまで来る用事もなかったから機会に恵まれなかったから。

「……………んっ。ご馳走様」

もう食べ終わりだった定食の炒め物とご飯を一口で完食して手を合わせた。うむ、値段の割りに学生やサラリーマンに嬉しい量も絶妙な火加減で振るわれた炒め物の質も申し分が無い。十分に満足できる一品だった。

「ふむ…店主」

「…へい、なんでやしょう」

「いい味だった」

「へい」

店主は一言返事をする黙って食後の緑茶を出してくれた。筋骨隆々としている外見で勘違いし易いが、店主はなかなか気配りに長けているようだ。

「ふっ… 感謝する。ズズズっ…」

ふう、うまいな…。出された緑茶と一啜りしてホッと一息吐いた。背中を向ける店主もなにやら満足そうだ。

と、まったりしていた時に店舗の天井、二階がドタンバタンと騒がしくなった。それでも年季を感じさせる店内なのに埃一つ落ちてこないとは流石だ。店主の料理店にかける誇りを感じられる。

「……店主、なにやら二階が騒がしいようだが何か…」

ガラツと店の扉が音を立てて開かれた。入ってきたのは妙に女の子の子した服装の女の子だった。そんなに可愛らしく着飾ってどうしたのだろうか。デートにしてもここで待ち合わせるにはその格好が場違いに過ぎる。

「 蘭。まだ客が居るんでえ、もう少し静かに入らねえか」

「あつ、おじいちゃん、ごめんっ！お客さんもごめんなさいっ」

「なに、構わないよ。俺のことは気にせずに店の手伝いをするかい」

「はいっ、ありがとうございますっ！」

店主に注意されて不貞腐れることもなく素直に謝罪する女の子だった。余りにも素直だったものだから俺も不快感なく許すことができた。良くてきた子だ。

しかし、ふむ…なるほど。彼女がこの五反田食堂の看板娘である五反田・蘭か。こんなによくできた子が孫で店主もさぞかし鼻が高いことだろう。

「……店主」

「…へい」

「いい孫を持ったな」

「へい」

嬉しそうだな、おい。もしやと思ったらこの店主はやはり爺バカの気があったようだ。背中を向けていてもわかる。孫を褒められて嬉しいのはわかるが落ち着け。中華鍋を二つ同時に振るうな。…む？それでも完璧にこなすとは……やるな。

「うげ」

「ん？あ、先生？」

また誰か来た、と思ったら織斑君と五反田妹に似た髪の少年が入ってくる場所だった。なぜここに織斑君が居るとか思わないでもないが今日は日曜日で学園も外出許可が出ている者は町に息抜きに出ているので不思議は無い。

…とすると、だ。彼の隣に居る少年が五反田・弾か。まだ確認は取れていないが恐らくそうだろうという確信がある。なぜか？織斑君に同姓の友人は少ないと断言できるからだ。コレばかりは否定させない。

「……ああ、織斑君か。君もお昼かな？」

「あ、はい。ここ友達の家なんで遊びに来てたんです。そう言う先

生もお昼ですか？」

「いや、俺はもう食後だ。そうか、ここは君の友達の家だったのか」

ふむふむ、そういうことか。IS学園は女の園と言ってもいいかな。彼も休日くらいは同姓の友人と過ごすことで肩の荷を降ろしたかったということか。俺も同姓だけど教師という肩書きがある以上は彼がゆつくりできないだろうしこればかりは仕方ない。

「…あ、紹介しますね。こいつが弾です」

「えっと…はじめまして。一夏の友達で五反田・弾って言います。その、一夏の先生？」

「うむ。はじめまして、九重・葵だ。それと俺は織斑君の担当教師ではない。その隣のクラスの副担任だ」

向こうも俺の近くに席を取りつつ織斑君の紹介で五反田君と知り合うことになった。こちらも簡単は自己紹介をして緑茶をまた啜った。食後の緑茶うまー。

「あ、そツスカ。…あれ？でも…失礼ですけど九重先生は男、ですよね？」

「ああ、そうだが…ああなるほどISを教える学園で男の俺が教師をしていることが疑問か？」

「えっ？えっと…その…はい。…すみません」

「くくくつ、なに、気にしてないよ。…だが、すまないが詳しくは話せない。ただの教師と覚えてくれればいい」

「は、はあ…わかりました」

「織斑君も軽々しく口外しないように。いいな？」

「は？えっと…はい。わかりました」

織斑君…絶対に間違っ^{コイツ}て理解しているだろ。予め口止めしていな

かった俺にも落ち度はあるが鈍いにもほどがあると思うんだ。君が鈍いのは女性関係だけでいいんだよ。察しろよ、日本人。思い遣りはどこ行った。

俺が伝えたいのは“男性でISを使う教師が居ることを秘匿しろ”と言う意味だ。対して彼の表情を読むに“学校の先生とは言え個人情報だった。マズイかな”くらいにしか考えていなさそうだ。

彼の勘違いを正すべきだろうか、と内心で一考していると彼の友人である五反田君と目が合った。彼は苦笑一つして口パクで言い触らさないことを伝えてきた。…なかなか理解のある少年だ。織斑君とは大違いだな。

「…店主」

「へい」

「…いい孫達を持てて幸せだな」

「……………」

俺がそう絶賛すると店主は何も言わずにデザートメニューの一つ“杏仁豆腐”を出してくれた。言葉にするのが照れ臭いからって行動で語る店主に俺は…。

「ふっ、頂こう」

…ありがたく頂くことにした。人の厚意を無碍にするヤツはドブ、いや肥溜めに落ちてしまえばいいのだ。寧ろ俺が叩き込む。そして叩き込んだあとに土を掛けてやる。いい肥しになるだろうさ。

因みに出された杏仁豆腐だが、口にした時の感想としては…美味しかった、の一言に限る。程よい甘さで舌触りもツルツルでプルン

としていた。

「店主、馳走になった。今後も臍原にさせてもらおう」

「へい。…お待ちしておりやす」

流石にそろそろいい時間だったので代金を置いて立ち上がり出て行くことにした。料理の確認のつもりだったのに予想以上に長居してしまった。ついでに店を出る直前に思ったことを伝えることにした。

「ああ、そうだ。織斑君」

「へ？何ですか、先生」

「着飾った女性を見たら最初に褒める。これは年長者からの助言だ」

「は？え？褒める？それはどういう…」

「……………はあ」

まったく織斑君の目は節穴か。五反田妹を見ても。チキンと見なくてもわかるほどに気合を入れて着飾っているじゃないか。これを見て褒めないのは男とは、紳士とは言えない。そいつはゲか、もしくはホだ。

近くに居る五反田妹に視線を向けた。その時に目が合ってビクツと反応したのがこの子を小動物のような印象を抱いた。

記憶が正しければ確かこの子も織斑君に好意を寄せていたはずだ。ならば一言くらい好きな人から可愛い、綺麗だ、の言葉が欲しいだろう。そう思っただけ織斑君に助言した。したけど意味わかってないだろうな！。

「知っていると思うが織斑君はコレだ。君も苦労すると思うが励み

たまえ」

「えっ？あのっ…私はそんなっ…！」

む？しどろもどろになっている？なにやら慌てさせてしまつて…
ああ。いや、すまない。流石に本人を前にして頑張りますとは言えないよな。これは俺の配慮が足りなかった。ごめんね？

「ふむ…俺の勘違いだったならそれでいい。…まあ、がんばれ」

「えと、あの…は、ひゃいつ」

「くくく。いい返事だ。…ではな」

「あ、ありがとうございましたっ」

五反田妹の元気な声を背中に店を出た。また今度ここへ来るとしよう。ここは店の外見が小さく小汚いが料理の質はピカ一だった。看板娘の五反田妹もいい。星三つだ。

なんでアレだけのクオリティを出しているのに店舗を増やさないのかとか、店を大きくしないのかとか、思ったことは多いけど、これは言わぬが花だろう。

料理人の一人一人に自分だけの誇りがあるように店はその誇りを形にしたもので拘りの表れだから。

……。

……。

数日経ち、今月には学年別個人トーナメントが予定されている。大きなその催し物は一週間掛けて行なわれる。そしてこれはそんな開催日に近付いたある日“おもしろい噂話”が耳に入ってきた時の

話した。

「織斑先生、聞きましたか？」

「ん？なにをだ？」

朝の職員室で織斑先生と山田先生を相手にした会話だ。最も山田先生はこのあと直ぐにある授業の用意で聞き役になっているけどね。

「学園中で噂になっているのですが、なんでも学年別個人トーナメントで優勝した子は織斑君とつき合える権利を貰えるそうですよ」

「…な、なに？（一夏と付き合う権利、だと？）」

最も織斑君本人はそのことを知らないようだったけどね。非公式な景品とでも言えばいいのかな。実際は“邪魔されず”にアプローチをかけられる権利と言う感じだしさ。

「くくくつ、可愛いものじゃないですか。俺はこういうバカ騒ぎキライじゃないです」

「…………ほ、ほう？（私のい、一夏が？な、なに？）」

似たようなバカ騒ぎは家族と一緒にやってやったことあったから慣れているしキライじゃない。迷惑にならない程度なら楽しいことはトコトン追求したものだ。

「どうやら俺の担当クラスにもその話を知って特に熱心なのが居ます。まあ誰かは織斑先生も知っているとは思いますが」

「……………」

このISの世界ではどこをどう間違ったのか俺は教師になってしまった。後悔はしていない。生徒としてIS学園に入学するのに比

べれば断然マシだし。この世界で戸籍を作った時は時期が時期だから俺の年齢設定は三十路なんだよ。

それでまあ教師になって初めて受け持ったクラスだし、その生徒の一人が意中の相手に振り向いてほしいと頑張るなら応援したいじゃないか。具体的に手を出すわけには行かないけど気持ちだけでもね。

「教師としてどうかとは思いますが“色々”とおもしろそうですから俺はその子を応援しようと思うのですよ」

もうホントに面白そうだ。色々とトラブルに巻き込まれる織斑君とそれに追隨する少女達。くくくつ、本当に色々と面白くなりそうだよ。

「……………か……らん……………はや……………る」

「だから、ん？どうかしましたか、織斑先生？」

織斑先生が若干俯きながらブツブツと言いつつ出していた。気のせいかな、身体もプルプルと震えている。え、なにこれコワイ……。

やっべ……忘れてた……。織斑先生は重度のブラコンだった。こんな話をする気はなかったのに……。ごめん、ウソです（笑）。忘れていたのは事実だけど悪いとは微塵も思っていないし、考えてない。

「や……………！いち……は……………ん！ま……………すぎ……………！」

「……すみません。もう一度」

「やらん……！一夏はやらんぞ……！まだ早過ぎる……！ああ、まだ早いとも……！」

「…………………………は？」

いやー、予想通りとは思っていたけどここまで啖呵切ってくれるとは思ってなかった。ここまで豪快にやってくれるとは男前ですな。俺も見物の甲斐があるというものだ。決して口にも表情にも出さないけどな！

……因みに織斑先生？忘れているかもしれないけどここは職員室ですよ。

「ああっ！？いや、すまない。忘れてくれ……」

「はあ、いや、しかし今……」

「なんでもない！忘れる！」

「はあ、まあ構いませんが……」

ここでやめるのがコツだ。これ以上やると山田先生のように制裁を下されることになりかねない。そんなのはゴメンだ。人をからかう時は何事もギリギリの加減を覚えることが肝心だ。

丁度この時、山田先生の用意が一段落したようであしからず話しかけることにした。できたら上手く誘導してちよつと織斑先生のガス抜きに付き合ってもらおうと思う。

「山田先生。もしかして織斑先生は……」

「え？……ああ、ええと。はい、先輩は織斑君のことが大好きなんですよ」

「ああ、やはり……」

嬉しそうに答える山田先生を見て確信した。これなら簡単に誘導できる、とな。俺がそんなある種腹黒いことを考えているとは知らない山田先生は尚も楽しそうに話し続けた。

「ふふふ。先輩は織斑君をととても大切に思ってるんです。あ、実はこの前のクラス対抗戦の時なんか心配の余りコーヒーにお塩を入れてしまったんですよ？おかしいですよね」

「それはなんとまあ……」

「あ、でもですね。先輩はそういうのでからかわれるのが」

突然山田先生の顔に掛かる影。殺人的ではないにしても暗く、でもどこか楽しそうな圧倒的なプレッシャーを感じる。言葉を途切れさせた山田先生が顔を上げるとそこには……

「面白そうな話をしているな。ええ？山・田・君？」

関羽、もとい冥王、違う織斑先生が居た。それもいつも通りの表情なのに全体的に笑っているような印象を受ける。……でも、目だけが確実に笑ってない。そんな雰囲気の織斑先生に気付かれないように俺はその場を静かにサツと離れた。

「ひゃうつ！？せ、先輩っ！？これは、そのっ、あのっ、えとっ……」

「前に言っただけだな。私はからかわれるのが嫌いだと、な」

「あうつ、あうあうあうつ……」

絶望の表情をした山田先生と生贄の子羊を前にした捕食者、織斑先生。職員室にはいつの間にか二人以外の人の姿は居なくなっていた。雰囲気を敏感に察知して離脱したようだ。当然、俺も最後にだが気配を絶ち、静かに職員室を離脱することに成功した。

そして無事に職員室をあとにした俺が思ったこと、それは……。

「ふっ……計画通り」

さて今日も気持ちよく授業をするのでしょうか…。

これで織斑先生も少しは俺がからかった分のストレスを、山田先生を生贄にすることで発散することができるだろう。からかったあとにはキッチンとアフターケアもする俺って気配り上手じゃないか？

……。

……。

学年別個人トーナメントを今月に控えた時。これはとある日に行なわれた放課後の職員会議に知らされたことだった。

「…転校生、ですか。え？また？」

「ああ。フランスとドイツから一人ずつだ」

ああ、デュノア君とボーデヴィツヒ君ですね？わかります。配られた転校生の資料に目を通して思うのはもうそんな時期だったかということ。

ラウラ君は元気にしていただろうか？レーゲン型は上手く稼動しているだろうか？それとも更に「ドイツの科学力は世界一いい！！」とでも言って発展させているだろうか？気にはなるが資料にはそこまで記載されていない。

ラウラ君か…。数年前に日本でむしゃくしゃしたことがあって、その勢いでドイツ（軍事施設）へ旅行（不法入国）に行つてピクニック（演習場）した時に出会った小柄な少女のことを思い出す。

…が、それも一時のこと。今は会議のことに集中しよう。

「どちらも受け入れ先は一年一組を予定している。異議があるものは居ないか？」

「…俺は構わない。皆さんはどうか？」

一応、聞いてはみるものの反対意見は出ないことはわかりきっている。この場で織斑先生に意見できる者が居るものか。案の定、会議室に居る人はそれぞれが肯定的なこと言っただけで賛成している。

別にそれが悪いわけじゃない。権力やコネ、名声などは旨く使ってこそ役に立つというものだ。そしてそれを卑怯と罵るのは簡単だけど、それは意志も実力もない、何も知らず駄々を捏ねる子供と変わらない。

ゆえにESにおいては開発者に次いで名声や榮譽を持つ彼女、織斑・千冬の言葉に否を唱える人は居ない。…この場を支配する“ブリュンヒルデ”の言葉に意見できる人が居るものか。

俺はどうでもいいから即座に賛成した。正直に言ってそうポンポン転校生が来られても授業内容を調整したり二組の“絶対意思統一”に支障が出る可能性があるかもしれない。そうなると調整が面倒だから勘弁してほしいと思う。

……因みに鳳君は無理だった。ヒロインは我が強過ぎるんだよ…。

「……ではそのようにしよう。この二人は、言った通りに私が受け持つ」

「それでは会議はここまで。今日もお仕事頑張りましょうね」

最後に学園長の言葉で会議は終了した。予定通り、事は運ばれたようだ。二人の転校生は織斑先生と山田先生の担当する一組に編入されることになった。

……山田先生、ご愁傷様です…。書類処理がんばって。

……。

会議室を出て、二組を目指して廊下を移動する時に考える。先程、会議で出てきた名前…。

「……ラウラ……ボーデヴィッヒ、か」

あの寂しんぼがどこまで成長したのかに少し興味がある。出会いから別れまで大体一〜二週間くらいだったけどヒロインの一人らしく私の強いこと強いこと…。その癖、一人はイヤだ、と言う寂しがり屋だ。

出会ってから後半はウサギのような印象が残るラウラ君だがラムエルさんの情報によると立派に部隊長さんをしているらしい……。……が、心配だ。あの子って生まれてからずっと軍の中で育ったから何気に常識に疎いところがあったから…。

「まあ今更俺が心配しても仕方ないことか…」

それに俺が出会ったのは彼女がまだ小学生くらいの年齢だったから彼女は覚えてもないだろ。関わったのは僅かな間だったから。俺との“記憶”も教官をした織斑先生との“思い出”に塗り潰されているはずだ。

……少し寂しいものがあるけど再会しても、まず思い出さないだろう。

しかし、試験管ベビーとかはどうでもいいけどあの子に未熟なナノマシン技術を使用したドイツの科学者には憤りを感じたものだ。投与されたナノマシンも突然変異しているから削除も変更も危ないしさ。アレは…下手したら失明ものだ。

「手が出せないのは痛かった…」

ドイツ軍所属というのが痛い。そんな肩書きがあることから下手に治療もできない。

できたとしても科学者共が“なぜ再適合したのか？”と考えて試験管ベビーなのをいいことにラウラ君をモルモットにするかもしれないから。

それに治療するだけして知らないフリをするのは後味が悪い。でも近い将来家族のところへ帰還する俺では最後まで彼女の安全を確保できない。そして“帰らない”という選択肢は…無い。

彼女を助けたら後ろ盾となる確固とした後見人が必要だ。

…それは。

「織斑先生は…いや、ダメだな」

嘗ての教え子のためだ。頼めば何のかんの言いながらも引き受けてくれるだろう。でも、あの人はたださえ弟の織斑君という“枷”がある。これはブラコンの織斑先生にとって万が一の時には致命

的になりかねないほどだ。

責任感の強い彼女のことだ。最大限、保護対象を守ろうとしてくれるだろう。それでも織斑君と比べた場合はわからない。何かあった時に選択を迫られれば最後に選ぶモノで絶対に迷うことになる。

それに表向きは織斑先生、一人でも保護可能かもしれない。…では裏側は？手段を選ばなければやりようなどいくらでもある。ただし、これはそこまでする価値が研究対象ラウラにあると仮定した話した。

……こればかりは科学者の好奇心（資質）による。マッドとか…。

まあ現状を考えるにラウラ君の左目、ヴォーダン・オージエ越界の瞳は無闇に用いなければそこまで不自由はなさそうだ。今のところは無理して再調整する必要はない。…何かあればその時に考えればいい。

「ラウラ君…」

…幸せを掴み取れ。人の生まれなど大して意味などない。それを決めるのは本人だけだ。だから…いや、だからこそラウラ君に気付いてほしい……。

……願わくはあの子に幸多からんことを。

第9話「ほのぼのが来ちゃった」(後書き)

どうしてこうなった？

ほのぼのを書いているつもりだったのに葵が腹黒くなっている件について…。

とある葵の休日と職員室での出来事、最後に転校生のことを書きたかっただけに…。

解せぬ…。わからぬ…。不思議でならぬ…。

まっ、こうなったものは仕方が無いのでキツパリと諦める！（えー…）

ではでは！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第10話「過去バナが来ちゃった」前編（前書き）

小説版ISの三巻を読み返していたら突然書きたくなった。

しかも前編後編というガンバリですよ？ハハハ、笑えるわ…。

これもう勢いで書いたから物語の整合性とか度外視にしちゃったぜい！

マジ今後はどうしようかね…。

ではどうぞ！

第10話「過去バナが来ちゃった」前編

一人の少女が泣いている……。暗い……暗い……暗い……。誰にも知られないように泣いている。暗闇に座するは銀の少女。少女の名前はラウラ・ボーデヴィツヒ……。生誕時には記号と番号で呼ばれていた少女だ。

それは小さな切欠。それは小さな勇気。それは小さな誇り……。

これは過去にとある男と少女の出会いのお話した。

……。

……。

突然だが俺、九重・葵は今、日本から遠く離れた国外の森の中を歩いている。視界に入るものは木、木、木……周囲にあるのは木ばかりだ。あと見えるものと言えば……木々の隙間から見える空くらいか。

なぜこんな森の中を散策しているかを言うとだ。日本にある研究所に居た時ちよつとしたことが起きた。日本の所有するISの一機がウチの研究所にあるのをどこから嗅ぎ付けたいとある組織が襲撃してきた。

「……ホントしくじった。現代日本でラミエルさんの荷電粒子砲をぶつ放したのは失敗だった……」

『はあ、我が主、最初に確認しただろう。本当にいいのか、と。今更後悔するでないぞ』

「わかつてる。わかつてるって……。でもね？少し虫の居所が悪かったんだから仕方ないだろ。一発ぶつ放してスッキリしたかったんだよ……」

ラミエルさんに言われなくともそれくらいわかつてるよ。まったく……。大体あんなのがウチに來なければこんなことにもならなかったんだ。

なあにが“^{ファントム・タスク}亡国機業”だ！おとといきやがれ！ちよーっとウチの研究所が小さいからって楽にウチの子（IS）が手に入ると考えやがって！嘗めるのもいい加減にしろっての！

それが気に入らなかったから勢い余ってラミエルさんの荷電粒子砲をぶつ放したんだ。ついでに研究所とその周辺に設置した防衛エリアも全力稼働させて肉体的にはほぼ無傷、でも精神的に限界まで追い詰めて追い出してやった。

勿論、証拠は残さないようにやったし、この世界では色々と面倒だから死なないようにラミエルさんの荷電粒子砲も威嚇程度に抑えた。生身で直撃しても軽度の全身火傷くらいだ。精神は重度の鬱^{トラ}状態に陥った可能性があるけど俺は知らん。

……あれ？俺は何かヤバイ組織をコテンパンにした気がするけど気のせいかな？

『それがわかっているならば、ほとぼりが冷めるまでは静かにして

いることだ。態々そのためだけにドイツくんたりまで来たのだからな」

「いやー、長時間プロテアに乗っていたから背中がバキバキするね。お陰で寝不足……」

『嘘を吐くでない。我に操縦を任せて我が主は到着までずっと寝ていたではないか……』

いや、ね、寝不足なのは本当だぞ？プロテアの操縦席はできる限り快適な空間になるように設計してあるけど……あれ？意外と快適に過ごせたかもしれない。それでも寝足りないって。……ああ、ここがドイツだから時差があったのを忘れてた。

「……………ところで今居るココはどこら辺になるのかな？」

『あからさまに話題を変えたな。……まあいい。ここは……………』

なんだ？イキナリ黙ったりして。話題を変えて意識を逸らそうとしたことが気に入らなかつたのか？それくらいで　　っ、いや、これは……この気配は……。

「……………ラミエル、何があった？」

『多数の熱反応がこちらに接近中だ。内二つはエネルギー反応が高い上に高速で向かってきている』

「その二つは今話題のISかもね。でもなんでこっちに来るんだ？」

俺達の何を感知された？熱光学迷彩とラミエルさんの電子迷彩で乗ってきたプロテアの擬装は万全だったはず。仮に察知されたとしても億分の一くらいの確率だ。

考えられるのはこちら辺が何か特殊な施設、またはその近辺であること。そんな場所でプロテアをラミエルさんの中へ格納する時に

僅かに擬装が剥がれた、とても想定しない限りありえない。

『???何を言っている。ここがドイツ軍基地近くにある演習場だからではないか』

「……はっ?えっ?聞いてないっ!」

『言おうとした時に彼奴らが来たのだ。仕方ないではないか』

それは…、と口にしようとして飲み込んだ…と言うかなんでこんな場所に降りたのさ?想定した中で特殊も特殊、軍事施設って何さ…。ここまでの操縦を任せっきりだったからってラミエルさん絶対狙ったでしょ。

軍と思われる部隊がこんなに早く接近してきたことから推測するに彼ら、彼女らが演習中のところに僅かの間とは言え正体不明(俺達)の反応を感知したのか。なんと言うタイミングの悪さだ…。

『それよりも、だ。どうするのだ?他はともかく先行する二つの反応がもう直ぐ接敵するが』

「むむむ…」

ここで揉めるのはマズイ。知らずには言え不法侵入しているのは俺達、(ラミエルさんは知ってたけどね!)だし。ここは一度素直に投降して敵意が無いことを証明、その後に身分を明かして解放してもらうのが安全か。

あー、でもでも、軍の取調べとか尋問って時間をこれでもかっつくくらい掛かるからな…。拘束時間は警察とは比較にならないくらい執拗にやってくる。軍イコール暴力と言ってもいいくらいだし。

「…一度接触してこちらに敵意がないことを示そう。拗れたら……」

…逃げる」

『Roger, My Master…敢えて忠言するが少々弱腰ではないか?』

「迎撃も逃走も十分に可能だ。だけど何の用意も無く軍事施設に侵入して法を犯したのは俺達だ。一応は謝罪の姿勢を見せるべきじゃないか」

『Roger…』

だが保険は必要だ、と言うラミエルさんに心配性だなと思って苦笑してしまった。同時に頼りになる相棒が居て喜ばしくも感じたのは言わずともわかるだろう。

……。

ドイツ軍部隊との接触まで残り僅か…。わんわんっ、にゃーにゃーっ。

……。

それから数分後、俺はある意味危機的状況に瀕していた。

「…繰り返し返す。武装解除しろ。そのあとで頭に両手を置き、ゆっくり跪け」

「下手な真似だけはするな。少しでもオカシナ動きをしたなら風穴が開くぞ」

目の前には形状などからの推測でしかないけど恐らくドイツの第三世代ISの試作機の二機と向かい合っているわけだったりする。人ひとりにISを二機って俺はどういう状況下でここに来たんだ…。

チラッと観察してみるとやや形状が違うけど二人ともISを装着しているのは同じ、それぞれの外見は小柄な十代前半と歳相応の体格をした後半の子が一人ずつだった。因みに小柄な子は可愛いしもう一人も美人さんだ。

……だけど、これは。はあ…。

どうしてこうなった、と考えてしまうのは仕方ないと思う。俺は今ISの銃器（それも肩部に装備された大砲のような電磁^{レールガン}投射砲だ）を向けられている。ホントどうしてこうなった。

「おい！聞こえてるのか！……まさか、とは思うが言葉が通じないのか？」

「いや、大丈夫。わかるわかる。えっと…」

彼女達の言っていることは理解している。コミュニケーションの一つである言語は自動でラミエルさんが情報を収集、変換して俺の補助脳にアップロードしてくれるから会話や読み書きを不自由なく行なえるようになっていく。

……ラミエルさんが居なかった昔は補助脳のナノマシンが頑張ってくれていたなあ…。

それでさー、敵対行動らしいことはしていない。一応は演習場に不法侵入したのはすまないと思う。俺だって自分の領域に土足で侵入されたらついでムカツとしてプツツと潰すように指示しちゃうかもしれないからさ。

でも何も話し合わないうちにここまで高圧的に命令される覚えは……いや、これは軍隊なら当然か。ともかく、自分でもどうかと

思っけど割と我侘な俺は高圧的に命令されるのが嫌いなために今とてもイライラしているわけだ。

それでも俺は年上だ。冷静に、理性的に、紳士的に。これでも小さな子をあやすのは得意なほうだからな！余裕………かもしれない！それでは…。

「…んんっ。知らないこととは言え無断で踏み入ったことは謝罪するけど、これは…」

「黙れ！貴様の言い分は拘束して基地に連行してからゆつくりと尋問してやる！それまで黙ってこちらの指示に従えはいい！」

「oh、マジか…。可愛いのにちとキツイのな。そっちの美人さんも同じ意見？」

「びじっ！？　んゝんゝっ！………そうだ。何を目的としてドイツ軍の演習場へ侵入したのかは知らない。しかし私達は軍人だ。身元不明の怪しい人物が居たら排除ないし拘束くらいはするだろう」

「お姉さつ、クラリツサ中尉！喋り過ぎです！」

「いや、しかしな、少尉…」

今、少尉と呼ばれた子“お姉さま”って言いかけたよな？え？なに？お二人はつまりそそそ“そーゆーご関係”でいらっしや。

「　　ッ！違う！貴様の考えていることは完璧に間違っている！！」

人の考えていることを読むなし………と言っかなぜにわかったのか。魔法的にも科学的にも精神防壁は万全のはずなんだけど。………あー、なるほど。これがギャグ空間というやつなのか。

「え？…そう、なの？」

「そうだ！以後、変なことを考えるな！いいな！？」

「は、はあ、わかつ」

「一副隊長（お姉さま）！その男と馴れ馴れし過ぎませんか！？」

「お前も黙れ！今だけは黙って任務を果たしてくれ！頼むから！」

「一副隊長（お姉さま）！　　っ！」

「少尉！　　っ！」

今なんか二人が揉めてる？これは俺のせい、だよなー……。恨むぞ、ラミエルさん。まったく、こんなところに着陸しやがってからに。何が悲しくて遠いドイツまで来てズーレー（勘違い）な人達の仲裁をやらなければならないのか。

「はあ……あー、なんか揉めさせたなら謝るから落ち着かないか？」

「私は落ち着いている！大体、貴様のような不振人物が居るから！」

「いや、だからゴメンって謝ってるだろ。機嫌直せよ。あ、アメちゃん舐めるか？ほら」

これはエヴァちゃんという前例があるので今は常に在庫を常備している。手間はそれなりに掛かるけど口寂しくなったら俺も食べるしね。美味しいものに妥協はないのだよ。ふふふのふ。

それでカッパと元気な少尉な女の子も甘い物でも食べればそのイライラも落ち着くと思っアメちゃんを渡そうとした。親切心からISを装着している彼女のために包装も取ってあげてね。それなのに……。

「そんなモノはいらん！！」

「　　あ……？」

差し出した手は叩かれた。弧を描いて宙を飛ぶ琥珀色の飴（蜂蜜配合）が地面に落ちる。咄嗟のことで俺はそれを視線で追うことし

が出来なかった。現実を認めた、その瞬間 意識が飛んだ。

……。

「暫くお待ちください」

……。

はっ？…俺は今まで何を？

意識が戻ると目の前には顔を真っ赤にして激しく息を乱して倒れた少女。確かクラリッサ中尉は少尉と呼んでいたか。何があったし…。

「はぁ…はぁ…んくっ…はぁ…あぁんっ…」

うつわっ…！見たところ十代前半の少女がISを装着して息も荒く恍惚とした表情をして悶えている。可愛い子だし、尚且つメカっ娘好きの俺には堪らないね！ゴチソウサマです！

「あの一、これは一体…？」

「ヒッ！？す、すすすすみません ……アメを！食べ物を粗末にしてゴメンナサイ…！だから、だから…！！」

「ちよっ！？中尉さん落ち着いて！？あーもー！本当に何があった！？？」

ここから更に中尉さんを落ち着かせるのに時間が必要だったのは言うまでもない。

すっごい不本意だけどね！？…なんで拘束されるはずの俺が逆に慰

めているのさ！！普通に考えて逆でしょ！？怯える俺！追い詰める
軍人さん二人！この構図が今は正しいはずなのに…なんで一人は！

「はあ…はあ、んっ…もつと…」 悶える少尉の少女。

「……………」 絶句する俺。

って！悶えて潤んだ瞳で見てくるし！！この子に一体何があった
！？俺の知らない間に何があったんだ！？そのことで話を聞きた
いのにもう一人の中尉さんは！

「ごめんなさい御免なさいゴメンナサイ！！」 何かに怯える中尉
さん。

「……っ！……！！………っっ！！」 必死に慰める俺。

もう意味がわからない。もうこのまま逃げ出そうと考えた時にそ
の子達は来た。後続と思われる部隊が中尉さん達に追いついてきた
らしい。

「な、なんなんだ？これは…」

「ああ、よかった！中尉さん達のお仲間さんか？もう違っててもい
いから何とかしろ！」

「あ、ああ。おいっ！中尉！中尉っ！ええいっ！クラリツサ・ハル
フォーフ中尉っ！」

「ごめんなさ ……？っ、あ、ああ、た、大尉…？」

えゝっ！？大尉？この小さな子が？ん？んんっ？……中尉さんに
大尉と呼ばれた子をよく見てみる。赤い瞳、左目に眼帯、長い銀髪、
小柄な体型、これらにどこことなく覚えが…。

……ここはドイツ…そして軍の演習場…も、もしかして…？

クッ！ラウラじゃないか！まだ原作云々までまだだとしても随分と小柄だな、おい！一瞬この子のことが幼女に見えた！実年齢は聞いてみないとわからないけど今の見た目は十歳くらいに見える！か可愛いじゃないか…！

「…中尉さんも立ち直ったみたいだ。…俺は行くぞ」

「あ、おいっ！待て、って速いな。もう見えないではないか……」

待てと言われたけど止まるつもりはない。気分は瞬時加速のようにビューンと駆け出した。これで直ぐに追いつかれることはないだろ。

ハッキリ言うの意味のわからない二人を見てから、もう色々と面倒になってきたから今の内に逃げることにした。混乱している今ならそれくらい容易いと思ったしね。

……目論見は見事に成功だぜーっ！やつふうううッ！！

……。

葵が走り去るのを呆然と見送ってしまったラウラ達は暫し混乱してしまった。ISがあればラウラ自身が飛び出して拘束に掛かるのだが今彼女に割り当てられたISはオーバーホール中でここにはない。

「第一小隊はこの場にて警戒！残りは今逃げた男を追跡、捕縛しろ

！」
「……了解……」

ラウラはハツと我に振り返りすぐさま指示を飛ばした。訓練で染み付いた隊員はラウラの指示に無意識に反応し行動を開始する。

森の奥へ消えて行く部隊を見送りながらラウラは考える。鉄火場を想定した場面ならば訓練もしているので混乱も少ないが、現代兵器最強と言われるISを装備した兵二人が“何かしら”の行為で無力化されていた。

それなのにISに損傷も無ければ装着者に怪我らしいものもない。だが両者ともに精神的に追い詰められた(?) ような印象をラウラは受けた。このような事態は想定してない。振り返り二人に報告を促す。

「……中尉、それに少尉も。ここで一体何があった？」

「こ、ここで…？それは」

「ラウラ隊長。わ、私達は」

二人の言うことは要領を得ないことにラウラは頭を捻えることになる。少尉の「すごかった。とにかくすごかった。…はふう」や「もうお嫁に行けません！」などは軍人として優秀だったラウラはまだ幼いこともあり意味がわからない。

少尉の報告に見切りをつけて普段からハキハキと簡潔に報告する副隊長のクラリッサに説明を期待した。ただ、この時の彼女すら「お残しはいけません!」、「アメちゃんコワイ。アメちゃんコワイ…!」と要領を得ないことばかりだった。

「ん？んむ？ともかく逃げた不審な男を追えばわかる、ということの間違いなのだな？」

「は、はい…」

「その通りです…」

ラウラはこの時なぜに少尉が全身を赤くしているのかわからない。もう一人のクラリッサはどこか恐怖と好奇心が抑えられないような印象がある。ラウラは内心で「今日は何なのだ…」と密かに嘆いていた。背中に哀愁がある。まだまだ若いのに不憫な…。

「不明瞭な部分もあったが…大体の事情は理解した。我々も男の追跡に行くぞ」

「了解！^ヤ」「」「」「」

ISを装備した二人を先行させてラウラは第一小隊を率いて素早く追跡を開始した。無線で追跡させている隊員から現在位置を聞いてあとを追う。

皆が走る中、ラウラも同じく走る。考えるのは今日行なわれ中断された総合演習と自分に配備されたISのことだ。

遺伝子強化試験体C-0037…それが“ラウラ・ボーデヴィツヒ”と呼称される前の名前（記号）だ。ただ戦うために作られ、育てられ、鍛えられた存在。それが彼女だ。

そして今日行われた総合演習自体が中断されたことに軍人として不謹慎だがラウラは心のどこかでホツとしていた。

ISの登場前までラウラはあらゆる訓練において優秀な成績を常に示してきた。それは女性にのみ扱うことのできるISを扱うことでもラウラ達の部隊は特に期待された。

現在兵器を遙かに凌駕するISに多大な興味を持ったドイツ軍内

の一部ではとある研究がされた。それが“ヴォーダン・オージェ”
というISの適合性向上を目的としたナノマシン処置だ。

“ヴォーダン・オージェ”とは言ってしまうえば肉眼にナノマシン
を移植することでハイパーセンサーを擬似的に劣化再現したものだ。
そしてこの処置をした目のことを越界の瞳とも呼ばれる。
ヴォーダン・オージェ

だがラウラは理論上、問題ないはずのナノマシン処置に適合しな
かった。彼女の左目は通常ではありえない金色へと変色し常時稼動
状態のまま、それも制御不能になってしまった。

この処置こそが今まで成績トップを直走っていたラウラを出来損
ないと詰られドン底へ叩き落した原因となったものの一つだ。

新たに始まったISの訓練において今までと違い他の隊員から大
きく後れを取ることになった。トップだった時に散々見下していた
相手からは嘲笑と侮蔑が巻き起こり、追い討ちに皮肉を込めて“出
来損ない”と呼ばれた。

今までの自分はなんだったのか、とラウラは悩み続けている。時
間の許す限り訓練を続けた。それでも左目のせいで満足な結果が得
られない。そしてそんな弱い自分に嫌悪している。否、それは最早
憎悪と言っても過言ではない。

そんな気持ちでマトモな成績など出ない。それに職業軍人として
任務に支障は出さないが部隊員との見えない確執も生じて溝が埋ま
らないままだ。こんなことで高い評価も出ないし演習をする意味も
薄い。

だから彼女、ラウラ・ボーデヴィツヒは今度の騒ぎに安堵した…。

……。

一応怪しまれないように人並み（それでも速い…ウマ？）の速度で走って逃走した。森の中だから木々の根や岩、苔などで走り難いっ
つたらない。

「はー…ここまで来ればもう大丈夫、だよな…？」

『そう離れていないので安全とも言えない。そもそも我が主と我であればあの程度の雑兵など一振りで終わりであろうよ』

「ラミエルさんは俺に指名手配犯になれとでも言うのか…」

『何を言っている？証拠さえ残さなければ問題はあ
るまい』

うわー、この子キツパリ言い切ったよ。何言ってるの？と、まるで当たり前のことを言うような態度で彼女が言ってきたよ。もうなんなの、この子？この世界には今俺達しか居ないんだよ。バックアップや避難場所となる艦船もない。

……それに「工房」が無いのが痛い。

アレの中には大概のモノがあるから。「無限倉庫」とかその最たるものだと思う。過剰資源はそこに放り込んでいたしね。機材も…
って今言っても仕方ないことか。あ、でも、近いうちに通信だけでもしたいな。

「
は？」

ちょっと油断していたようだ。休憩していたら草木を踏み締めるガサツという音が聞こえた。音が大きいし広範囲に渡っているから人数も多いことが予想される。これではまるで山狩りだ…。いや、

それそのものだけだね。

『ふむ…追いつかれたようだな』　ワクワク、ドキドキ、ソワソワしてるヤツ。

「……なんでラミエルさんはそんなに楽しそうなのかなー？」

『ふふふ。当然だろう？小規模とは言え軍隊が相手だ。長らく不慣れな電子情報の操作などしていたが、このような場面だ。兵器として心が躍らなくてどうするか』

「ラミエルさんは兵器じゃなくて護身用なんだけど…」

ラミエルさんは護身用です。例え、大小様々な荷電粒子砲を搭載していようが、無数のミサイルを搭載していようが、彼女の身の内がプチ倉庫と化していて無人機動兵器から自動人形までが入っているようにも護身用です。それ以外の意見は認めない。

『護身用でも武器には違いあるまい。気にすることではない。そもそも話し我は我が主を守護するモノだ。敵性体に先制攻撃をして何が悪いのか』

だと言っのにラミエルさんはこうものたまうのよ。この子は本当になんなの？どこで育て方を間違えたのだろうか…。デバイス化したのが間違いだったのか？こんなに好戦的になってしまっってこの先どうしたらいいのか。

……学習方針を変更することも視野に入れて考えるべきだろうか。

そしてラミエルさん先制攻撃で荷電粒子砲をぶっ放すのはいいとしても生身の人間に撃ってはいけない。キチンと加減はしてくれ。身元確認ができないから困るんだよ。

「こわい。こわいなあ…。でも面倒だからって逃げちゃったからなあ…。やるしかないか」

『ふむ…。我が主よ、敵接触まで約150mを切ったようだ。迎撃するが良いか?』

「はあ…。迎撃を承認する。ただし、原則として非殺傷兵器を推奨」
『Roger, My Master』

これから戦闘だ、と張り切っていた時に俺が非殺傷を押したから気分を削がれて少し不満そうだ。それでも役目を果たそうと彼女は動き出す。

胸元に居るラミエルさんが俺から離れて30cmほどの大きさになった。それから俺を守るように周囲を回り始めた。さり気なくDフィールドを展開してくれた。

あー、やだなー、久しぶりの単独戦闘（ラミエルさんとは一心同体なんだよ…）か…。何が悲しくて遠いドイツに来てまで軍とガチバトルしないといけないんだよ…。それもこれもみんなラミエルさんのせいだ。ううう…。

「止まれ！そこから動くな！馬鹿なマネなどしないで投降しろ！」

一際、人の気配のある方向を見ていたら銃器を構えた女の子が飛び出してきた。黒を基調とした迷彩色の軍服を着用した彼女は俺に銃口を向けると同時に降服勧告をしてきた。周囲に複数の気配があることから援護も万全のようだ。

「……………【カウント3で行動開始…】」
『……………【Roger…】』

「……【… 3 …】」

念話でラミエルさんに指示した俺は彼女の命令に従い両手を挙げて応じた。視線は彼女の目に固定する。即座に動けるように小さく腰を落として構え歩幅は軽く開いて維持する。

「……そうだ。そのまま大人しくしていれば悪いようにはしない」

「……【… 2 …】」

この時、目の前の女の子は素人目にはわかり難いが小さくホッと息を吐いたのを感じた。

「……【… 1 …】」

『敵を目視距離にて確認。これより“人道的”迎撃を開始する』

その瞬間を逃すことなく俺は走り出す。銃撃を警戒してジグザグ、ジグザグと蛇行しながら、それでも速度をどんどん増しながら駆け出した。

「はっ……？ ……と、止まれっ！」

目の前の子は安堵した虚を突かれて戸惑いが見られる。

走る俺は魔力による身体強化を勿論しているから普通なら目にも映らないほどの速度が出ているはずだ。それに気配遮断もしているから一度死角に入れば細くも難しい。以上のことから並みの人間には俺の姿を見ることが適わないと思う。

「なっ！？消えた！？どこへ ……！」

「ごめん」

「え　　？」

この場に居る全員の視界の死角から死角へ入るように移動して彼女の背後に回り首に手刀を落として気絶させた。

むむむ。やはり女の子に手を上げるのは抵抗が半端無い。僅かでも気を抜いてしまうということは、まだ実戦を経験していないようだ。それでも全体の動きを見る限りよく訓練はされているとわかる。

「きゃーっ！なによ、これーっ！？」

「わーっ！わーっ！ベトベトするーっ！？と、取れない！？」

「何よこの白くてネバネバするのはーっ！？は、張り付くよー！？」

「生臭い！？この白いのなんか生臭いわよっ！？グッ！くっさっ！？」

「わーんっ！もー、いやーっ！！お姉さまーっ！！」

ラミエルさんも飛ばしてるな……。悲鳴が聞こえたほうを見ると俺が敵一人を気絶させている間に彼女は5人も無力化していた。やり方がなにやらえっちいのがなんとも言えないけどね…。

ベトベトしているものは粘着性の強い捕獲ジェルで空気に触れることで硬化するがある程度は弾性に飛んだ特性を持つ。固まるとゴムみたいな感触になる。一種の硬化ベークライトのようなものだ。

白くてネバネバするもの、ってこうして言うとなんだかとてもえっちい感じがするけどこれは別物だ。ただの捕縛用トリモチ弾だし多少粘度があるのは着弾時に広範囲に渡って貼り付け身動きを制限するためだ。

生臭いのは…アレだ。五感の一つである臭覚を強烈に刺激するこ

とで戦闘の意欲を殺ぐ目的がある。相手が女の子ならその効果は抜群だと思ふ。誰だって臭いのはイヤだと思ふしね。

『…敵6名の無力化を確認。…新たな敵影を確認。人道的迎撃を継続する。フフフ…!』

「なんだかラミエルさん、楽しそうだなあ…」

こつも早く追いつかれたということは向こつこの立ち直りが予想よりも早かつたということか。これだから軍人は面倒だ。問題への対処が的確で何よりも対処が早い。本当に面倒だ。

「ん…?この気配は…あのISの子達…うおわっ!?!」

「お、大人しく投降しろ…して下さい!お願いしますっ!」

「……………は?」

出会つた時よりも少尉さんが丸くなつた感じが…。あんなに高圧的だつたのに知らない間に一体何があつたと言ふのか。

……………なんにせよ、だ。イキナリ殴りかかるのは女の子としてどうかと思ふよ?

「少尉…お願いしてどうする?もつと強気でいけ!それでも誇りあるドイツ軍人か!」

「で、でもっ、お姉様っ!この人はっ…あ、あんなことを…」

「悪かつた!もういいから!その先を口にするな!思い出してしまふではないか……………」

「あ……………」

おい。少尉さん?なんでポツと頬を赤く染めておられるのですしょうか?君の言う“あんなこと”って何があつたの?そしてなぜに流

し目でこちらを見る？後ろには屍（ラミエルさんが無力化した女の子達）しかないのだが。

もうマジで意味わかんない。中尉さんも何か言ってるやつて……ってこちらはなぜに俺と視線を合わせないのか……。何があったの？何かされたのか？それとも…… “あの日” か？っておわう！？

「ち、中尉さん？レールカノンをイキナリぶっ放すのはどうかと思うのだが……」

「き！ききき貴様が不埒なことを考えたのが悪い！」

だからなんで心を読むんだよ……。ギャグ空間とは言え理不尽に過ぎないか？クラリツサ中尉。恐らく君ももう直ぐ二十歳だろう。それくらいでうるたえてどうするか。乙女なのも……。いや、可愛いけどね！ギャップがあつていいと思います！

！……だからと言って大口径の砲で撃たれるのはマジ勘弁だけどね！？

「お姉様！？ 撃つならキチンと当ててください！！」

少尉さん、もうお姉様と呼ぶのに躊躇いを微塵も見せないんだね……じゃ、なくて！当たったら大変でしょ！？なにISを使ってただの人を殺害するようなことを言うかな！？いくら俺がISを持ってるにしてもまだ装着してないんだよ！死ぬだらが！？

……ちよつとイラッとした！こつなつたらお仕置きしてやるからな！

「いい加減にしろ！！貴様ら ツツ！！」

「っ　　っ！！（びくッ）」

「知らないとは言えここへ侵入したことは謝罪しよう！だがしかし理不尽に殺されるいわれもない！よって！！」

「「よ、よって？」」

「少し　　オハナシ、しょうか…？」

「「ぴっ！？」」

今更怯えても遅いんだよ。ちょっと怯える二人の姿にドキドキしたのは仕方ないことだ。だって俺はちょいSだしね！嗜虐趣味はないけどちよつといじめたいという気持ちは持っているのさ。

……それに俺だって怒る時は怒るんだってことをわからせてやるんだ…！

「さあ、お仕置きだべええ…」

「「い、いやああ…！！」」

この時、ゆっくりと迫り来る俺を前に怯えた二人の叫び声は森中に響いたことだろう。少しだけ悲鳴を上げるこの子達の姿を見て気持ちいいと思ったのは何かの間違いだ。たぶん。きっと。

……………。

後半に続く…。

第10話「過去バナが来ちゃった」前編（後書き）

過去話の練習と復習です。（キリッ）

…書いたのは勢いだっただけだね！？ｗｗｗｗ

オマケ劇場（笑）！！

本編で”暫くお待ちください”というテロップの中で何があったのか。

少しだけ紹介！それでは！すたああとおお！！

「あ……いや、これは」

落ちた飴玉を見て少し狼狽する少尉。

「少尉！やり過ぎだ！これでは…」

『…はあ。小娘共に警告する。即刻この場より退避せよ』
突然姿もないのに警告だけ聞こえた。

「っ！？」

「誰だ！まだ居るのか！？」

当然探せど見つからない。

「…許せ、ない…」

葵から地の底から這い出るような声が聞こえた。

「なに？おい、どうした？なにが…」

「よくも食べ物を粗末にしゃがったな！！こらああ！？！？」

「ッ！下がれ、少尉！」

「クッ！何だ！？このプレッシャーは…！？」

「いいから下がれ！！何かがおかしい！！」

「あ、ヤ、了かつ！グアッ！？」

強烈なプレッシャーの中動けずに居たところを葵がガツチリと少尉を捕縛した。

「逃がさない…。逃がすわけがない…。逃がせるわけがない!!」

「ぐっ!?ぐああああつ!!」

羽交い絞めにされる少尉。

「アメちゃんに謝れ!!」

「ぐっ!?な、なにを…あつ!?!」

少尉の耳元で叫ぶ葵。腕が少尉の腹部に回された。

「貴様に質問の権利など与えていない!!速やかにあのアメちゃんに謝罪しろ!!」

「あつ?ア ツ!?!?!」

少尉の身体を這い回る葵の腕、手、指…。

「貴様が謝罪するまで…責めるのをやめない!!!!」

「んっ!ああんっ…!?!くはっ…!あ、ああ…!」

爆発的に溢れ出てくる強烈な快楽に翻弄される少尉。

「謝罪しろ!そらそらそらあああああつ!!!!」

「あーんっ!もーっ!いやーっ!あ、ああ…!!本当に、壊れ…ちゃう…!!」

「少尉っ!!」

更なる快楽に翻弄される少尉にクラリッサ中尉の声は臆気にしか聞こえなかった…。

完(爆)!!!!!!

やっちまったぜい!!

後悔も反省もしている。だがやめる気は毛頭ない!(どキッパリ)後半も書かないとな…。

もう少しがんばろっ!

ではでは！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5967s/>

IS / A & R時々D

2011年10月10日14時03分発行